續國譯漢文大成

文學部　四十七

309
65

續入

始

續國譯漢文大成

文學部 第四十七册（第十二帙の三）

白樂天詩集四の三

吉田徐郎氏

309
65

律詩　凡七十五首

寄獻北都留守裴令公　并序○今本遺此一行。誤以序爲題。

北都の留守裴令公に寄獻す　并に序。○今本此の一行を遺し、誤って序を以て題と爲す。

司徒令公分守東洛。移鎮北都。一心勤王。三月成政。形容盛德實在歌詩。況辱知音。敢不先唱。輒奉五言四十韻。寄獻以抒下情。

【訓讀】司徒令公東洛に分守し、鎮を北都に移し、一心王に勤め、三月政を成す。形容盛德、實に歌詩に在り。況んや知音を辱うす。敢て先づ唱へざらんや。輒ち五言四十韻を奉じ、寄獻して以て下情を抒ぶ。

【字解】〔一〕知音　知己といふが如し。

天上中台正。人間一品高。

中書令上應中台。司徒官一品。

天上中台(一)正しく、人間一品高し。

休明値堯舜。勳業過蕭曹。
始擅文三捷。進士及第。博學制策。連登三科。
終兼武六韜。
動人名赫赫。憂國意忉忉。
盪蔡擒封豕。吳元濟也。
平齊斬巨鼇。李師道也。
兩河收土宇。四海定波濤。
寵重移宮籥。自東都留守。授北京留守。
恩新換閫旄。
保釐東宅靜。周公召公東治洛宅。
守護北門牢。
晉國封疆濶。并州士馬豪。
胡兵驚赤幟。邊鴈避烏號。
令下流如水。仁霑澤似膏。

休明堯舜に値ひ、勳業蕭曹に過ぐ。
始めは文の三捷を擅にし、
終には武の六韜を兼ぬ。
人を動かして名赫赫、國を憂へて意忉忉。
蔡を盪して封豕を擒にし、
齊を平げて巨鼇を斬る。
兩河土宇を收め、四海波濤を定む。
寵重くして宮籥を移し、
恩新にして閫旄を換ふ。
保釐して東宅靜かなり、
守護して北門牢し。
晉國封疆濶く、并州は士馬豪なり。
胡兵赤幟に驚き、邊鴈烏號を避く。
令下りて流るること水の如く、仁霑ひて澤膏に似たり。

路喧歌五袴。軍醉感單醪。
將校森貔武。賓僚儼雋髦。
客無煩夜柝。吏不犯秋毫。
神在臺駘助。魂亡獫狁逃。
德星銷彗孛。霖雨滅腥臊。
烽戍高臨代。關河遠控洮。
汾雲晴漠漠。朔吹冷飂飂。
豹尾交衙戟。蚪鬚捧佩刀。
通天白犀帶。照地紫麟袍。
羌管吹楊柳。燕姬酌蒲萄。
荆軻酒出太原。
銀含鑿落盞。金屑琵琶槽。
遙想從軍樂。應忘報國勞。
紫薇留北闕。中書令。即紫微令也。

路喧しくして五袴を歌ひ、軍醉ひて單醪を感ず。
將校森貔武を森にし、賓僚儼雋髦を儼にす。
客は夜柝を煩はす無く、吏は秋毫を犯さず。
神在まして臺駘助け、魂亡びて獫狁逃る。
德星は彗孛を銷し、霖雨は腥臊を滅す。
烽戍高く代に臨み、關河遠く洮を控く。
汾雲晴れて漠漠、朔吹冷かにして飂飂。
豹尾衙戟に交り、蚪鬚は佩刀を捧ぐ。
通天白犀の帶、照地紫麟の袍。
羌管楊柳を吹き、燕姬蒲萄を酌む。
銀含鑿落の盞、金屑琵琶の槽。
遙に想ふ從軍の樂、應に忘るべし報國の勞。
紫薇北闕に留まり、

綠野寄東皐。綠野堂。在東都午橋莊也。
忽憶前時會。多慙下客叨。
清屑陪讌話。美景從遊遨。
花月還同賞。琴詩雅自操。
朱絃拂宮徵。洪筆振風騷。
近竹開方丈。依林架桔槔。
春池八九曲。畫舫兩三艘。
徑滑苔粘屐。潭深水沒篙。
綠絲榮岸柳。紅粉映樓桃。
午橋莊中景物之佳者。
爲穆先陳醴。居易每逢十齋日。在會。常蒙以二勸過代酒也。
招劉共藉糟。劉夢得也。
舞鬟金翡翠。歌頸玉蜻蜓。
盛德終難過。明時豈易遭。

綠野東皐に寄す。
忽ち前時の會を憶ひ、多く下客の叨にするを慙づ。
清宵讌話に陪し、美景遊遨に從ふ。
花月還た同じく賞し、琴詩雅に自ら操る。
朱絃宮徵を拂ひ、洪筆風騷を振ふ。
竹に近きて方丈を開き、林に依りて桔槔を架す。
春池八九曲、畫舫兩三艘。
徑滑かにして苔屐に粘し、潭深くして水篙を沒す。
綠絲岸柳に榮ひ、紅粉樓桃に映ず。
穆の爲に先づ醴を陳ね、
劉を招きて共に糟を藉く。
舞鬟は金の翡翠、歌頸は玉の蜻蜓。
盛德終に過ぎ難く、明時豈遭ひ易からんや。

公雖慕張范。張良。范蠡。
帝未捨伊皐。
眷戀心方結。踟躕首已搔。
鸞鳳上寥廓。燕雀住蓬蒿。
欲獻文狂簡。徒煩思鬱陶。
可憐四百字。輕重鴻毛。

【字解】【一】中台　星の名。【二】休明　美明なり。【三】六韜　兵法書なり。【六】忉忉　憂ふる貌。【七】封豕　大なる豕。吳元濟に喩ふ。【八】巨鼇　大龜。李師道に喩ふ。【九】宮闈　宮殿の鍵。【一〇】關施　大將の旗。【一一】晉國　裴度は晉國公に封ぜられた。【一二】并州　古の十二州の一、直隸省の舊正定・保定、山西省の舊太原・大同等の府。【一三】烏號　弓の名。【一四】五袴　後漢の廉范、字は叔度、蜀郡の太守となる。民の夜作を禁ぜず。民乃ち歌つて曰く、廉叔度、來何暮、不ㇾ禁ㇾ火、民安作、昔無ㇾ襦、今五袴と。【一五】單醪　七命に、領ㇾ帶一朝、可ㇾ以沈ㇾ酒千日、單醪投ㇾ川、可ㇾ以使ㇾ三軍皆醉とある。【一六】雙武　勇士。【一七】鵠電　使傳。【一八】夜柝　夜を警むる拍子木。【一九】蓋駘　汾水の神。【二〇】玁狁　匈奴なり。【二一】烽字　烽星。不祥の星なり。【二二】腥臊　なまぐさきこと。外夷の氣なり。【二三】烽戍　寇狄の來襲を報ずる爲に烽火を擧げる樓。狄は北方の郡名。【二四】朔吹　北風。【二五】釣尾　僕使の名。術祝は僕使。【二六】蚓蘊　ひげ男。體の蜿曲すること蚓の如きなり。【二七】通天犀　抱朴子に、通天犀、得ㇾ其角一尺以上、則爲ㇾ魚而術以入ㇾ水、水常爲開とある。【二八】羌管　えびすの笛、楊柳は曲名。【二九】蒲萄　葡萄酒。【三〇】壓落盞　酒器なり。海錄碎事に、湘楚人以ㇾ盞浮中鏘鏘令錢者ㇾ爲ㇾ金壓落ㇾとある。【三一】金屑　金粉なり。琵琶槽の槽は琵琶の上端に附けて以て弦を架するもの。【三二】綠野　裴度の山莊の名。後集卷十四、奉ㇾ和ㇾ令公綠野堂種ㇾ花を見よ。東皐は東

公は張范を慕ふと雖も、
帝は未だ伊皐を捨てず。
眷戀して心方に結び、踟躕して首已に搔く。
鸞鳳は寥廓に上り、燕雀は蓬蒿に住す。
文の狂簡なるを獻せんと欲し、徒に思の鬱陶たるを煩ふ。
憐む可し四百字、輕重鴻毛に抵る。

方の丘。【三三】遊遨　あそぶこと。【三四】宮徵　並に音調の名。【三五】桔槔　はねつるべ。水を汲むもの。【三六】篙　舟をこぐさを。【三七】爲レ穆先陳レ醴　穆生は漢人なり。楚の元王、少き時穆生と詩を浮丘伯に受く。既に楚に王たり。以て中大夫となす。穆生酒を嗜まず。元王爲に常に醴を設く。樂天借りて自ら比す。【三八】舞鬟　舞妓の頭髪。翡翠は羽毛の美しき鳥の名。【三九】歌頸　歌妓のくび。鮮蟬は蟬の名、手如ニ柔荑一、膚如ニ凝脂一、領如ニ蝤蠐一、齒如ニ瓠犀一云云とある。【四〇】明時　昭代といふが如し。【四一】伊阜　伊尹・皐陶。【四二】四海　詩經に、愛而不レ見、搔レ首踟躕とある。【四三】雲鳳　變度に喩ふ。寥廓は天空。【四四】燕雀　樂天自ら喩ふ。蓬蒿は ヨモギ。微賤に喩ふ。【四五】狂簡　狂簡は志大にして遊取する所あるなり。簡は簡略の義。志大にして日常の行事を疎略にすること。論語に吾黨之小子、狂簡斐然成レ章云云とある。【四六】鬱陶　憂思の貌。孟子に鬱陶思レ君爾とある。【四七】四百字　この詩をいふ。

【題義】北都の留守たる中書令裴度に寄せた詩である。

【詩意】裴公は中書令として天上界の中台星に當り、人間界に於ては一品の高位に居り、堯舜の如き明君に値ひ、蕭何・曹參の如き勳業を建て、速に高科に登つて終に文武兼備の人となり、名聲赫赫として常に國事を以て己が憂となし、蔡賊吳元濟を擒にし、齊賊李師道を平げ、以て天下の亂を鎭め、遂に君恩を蒙つて東都留守より太原尹・北都留守・河東節度使を授けられ、洛陽を保理し、又よく北門を守護し、既に晉國公に封せられ、并州の士馬を統ぶるや、胡兵も其威力に畏れぬ。令の行はるること流るるが如く、仁恩遍く及んで膏澤の如く、士民皆その德を頌し、將士は勇武にして賓僚は俊秀なるを以て、盜寇の患なく、神靈呵護して胡兵遠く逃れ、景星天に輝き霖雨妖氣を洗ひ、四境爲に靜謐なるを得たり。是に於てか儀衞を盛にし、通天犀の帶を纏ひ、紫麟の袍を被り、威風堂堂たり。時に羌笛を弄して楊柳の曲を奏し、燕姬をして葡萄酒を酌ましむ。予は遙に公の從軍を樂み、報國の勞を忘るを思ふ。公の嘗て洛陽に在りて綠野堂を構ふるや、予は屢しばその盛宴に陪し遨遊に從ひ、花月の賞を俱にし、琴詩の樂を極めぬ。今その勝概を擧ぐれば竹に近く方丈の室を置き、林に依つて桔槔を設け、池には畫舫二三隻を泛べ、徑は苔滑かに潭は水深く、綠柳紅桃あり。公は吾が爲に醴を設け、劉禹錫（字は夢得）を招いて酒を酌み、舞妓の鬟は翡翠の如く、歌妓の頸は鱗蟠の如く、美麗言語に絶す。而して公の盛德終に及び難く、昭代再び遭ひ難し。公は張良・范蠡を慕ひ自ら引隱せんと欲するも、帝は公を惜んで許さず。予も亦眷戀すれども今や遠く離れて見る能はず、徒に首を搔いて踟躕するのみ。公は天上に高翔し、予は下位に沈淪せり。文章を獻せんと欲するも、徒に我が心を憂へしむ。この詩篇の如きは輕きこと鴻毛の如く、固より公の一讀を煩はすに足らざるなり。

和東川楊慕巢尙書府中獨坐感戚在懷見寄

十四韻

慕巢戚ニ戚虔州弟喪逝一。感ニ己之榮盛一。有ニ歸レ洛之意一。故敍而和レ之也。

東川の楊慕巢尙書の府中に獨坐し、感戚懷に在りて寄せられしに和す、十四韻

慕巢、虔州に弟の喪逝せるを感戚して、己れの榮盛を感じ、洛に歸るの意有り、故に敍して之に和するなり。

我是知君者。君今意若何。　我は是れ君を知る者、君今意若何。
窮通時不定。苦樂事相和。　窮通時定まらず、苦樂事相和す。

東蜀歡殊渥。西江歎逝波。
只緣榮貴極。翻使感傷多。
行斷風驚鴈。年侵日下坡。
片心休慘戚。雙鬢已蹉跎。
紫綬黃金印。青幢白玉珂。
老將榮稍貼。愁用道銷磨。
外府饒盃酒。中堂有綺羅。
應須引滿飲。何不放狂歌。
錦水通巴峽。香山對洛河。
將軍馳鐵馬。少傅步銅駝。
深契憐松竹。高情憶薜蘿。
懸車年甚遠。未敢故相過。

【字解】〔一〕東蜀　東川なり。殊渥は君恩の厚きこと。〔二〕西江　虞州なり。弟の居る處。逝波は死亡すること。〔三〕日下ノ坡　漸く老ゆること。〔四〕片心　一片の心。〔五〕蹉跎　事の成らざる嘆。〔六〕青幢　青き帳の車。白玉珂は馬具なり。張籍の詩に、乘ノ馬鳴ユ玉珂ニとある。〔七〕稍貼　補充する。〔八〕外府　外の庫。〔九〕綺羅　美服。美妓に喩ふ。〔一〇〕錦水　蜀の川の名。楊慕巢の居る處。〔一一〕香山　洛陽の山の名。樂天の居る處。〔一二〕將軍　楊慕巢を指す。〔一三〕少傅　樂天は時に太子少傅たり。銅駝は洛陽の街の名。〔一四〕薜蘿　隱者の服。楚辭に、若ノ有ノ人兮山之阿、披ニ薜荔ニ兮帶ニ女蘿ニとある。〔一五〕懸車　年七十に達して致仕すること。

【題義】東川節度使禮部尚書楊汝士（字は慕巢）が役所に獨坐し、弟の死を感み己の榮に感じ、詩を賦して樂天に寄せたので、樂天がそれに和したのである。十四韻二十八句より成る。

【詩意】我は君の知己である。今君の意中は如何なる狀態であるか。世間の窮通は定まりなく、苦樂は常に相伴ふものである。君は東蜀に在りて君恩の渥きを歡び、君の弟の死去したことを歎じてゐる。それといふのも君自身が榮貴を極めてゐるから、却つて感傷が深いのであらう。鴈の行列が斷えたやうに兄弟が各處に離散し、夕日の坡を下るが如くに身心が老衰したことは、成る程悲むに足るには違ひないが、金印紫綬を佩び、高車駟馬を驅る得意の境遇に居るのであるから、老は榮を以て補ふべく、愁は道を用て銷すべきである。まして外庫には杯酒がいくらでもあり、中堂には美妓も居るのだから、痛飲狂歌して愁を霽すがよい。さて君は錦水の巴峽に通ずる處に居り、僕は香山の洛河に對する處に居り、君は節度使として鐵馬を馳せ、僕は太子少傅として銅駝街に歩いてゐる。共に松竹の操を慕ひ、隱遁の心を抱いてゐるが、まだ七十致仕の年までには餘程年數があるから、まだ隱退はせずに居る。

分司洛中多暇數與諸客宴遊醉後狂吟偶成十韻因招夢

律詩　分司洛中多暇數與諸客宴遊

得賓客。兼呈思黯奇章公

洛中に分司たるとき暇多し。數〻諸客と宴遊す。醉後狂吟して、偶〻十韻を成す。因つて夢得賓客を招き、兼ねて思黯奇章公に呈す

性與時相遠。身將世兩忘。
寄名朝士籍。寓興少年場。
老豈無談笑。貧猶有酒漿。
隨時求伴侶。逐日用風光。
數數遊何爽。些些病未妨。
天敎榮啓樂。人恕接輿狂。
改業爲逋客。移家住醉鄉。
不論招夢得。兼擬誘奇章。
要路風波險。權門市井忙。
世間無可戀。不是不思量。

【字解】【一】朝士籍　朝官の名簿。【二】少年場　若い者の遊び仲間。【三】數數　頻繁なこと。【四】榮啓　古の隱者榮啓期。列子天瑞篇に見ゆ。樂天自ら比す。【五】接輿　古の佯狂者の名。論語に見ゆ。樂天自ら比す。【六】逋客　隱者なり。【七】市井　俗人の交。

【題意】樂天の分司東都（官名）たるや閒暇が多かつたので數〻諸客と宴遊した。偶〻醉後狂吟して十韻二十句の此詩を作り、太子賓客（官名）劉禹錫（字は夢得）を招き、兼ねて奇章公（封爵）牛僧孺（字は思黯）に呈したのである。

【詩意】吾が性は時勢と相容れず、吾が身は世と相忘れてしまつた。併し今猶は朝官の末班に列し、少年の歡情に興味を持つてゐる。老いても談笑の資があり、貧しくとも酒漿があるから、時に或は遊相手を求め、毎日風光を賞して、少し位の病氣は氣にも留めずに遊樂を事としてゐる。天は我をして樂ましめ、人は我の狂を大目に見てくれる。されば今日は殆ど業を改めて隱者となり、醉鄉に住してゐるので、夢得を招くは謂ふに及ばず、奇章公までも誘引しようと思つてゐる。察するに權要の地位に居れば、危險も多く俗交も忙しいであらう。世間には何一つ我が心を牽くやうな結構なものはない。ここをよく考へて、僕の處へ來て心置きなく樂むがよい。

小歲日喜談氏外孫女孩滿月

小歲の日談氏の外孫女孩月に滿つるを喜ぶ

今旦夫妻喜ぶ、他人豈知るを得んや。
自嗟生女晚。敢訝見孫遲。
今旦夫妻喜ぶ、他人豈知るを得んや。
自ら嗟く女を生むの晩きを、敢て訝からんや孫を見るの遲きを。

物以稀爲貴。情因老更慈。　物は稀なるを以て貴しと爲す、情は老に因りて更に慈なり。
新年逢吉日。滿月乞名時。　新年に吉日に逢ひ、滿月名を乞ふ時。
桂燎熏花果。蘭湯洗玉肌。　桂燎花果を熏じ、蘭湯玉肌を洗ふ。
懷中有可抱。何必是男兒。　懷中抱く可き有り、何ぞ必ずしも是れ男兒ならん。

【字解】〔一〕小歲　雲麓漫鈔に、推實月令、過臘一日、謂之小歲とある。〔二〕談氏　樂天の女は皇泰御史談弘基に嫁した。

【題義】新年に談氏の外孫女が生れて滿一箇月になつたことを喜んだ詩である。

【詩意】吾等夫婦の今朝の喜は、到底他人の窺ひ知る所ではない。吾等は女を生むのが晩かつたから、從つて孫を見るのも遲いので、此は敢て怪むに足らないが、一體物は稀しいのが貴いので、年老いてから始めて孫を持つたので、特に慈愛の心が深いのである。新年に際して生後滿一箇月の吉日に遇ひ、引珠と名を附けた。桂を熏じ產湯を使はせて、懷中に抱いて見た。男兒でなくとも決して不足には思はぬ。

閒吟。贈皇甫郎中親家翁〔一〕　新與皇甫一結姻。

閒吟、皇甫郎中の親家翁に贈る　新に皇甫と姻を結ぶ。

誰能嗟嘆光陰暮。　誰か能く光陰の暮るるを嗟嘆せん、
豈復憂愁活計貧。　豈復た活計の貧しきを憂愁せんや。
忽忽不知頭上事。〔二〕　忽忽として知らず頭上の事、
時時猶憶眼中人。〔三〕　時時猶ほ憶ふ眼中の人。
早爲良友非交勢。　早く良友と爲りて勢に交るに非ず、
晚接嘉姻不失親。　晚に嘉姻を接して親を失はず。
最喜兩家婚嫁畢。　最も喜ぶ兩家婚嫁畢るを、
一時抽得向平身。〔四〕　一時抽き得たり向平の身。

【題義】皇甫郎中は皇甫湜であらう（後集卷十、哭皇甫七郎中を見よ）。この詩は閒吟して皇甫郎中の父に贈つた詩である。

【詩意】僕は年を取るのも嗟嘆せず、生計の貧しいのも憂愁しない。世間の事には全く頓著せず、ただ時時友人を憶ふのみである。君とは早くから良友となつたが決して權勢に就いたのではなく、近頃姻戚關係を結んで、自分ながら良い緣者を得たと思つてゐる。特に喜ぶべき事は子女の婚嫁が畢つて、君も僕も同時に向子平のやうな自由の身になつたことである。

【字解】〔一〕親家翁　男女兩親家相呼んで、男を親家翁といひ、女を親家母といふ。〔二〕忽忽　意に解せざる貌。〔三〕眼中人　想愛する所の人をいふ。何遜の詩に、不見眼中人、空想山南寺とある。〔四〕向平　後漢書逸民傳に、向長、字子平あり。孟浩然の詩に、伏枕嗟公幹、歸山羨子平とある。

夢得臥病攜酒相尋。先以此寄

夢得の病に臥するとき酒を攜へて相尋ねんとし、先づ此を以て寄す

病來知少客。誰可以爲娛。　病みてより來客少きを知る、誰か以に娛を爲す可き。
日晏開門未。秋寒有酒無。　日晏けて門を開くや未しや、秋寒くして酒有りや無や。
自宜相慰問。何必待招呼。　自ら宜しく相慰問すべし、何ぞ必ずしも招呼するを待たん。
小疾無妨飲。還須挈一壺。　小疾は飲を妨ぐる無し、還た須らく一壺を挈ふべし。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の病中、酒を攜へて見舞に往かんとし、先づ此詩を寄せたのである。

【詩意】病氣になつてからは遊びに往く客も少いだらうから、俱に娛む相手もあるまい。日が高く升つても門も開かず、秋寒になつても酒もないだらう。就いては招待することは出來ないから、こちらから見舞に往くとしよう。少し位の病氣には差支ないから、又酒を一壺持參しようと思ふ。

酬思黯戲贈

思黯に酬いて戲れに贈る

鍾乳三千兩。金釵十二行。
鍾乳三千兩、金釵十二行。
妬他心似火。欺我鬢如霜。
他を妬みて心火に似たり、我を欺く鬢霜の如しと。

思黯自詩。前後服鍾乳三千兩。甚得力。而歌舞之妓頗多。來詩戲予羸老。故戲答之。

慰老資歌笑。銷愁仰酒漿。
老を慰めて歌笑を資り、愁を銷して酒漿を仰ぐ。
眼看狂不得。狂得且須狂。
眼り狂し得ざるを看る、狂し得ば且つ須らく狂すべし。

【字解】〔一〕鍾乳　强壯劑なり。三千兩は重量なり。〔二〕金釵十二行　宋の朱翌の猗覺寮雜記に、樂天詩、鍾乳三千兩、金釵十二行。以言舞妓之多。蓋用古樂詞云頭上金釵十二行、足下絲履五文章。是一人頭插十二釵耳、非舞妓之多。十二重行也とある。〔三〕妬他　思黯を妬むなり。〔四〕欺我　我を侮る。

【題義】牛僧孺（字は思黯）が氣力も旺盛で歌妓も多いことを誇つた詩を樂天に寄せたので、戲れに此詩を作つて酬いたのである。

【詩意】鍾乳を三千兩も服用して氣力が旺盛であり、金釵をかざした美妓が多數居るなどと誇り立て、我が鬢の霜の如く白きを侮るに遇ひ、僕が君を妬む心は烈火のやうである。憚りながら僕も談笑を借りて老を慰め、酒漿を借りて愁を銷し、獨り自ら熱狂してゐる。君は一向熱狂も出來ずに居るやうだが、出來るなら僕の眞似でもして熱狂して見るがよい。

又戲答絕句

又戲れに絕句に答ふ

來句云。不是道公狂不得。恨公逢我不教狂。
來句に云く、是れ公狂し得ざるを道はず。恨むらくは公我に逢ふも狂せしめざるを。

(一)狂夫與我世相忘。　狂夫我世と相忘る、
(二)故態些些亦不妨。　故態些些たるも亦た妨げず。
縱酒放歌聊自樂。　酒を縱にし歌を放にし聊か自ら樂む、
(三)接輿爭解教人狂。　接輿爭でか解く人をして狂せしめん。

【字解】(一) 狂夫　樂天自ら謂ふ。(二) 故態　もとの狂態。(三) 接輿　楚の佯狂者。論語に見ゆ。樂天自ら比す。

【題義】樂天が前の詩を牛僧孺に寄せたので、僧孺は「仰せの通り君が熱狂し得ないとは謂はないが、君は我に逢つても我を熱狂せしめ得ないのが遺憾である」といふ詩を寄せたので、樂天が又戯れに此詩を以て答へたのである。

【詩意】僕は世間と絶縁してゐる男だから、少しは舊來の狂態を發揮しても差支ない。だから酒をあふり放歌高吟して自ら樂むのだが、他人まで熱狂せしめることは出來ないではないか。

令狐相公與夢得交情素深。眷予分亦不淺。一聞薨逝相顧泫然。旋有使來。得前月未歿之前數日書及詩寄贈夢得。哀吟悲歎寄情於詩。詩成示予。感而繼和

令狐相公夢得と交情素より深し。予を眷みること分亦淺からず。一たび薨逝を聞き相顧みて泫然たり。旋て使の來るあり、前月未だ歿せざるの前數日の書及び詩の夢得に寄贈するを得たり。哀吟悲歎して情を詩に寄す。詩成つて予に示す。感じて繼ぎ和す

(一)緘題重疊語殷勤。　緘題重疊語殷勤、
存歿交親自此分。　存歿交親此れより分る。
前月使來猶理命。　前月使來るとき猶ほ命を理め、
今朝詩到是遺文。　今朝詩到る是れ遺文。
(二)銀鉤見晚書無報。　銀鉤見ること晚くして書に報ずる無し、
(三)玉樹埋深哭不聞。　玉樹埋むること深うして哭すれども聞かず。
最感一行絶筆字。　最も感ず一行絶筆の字、
尚言千萬樂天君。　尚ほ言ふ千萬樂天君と。

令狐興夢得手札後云。見樂天君。莫伸千萬之誠也。

【字解】(一) 緘題　詩を書いて之を封するなり。(二) 銀鉤　書法の巧なるを狀する語。書苑に晉索靖草書絶代、名銀鉤蠆尾とある。(三) 玉樹　材の美に喩ふ。

【題義】開成二年十一月、興元尹・山南西道節度使令狐楚が鎮に薨じた。やがて使者が劉禹錫(字は夢得)の處へ來て、令狐楚の生前に認めた詩や書狀を屆けたので、禹錫は悲のあまりに詩を作つて樂天に見せた。樂天が乃ちそれに和したのである。

【詩意】 殷勤な書狀を認め固く封をして送り屆けた友は、今既に彼の世の人となり、彼は歿し我は存して幽明界を異にすることになつた。前月使者の立つ時には彼此と命令を下したのに、今朝詩が屆いた時は既に遺文となつてしまつた。書狀を見るのが晩かつたから今更返事を出すことも出來ず、身體は深く埋めてしまつたから、哭泣しても聞えまい。我が最も深く感ずることは一行の絕筆に「樂天君に逢つたら宜しく言つてくれ」と書いてあることである。

洛下雪中頻與劉李二賓客宴集。因寄汴州李尚書

洛下の雪中、頻に劉李二賓客と宴集す。因つて汴州の李尚書に寄す

水南水北總紛紛、
雪裏歡遊莫厭頻。
日日闌來唯老病、
年年少去是交親。
碧氈帳煖梅花濕、
紅燎爐香竹葉春。
今日鄰枚俱在洛、

【字解】 〔一〕 汴州李尚書　戶部尚書・汴州節度使李紳なり。〔二〕 紛紛　雪のふる貌。〔三〕 交親　親友なり。〔四〕 碧氈帳　青い毛織の帳。〔五〕 紅燎爐　火の赤く燃な爐。竹葉は酒をいふ。〔六〕 鄰枚　鄰陽・枚乘。並に梁の孝王の詩客なり。樂天と劉禹錫とに比す。〔七〕 梁園　梁の孝王の園。梁の孝王を以て李紳に比す。

梁園置酒召何人。

梁園酒を置きて何人を召す。

【題義】 洛陽にあて雪中頻に太子賓客（官名）劉禹錫及び李氏（名字詳ならず）と宴集し、因つて汴州節度使李紳に寄せた詩である。

【詩意】 洛水の南も北も總て紛紛と雪が降る。吾等は頻に雪中の歡遊を貪つて居る。いつとはなしに老病が身に迫り、一年增しに友達が減つて往くのだから、愁をまぎらす爲に歡遊するのは當然であらう。今も今とて碧氈帳の煖かな處に梅花の濕ふを眺めつつ、火氣の盛な爐を圍んで春酒を酌んでゐる。今日は我等兩人とも遠く洛陽に居て、君の側には居ないが、君の雪見の宴には誰を召すであらうか。（謝惠連の雪賦に、梁王不レ悅、游二於兎園一、乃置二旨酒一命二賓友一、召二鄰生一延二枚叟一とある。）

看夢得題答李侍郎詩。詩中有文星之句。因戲和之

夢得が李侍郎に答ふる詩を題するを看るに、詩中に文星の句あり。因つて戲れに之に和す

看題錦繡報瓊瓌。
俱是人天第一才。
好遣文星守躔次。

錦繡を題して瓊瓌に報ゆるを看るに、
俱に是れ人天第一の才。
好く文星をして躔次を守らしめば、

【字解】 〔一〕 錦繡・瓊瓌　並に好詩に喩ふ。〔二〕 人天　天上と人間と。〔三〕 躔次　星の位置。

亦須防有客星來。　亦須らく客星の來る有るを防ぐべし。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が李侍郎（李紳であらう）の詩に答ふる作を看た中に、文星云云といふ一句があつたので、戯れにそれに和した詩である。

【詩意】夢得が詩を題して李侍郎の詩に答へるのを看た所が、いづれ劣らぬ好詩で、天上に於ても人間に於ても比ぶ者なき偉才である。かかる文星をして能く其位置を守らしめたならば、客星の來り犯すのを防ぐであらう。（轉結は文星を以て李に喩へ、客星を以て劉に喩へ、才力相當るを謂ふ。）

【字解】【一】客星　横合から飛んで來る、よばひ星。

閑適

俸祿優饒官不卑。　俸祿優饒にして官卑からず、
就中閑適是分司。　就中閑適なるは是れ分司。
風光煖助遊行處。　風光煖かに遊行の處を助け、
雨雪寒供飲宴時。　雨雪寒く飲宴の時を供す。
肥馬輕裘還且有。　肥馬輕裘還た且有り、
蠢歌薄酒亦相隨。　蠢歌薄酒亦た相隨ふ。
微躬所要今皆得。　微躬要する所今皆得たり、
只是蹉跎得校遲。　只是れ蹉跎として得ること校遲きのみ。

【字解】【一】優饒　ゆたかなこと。【二】蠢歌　まづい歌。【三】微躬　賤しき身。【四】蹉跎　願く嘲。思ふままにならぬ嘲。

【題義】分司東都（官名）の閑適の狀を述べた詩である。

【詩意】俸祿も豐で官位も卑くなく、然も呑氣なのは、分司東都の職であらう。春は風光が暖かに遊行する處を助け、冬は雨雪の寒い時に飲宴を供し、肥馬輕裘もあれば、粗末ながらも歌酒もある。まづ賤しい我が身の要求する所の物は大抵不足がない。ただ此を得るのが校遲かつたのが、不足といへば不足である。

戯答思黯　思黯有二能筝者一。以レ此戯レ之。

何時得見十三絃。　何の時か見るを得ん十三絃、
待取無雲有月天。　待ちて取る雲無く月有る天。
願得金波明似鏡。　願はくは金波の明かなること鏡に似たるを得て、
鏡中照出月中仙。　鏡中照し出さん月中の仙。

【字解】【一】十三絃　筝なり。【二】月中仙　美妓に喩ふ。

【題義】牛僧孺（字は思黯）が筝に巧な美妓を蓄へてゐるので、戯れに答へた詩である。

【詩意】いつ筆を善くする君の美妓を見ることが出來るであらう。定めて月中の仙女のやうであらうから、月の呀えた夜を待つ外はあるまい。願はくは金波の鏡のやうに明かなのを得て、その美しい姿を寫し取りたいものだ。

酬裴令公贈馬相戲

裴詩云。君若有心求逸足。我還留意在名姝。蓋引妾換馬。戲意亦有所屬也。

裴令公が馬を贈りて相戲るるに酬ゆ

裴の詩に云く、君は逸足を求むる心有るが若し、我は還た意を留むるは名姝に在りと、蓋し妾を引いて馬に換ふ、戲意亦屬する所有るなり。

(一)安石風流無奈何。　安石が風流奈何ともする無し、
欲將(二)赤驥換青娥。　赤驥を將て青娥に換へんと欲す。
不辭便送東山去。　便ち東山に送り去るを辭せざるも、
臨老何人與唱歌。　老に臨みて何人か與に唱歌せん。

【題義】中書令裴度が樂天に馬を贈つて戲言を弄したのに酬いた詩である。

【詩意】駿馬を以て美女に換へんとする、謝安石の風流は如何ともし難い。早速美女を東山に送つてやるのは厭はないが、老境に入つて與に唱歌する相手のなくなるのが惜しい。

【字解】【一】安石　晉の謝安、字は安石、少くして重名なり。徵辟皆就かず。東山に隱居し妓を以て相從ふ。裴令公に比す。【二】赤驥　駿馬。青娥は美女。

新歲贈夢得

暮齒忽將及。同心私自憐。
漸衰宜減食。已喜更加年。
紫綬行聯被。籃輿出比肩。
與君同甲子。歲酒合誰先。

【題義】新年に劉禹錫（字は夢得）に贈つた詩である。

【詩意】忽ち老年に到らんとするは、君も僕も私に自ら憐む所である。漸く衰へては食物を減らすが宜しく、達者で更に一年を加へるのは喜ばしい。行けば君と紫綬を附けた衣服を聯ね、出でては駕籠に乘り肩を比べて遊ぶ。君とは同年であるが、新年の祝酒はどちらが先に飲んだものであらう。

【字解】【一】暮齒　老年。【二】籃輿　竹片を編んで作つた駕籠。【三】甲子　年齡。【四】歲酒　新年の祝酒。容齋隨筆に、有二歲且飲酒一則一云、今人元日飲二屠蘇酒一、自二小者一起、相傳已久、然固有二來處一、漢李膺・杜密、以二黨人一同繫レ獄、値二元日一、於二獄中一飲レ酒、曰正且從レ小起云云とある。

早春持齋答皇甫十見贈

正月晴和風氣新。　早春に持齋して、皇甫十が贈らるるに答ふ

正月晴れ和ぎて風氣新なり、

【字解】【一】持齋　佛を學ぶ者

紛紛已有醉遊人。　紛紛として已に醉遊の人有り。
帝城花笑長齋客。　帝城花は笑ふ長齋の客、
三十年來負早春。　三十年來早春に負くを。

【題義】春の初に齋戒して皇甫十から詩を贈られたのに答へた詩である。

【詩意】正月になつて晴れ和ぎ何處となく春めいて來たので、大分醉遊する人も多い。都の花は三十年來春に負いて長齋した我が不風流を笑ふであらう。

の戒律を持守して蔬食するを謂ふ。【二】紛紛　多き貌。【三】長齋　長期の齋戒。

戲贈夢得兼呈思黯

霜鬢莫欺今老矣。　霜鬢欺く莫れ今老いたり矣、
一杯莫笑便陶然。　一杯笑ふ莫れ便ち陶然。
陳郎中處爲高戶。　陳郎中が處には高戶と爲り、
裴使君前作少年。　裴使君の前には少年と作る。

傳曰。今老矣。無能爲也。
陳、商郎中。酒戶消滅。裴洽使君。年九十餘。

【字解】【一】莫欺　侮るなかれ。【二】陶然　醉ふ貌。【三】高戶　上戶。大酒家。【四】裴使君　使君は刺史の稱。淄州刺史裴洽。後集卷十四、春夜宴席上戲贈裴淄州及び三月三日歎裴淄州を見よ。【五】開素　精進落しをする。野客叢書に、今人茹素、尚親鄰設酒殺以相煽熱、名曰開葷、於理合矣、曰開素とある。【六】泥奇章　泥は柔言を以て求むること。牛僧孺は奇章侯に封ぜらる。

願我獨狂多自哂。　我獨り狂するを顧みて多く自ら哂ひ、
與君同病最相憐。　君と同じく病みて最も相憐む。
月終齋滿誰開素。　月終り齋滿ちて誰か素を開く、
須泥奇章置一筵。　須らく奇章に泥して一筵を置くべし。

【題義】戲れに劉禹錫（字は夢得）に贈り、兼ねて牛僧孺（字は思黯）に呈した詩である。

【詩意】吾が雙鬢は白毛になつたが馬鹿にしてはいけない。一杯飲んで忽ち醉つても笑つてはいけない。陳郎中の前では俺も立派な上戶であり、裴使君の前ではまだ少年で通れるのだ。自分ながら己の醉狂を顧みては可笑しくなり、君と同病相憐んでゐる。今月も終り齋戒も滿期になるから、誰か精進落しの御馳走でもしてくれさうなものだ。牛相公にねだれて一夕の宴を開いて貰はうかしら。

早春憶遊思黯南莊因寄長句

早春思黯の南莊に遊ばんことを憶ひ、因つて長句を寄す

南莊勝處心常憶。　南莊の勝處心常に憶ふ、
借問軒車早晚遊。　借問す軒車早晚遊ばん。

【字解】【一】借問　試に問ふ。軒車は馬車。早晚は、いつごろ。

美景難忘竹廊下。　美景忘れ難し竹廊の下、
好風爭奈柳橋頭。　好風爭奈せん柳橋の頭。
氷消見水多於地。　氷消して水を見れば地よりも多く、
雪霽看山盡入樓。　雪霽れて山を看れば盡く樓に入る。
若待春深始同賞。　若し春の深きを待ちて始めて同じく賞せば、
鶯殘花落却堪愁。　鶯殘はれ花落ちて却つて愁ふるに堪へん。

【題義】春の初に牛僧孺（字は思黯）の南莊（城南の別莊）に遊びたいと思つて先づ寄せた詩である。

【詩意】君の南莊の景色のよいことは常に我が心に忘るる能はざる所である。因つて君はいつごろ馬車を驅つて南莊に往かれるか、ちよつと御尋ね申す次第である。あの竹廊の下の美景、柳橋の頭の好風は、何とも言ひやうのないほどよい。氷が解けて池が庭よりも廣くなり、雪が霽れて山が殘らず樓上から見える。もし今のうちに遊ばずして、春の深けるのを待つてゐたならば、鶯も老い花も落ちて却つて愁を增すであらう。

酬皇甫十早春對雪見贈

皇甫十が早春雪に對して贈らるるに酬ゆ

漠漠復霏霏。東風散玉塵。(一)　漠漠復た霏霏、東風玉塵を散ず。
明催竹窓曉。寒退柳園春。　明催して竹窓曉け、寒退いて柳園春なり。
綠醞香堪憶。紅爐煖可親。　綠醞香しくして憶ふに堪へたり、紅爐煖かにして親む可し。
忍心三兩日。莫作破齋人。(二)　心に忍べ三兩日、破齋の人と作ること莫れ。

【字解】(一) 漠漠・霏霏　雪の盛に降る貌。(二) 玉塵　雪。(三) 破齋　精進齋戒を破る。

【題義】皇甫十が早春に雪に對して樂天に贈つた詩に酬いたのである。

【詩意】ちらちらと春風が雪を吹き散し、曉になつて竹窓のあたりが薄明くなり、寒氣も衰へて柳園には既に春が訪れた。この雪に對して一杯傾けたくもあり、紅爐に親みたくもあるが、まア二三日辛抱して精進を破らないやうにしようではないか。

奉和思黯自題南莊見示。兼呈夢得

思黯の自ら南莊に題して示さるるに和し奉り、兼ねて夢得に呈す

謝家別墅最新奇。　謝家の別墅最も新奇、
山展屏風花夾籬。　山は屏風を展べ花は籬を夾む。

【字解】(一) 謝家・謝墅　謝靈運。ここでは牛僧孺に比す。別墅は別莊。

曉月漸沈橋脚底。　曉月漸く沈む橋脚の底、
晨光初照屋梁時。　晨光初めて屋梁を照す時。
臺頭有酒鶯呼客。　臺頭酒有りて　鶯　客を呼び、
水面無塵風洗池。　水面に塵無くして風池を洗ふ。
除却吟詩兩閒客。　詩を吟ずる兩閒客を除却せば、
此中情狀更誰知。　此中の情狀更に誰か知らん。

【題義】牛僧孺（字は思黯）が自ら南莊に題した詩を樂天に示したので、樂天がそれに和し、兼ねて劉禹錫（字は夢得）に呈した詩である。

【詩意】君の家の別莊は最も新奇である。山は屏風をひろげたやうに連り、花は籬を夾んで咲き誇つてゐる。夜明け方の月が橋の袂に沈み、旭の光が屋梁を射す時は特に宜しい。樓臺には酒もあつて鶯が頻に客を呼んで居り、鏡の如く清い水面をそよ風が拭つてゐる。詩を吟ずる我等二人の閒客を除いては、恐らく此中の情狀を理解する者はあるまい。

【(二)】兩閒客　二人の閒人。樂天と夢得。

送蘄春李十九使君赴郡

蘄春の李十九使君の郡に赴くを送る

可憐官職好文詞。　憐む可し官職の文詞に好きを、
五十專城未是遲。　五十にして專城たるは未だ是れ遲からず。
曉日鏡前白髮無。　曉日鏡前白髮無く、
春風門外有紅旗。　春風門外紅旗有り。
郡中何處堪攜酒。　郡中何の處か酒を攜ふるに堪へたる、
席上誰人解和詩。　席上誰人か詩を和するを解する。
唯共交親開口笑。　唯交親と共に口を開いて笑ふは、
知君不及洛陽時。　知んぬ君が洛陽の時に及ばざるを。

【(一)】使君　刺史の稱。
【(二)】專城　刺史なり。
【(三)】郡中　蘄春なり。
【(四)】交親　親友。

【題義】李十九が蘄春の刺史となつて赴任するのを送る詩である。

【詩意】君の官職が文詞を翫ぶに宜しいのは甚だ結構なことで、又五十ぐらゐで刺史に任せられるのは決して遲くはない。曉に鏡に照して見ても白髮は一本もなく、門外には紅旗（刺史の旗）が春風に飜つてゐる。蘄春にも酒を攜へて遊びに往くべき處があるであらう。又席上には君の詩に和する人もあるであらう。併し親友と愉快に哄笑することは、洛陽に居た時のやうには行かぬであらう。

自題酒庫

野鶴一辭籠。虚舟長任風。
送愁還閑處。移老入閑中。
身更求何事。天將富此翁。
此翁何處富。酒庫不曾空。

劉仁軌詩云。天將富此翁。以一醉爲富也。

【題義】己の酒庫に題した詩である。

【詩意】自分の身は籠を出て自由になつた野鶴のやうでもあり、風に任せて漂つてゐる虚舟のやうでもある。吾が愁をば騒がしい俗世間に還して、靜に老身を閑中に託することにした。我は今更何を求めるであらう。天は將に我を富ますであらう。吾が富とは他にあらず、酒庫がいつも滿ちてゐることである。

自ら酒庫に題す

野鶴一たび籠を辭し、虚舟長く風に任す。
愁を送りて閑處に還し、老を移して閑中に入る。
身更に何事をか求めん、天將に此翁を富まさんとす。
此翁何の處にか富める、酒庫曾て空しからず。

寒食日。寄楊東川

不知楊六逢寒食。

寒食の日、楊東川に寄す

知らず楊六寒食に逢ひ、

【字解】〔一〕楊六　六は輩行。

寒食日。寄楊東川

作底歡娛過此辰。
兜率寺高宜望月。
嘉陵江近好遊春。
蠻旗似火行隨馬。
蜀妓如花坐遶身。
不使黔婁夫婦看。
誇張富貴向何人。

【題義】寒食（冬至から百五日目をいふ）の日に、東川節度使楊汝士に寄せた詩である。

【詩意】楊六は如何なる歡樂を以て寒食のよき日を過してゐるであらうか。兜率寺は高い處に在るから月を眺むるによく、嘉陵江がすぐ近くに在るから、行遊するのによからう。そこで楊六は火のやうに赤い蠻旗を建てた兵士を從へて行樂し、花のやうに美しい蜀妓に取圍まれて樂んでゐるであらう。一目その得意さを見たいものだが、折角の富貴を誰に向つて誇つてゐるであらう。

底の歡娛を作して此辰を過ごす。
兜率寺高くして月を望むに宜しく、
嘉陵江近くして春に遊ぶに好し。
蠻旗火に似て行くゆく馬に隨ひ、
蜀妓花の如く坐して身を遶る。
黔婁夫婦をして看しめず、
富貴を誇張して何人にか向ふ。

楊汝士なり。〔二〕此辰　このよき日。〔三〕兜率寺　東川に在る寺の名。〔四〕嘉陵江　東川に在る川の名。〔五〕蠻旗　東川は南夷に近き故蠻といふ。〔六〕蜀妓　東川は蜀の地なり。故にかくいふ。〔七〕黔婁　古の貧士の名。樂天自ら比す。

醉後聽唱桂花曲

詩云。遙知天上桂花孤。試問嫦娥更有無。月宮幸有三閑田地一。何不三中央種二兩株一。此曲韻怨切。聽輒感レ人。故云レ爾。

醉後桂花曲を唱ふるを聽く

詩に云く、遙に知る天上桂花孤なるを、試みに問ふ嫦娥更に有りや無なや、月宮幸に閑田地有り、何ぞ中央に兩條を種ゑざると。此の曲韻怨切、聽けば輒ち人をして感ぜしむ。故に爾か云ふ。

桂華詞意苦丁寧。　桂華の詞意苦だ丁寧、
唱到嫦娥醉便醒。　唱へて嫦娥に到りて醉便ち醒む。
此是人間腸斷曲。　此は是れ人間腸斷ゆる曲、
莫教不得意人聽。　意を得ざる人をして聽かしむる莫れ。

【題義】醉後に桂花曲を歌ふのを聽いて作つた詩である。

【詩意】桂花曲の詞意は至つて怨切であるから、試問嫦娥更有無といふ句まで歌つて來ると、醉も忽ち醒めてしまふ。恐らく此世に於ける最も悲哀な曲であらう。失意の人には聽かせぬがよい。

酬夢得以予五月長齋延僧徒絕賓友見戲十韻

夢得が予の五月長齋して僧徒を延き、賓友に絕つを以て戲れらるるに酬ゆ、十韻

賓客懶逢迎。翛然池館清。　賓客は逢迎するに懶し、翛然として池館清し。
簷閒空燕語。林靜未蟬鳴。　簷閒にして燕語空しく、林靜にして未だ蟬鳴かず。
葷血還休食。杯觴亦罷傾。　葷血還た食ふを休め、杯觴亦傾くるを罷む。
三春多放逸。五月暫修行。　三春多くは放逸し、五月暫く修行す。
香印朝煙細。紗燈夕焰明。　香印朝煙細く、紗燈夕焰明かなり。
交游諸長老。師事古先生。　諸長老に交游し、古先生に師事す。
（竺乾古先生也。）
禪後心彌寂。齋來體更輕。　禪して後心彌よ寂に、齋し來りて體更に輕し。
不唯忘肉味。兼擬滅風情。　唯肉味を忘るるのみならず、兼ねて風情を滅せんと擬す。
蒙以聲聞待。難將戲論爭。　聲聞を以て待たれ、戲論を將て爭ひ難し。
虛空若有佛。靈運恐先成。　虛空若し佛有らば、靈運恐らくは先づ成らん。

【字解】【一】長齋　長期の齋戒。【二】翛然　悠然といふが如し。【三】葷血　臭氣ある野菜及び魚肉。【四】香印　香爐。【五】紗燈　薄絹を張つた燈。【六】古先生　佛をいふ。【七】忘肉味　論語に、子在齊聞韶三月、不知肉味とある。【八】聲聞　佛家にて經を誦し法を聽くに由りて道を悟る者をいふ。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が樂天の五月に長齋して賓客を謝絕し、僧徒を招引せるを以て戲れに詩を寄せたのに酬いたのである。

【詩意】客の送迎もなく吾が池館は極めて閒靜である。簷先には燕が空しく鳴いてゐるのみで、林

も静で蟬はまだ鳴かない。吾は葷血を避けて食はず、酒杯をも遠ざけ、三春の間は放逸に暮らしたので、五月になつて暫く佛道の修行を始めた。香爐の煙が細く立ちのぼり、燈明の光が明く輝く處に諸長老に交り佛に奉事してゐる。坐禪した後に心はますます安靜になり、齋戒すれば身が一層輕くなる。ただ肉の味を忘れるばかりでなく、同時に情慾をも滅却せんとする位だ。君から聲聞だなどと冷かされたが、誠に以て冗談ではないのだ。虛空に若し佛があるならば、吾こそ先づ其功德を得るであらう。

又和令公新開龍泉晉水二一池

又令公の新に龍泉・晉水二池を開くに和す

舊有潢汚泊。今爲白水塘。　舊と潢汚の泊有り、今は白水の塘と爲る。

詩云。方塘含白水。

笙歌聞四面。樓閣在中央。　笙歌は四面に聞え、樓閣は中央に在り。

春變煙波色。晴添樹木光。　春は煙波の色を變じ、晴は樹木の光を添ふ。

龍泉信爲美。莫忘午橋莊。　龍泉信に美と爲すも、忘るること莫れ午橋莊。

【字解】【一】潢汚　みづたまり。左傳に、潢汚行潦之水とある。湖澤を泊といふ。【二】白水　清水なり。塘は池。闊きを池といひ、方なるを塘といふ。【三】午橋莊　洛度の別莊、前に見ゆ。

【題義】令公は中書令裴度をいふ。裴度が「新に龍泉・晉水の二池を開鑿した」といふ詩に和したのである。

【詩意】もと水たまりであつた處が今は化して清水の漲る池になり、笙歌の聲が四方に響き渡り、樓閣は中央に聳え、春は煙波の色を變じ、晴れた日が樹木の光を添へる。誠に結構な別莊になつた。龍泉池は信に結構ではあるが、午橋莊も決して棄てたものではない。

早夏曉興。贈夢得

早夏曉に興き、夢得に贈る

窗明簾薄透朝光。　窗明かに簾薄くして朝光を透す、
臥整巾簪起下牀。　臥して巾簪を整へ起きて牀を下る。
背壁燈殘經宿焰。　壁に背ける燈は宿を經る焰を殘し、
開箱衣帶隔年香。　箱を開ける衣は年を隔つる香を帶ぶ。
無情亦任他春去。　無情亦他春の去るに任す、
不醉爭銷得晝長。　醉はずんば爭でか晝の長きを銷し得ん。
一部清商一壺酒。　一部の清商一壺の酒、
與君明日煖新堂。　君が與に明日新堂に煖めん。

【字解】【一】他春　彼の春。【二】清商　樂曲の名。

【題義】夏の初に朝早く起きて劉禹錫（字は夢得）に贈つた詩である。

【詩意】簾を透して朝日の光がさし込んで來た。臥して巾簪を整へ起きて寢臺を下りた。壁に依つて立つ燈は宵越の光を留め、箱を開いて著物を取り出せば去年の香がする。無情にも彼の春は我を捨てて去つた。酒でも飲まずば、どうして永い日を過されよう。一部の清商曲と一壺の酒とを以て君をもてなしたいと思ふから、明日遊びに來てはくれまいか。

春日題乾元寺上方最高峰亭

春日乾元寺の上方の最高峰の亭に題す

危亭絶頂四無鄰。　危亭絶頂四に鄰無し、
見盡三千世界春。　見盡す三千世界の春。
但覺虛空無障礙。　但覺ゆ虛空に障礙無きを、
不知高下幾由旬。　知らず高下幾由旬ぞ。
廻看官路三條線。　廻らし看る官路三條の線、
却望都城一片塵。　却りて望む都城一片の塵。
賓客暫遊無半日。　賓客暫く遊ぶも半日無し、
王侯不到便終身。　王侯到らず便ち身を終ふ。
始知天造空閒境。　始めて知る天造空閒の境、
不爲忙人富貴人。　忙人と富貴の人との爲ならざるを。

【字解】〔一〕上方　地勢最高の處をいふ。
〔二〕危亭　高い亭。
〔三〕由旬　佛語。尺度の名。

【題義】春、乾元寺の境内の最高峰に在る亭に題した詩である。

【詩意】高い亭が山の絶頂に獨り聳え、此亭に上れば三千世界の春を一目に見盡すことが出來る。虛空を仰げば何等の目を遮るものなく、その高さは幾由旬あるか測り知られぬ程である。下界を回望すれば三條の官路が眞直に通じ、都城を願望すれば一片の塵のやうに見える。客は來ても半日とも留まらず、王侯などは生涯の中に一度も來ない。誠に閒靜な處である。是に於てか天が閒靜な場所を造つたのは、忙人や富貴の人の爲でないことがわかる。

奉和思黯相公以李蘇州所寄太湖石奇狀絶倫因題二十韻見示。兼呈夢得

思黯相公が李蘇州の寄する所の太湖石の奇狀絶倫なるを以て、因つて二十韻を題して示さるるに和し奉り、兼ねて夢得に呈す

錯落復崔嵬。蒼然玉一堆。　錯落復た崔嵬、蒼然たり玉一堆。

峰駢仙掌出。罅坼劍門開。
峭頂高危矣。盤根下壯哉。
精神欺竹樹。氣色壓亭臺。
隱起磷磷狀。凝成瑟瑟胚。
廉稜露鋒刃。清越扣瓊瑰。
岌嶪形將動。巍峩勢欲摧。
奇應潛鬼怪。靈合蓄雲雷。
黛潤霑新雨。斑明點古苔。
未曾棲鳥雀。不肯染塵埃。
尖削琅玕笋。窪剜瑪瑙罍。
海神移碣石。畫障簇天台。
在世爲尤物。如人負逸才。
渡江一葦載。入洛五丁推。
出處雖無意。升沈亦有媒。

拔從水府底。置向相庭隈。
對稱吟詩句。看宜把酒杯。
終隨金礪用。不學玉山頹。
疏傳心偏愛。園公眼屢廻。
共嗟無此分。虛管太湖來。

（題爲李蘇州所寄。居易與夢得俱與姑蘇。而不獲此石。）

【字解】【一】太湖石　太湖より採り來る故此名あり。園林中疊する所の假山なり。白樂天に太湖石記あり。本集に載せず、事文類聚に見ゆ。【二】錯落　ごろごろ。ころがつてゐる貌。崔嵬は高く聳ゆる貌。【三】蒼然　青黑き貌。【四】仙掌　仙人掌。華嶽の峰の名。華嶽志に、嶽頂東峯曰仙人掌、峰側石上有痕、自下望之、宛然一掌、五指俱備とある。【五】劍門　蜀の山の名。【六】峭頂　けはしき頂。【七】盤根　わだかまる根。【八】磷磷　玉石の色澤なり。【九】瑟瑟　珍寶の名。【一〇】廉稜　かどだつこと。【一一】瓊瑰　美玉なり。【一二】巍峩　高く聳ゆる貌。【一三】琅玕　美玉なり。【一四】碣石　山の名。【一五】天台　山の名。【一六】尤物　すぐれたもの。【一七】逸才　すぐれた才能。【一八】一葦　小舟。【一九】五丁　五人のわかもの。【二〇】升沈　浮沈なり。【二一】水府　水神の役所。【二二】金礪　といし。【二三】玉山頹　醉倒すること。【二四】疏傳　漢の太子少傅疏受。樂天は時に太子少傅たりし故、自ら比せるなり。【二五】園公　商山四皓の一人東園公。夢得は時に太子賓客たりし故、借りて夢得に比す。【二六】太湖　湖の名。江蘇・浙江二省に跨る。

【題義】牛僧孺（字は思黯）、嘗て宰相たりし故相公といふ）が蘇州刺史李氏から寄贈された太湖石の

奇狀絶倫なるを以て、二十韻四十句の長詩を作つて樂天に見せたので、樂天は其詩に和し、兼ねて劉禹錫（字は夢得）に呈したのである。

【詩意】蒼然として堆を成した石がごろごろと聳えてゐる。峰の竝んでゐることは仙人掌の如く、罅の坼けてゐることは劍門山のやうである。頂は高く險しく聳え、麓は壯大にひろがつてゐる。石の精神は竹樹を侮り、氣色は亭臺を壓し、そのかどだつことは鋒刃の如く、其音は美玉を叩くやうに澄んでゐる。今にも飛動せんとする勢が見えて、鬼神の潛めるが如く雲雷を蓄ふるが如くで、新雨に潤つて苔が斑を成し、鳥雀も棲らず塵も著かない。尖つてゐることは美玉を刻んだ筍の如く、窪んでゐることは瑪瑙の罍の如く、海神が碣石を移したのかと疑はれ、天台山を簇らせたやうに畫障が竝んでゐる。逃れた才能を持つ人の如く、世間から珍重せられ、小舟に載せられて江を渡り、五丁に推されて洛陽に來た。石は好んで世に出ようとは思はないのであるが、李蘇州の引立によつて幸に世に顯れ、水神の役所から拔擢されて宰相の庭に据ゑられたのである。此石に對すれば詩を吟ずるに宜しく、君ればに杯を把るに宜しい。吾は此石を以て身を礪く用に供し、玉山の頹るるに傚はないつもりだ。我は頗る此石が氣に入り、夢得も屢〻目を著けた。併し我も夢得も共に其柄でないので、嘗て太湖のあたりの刺史となつてゐながら、竟に此石に逢はなかつたのは、慨嘆の至りだ。

奉和思黯相公雨後林園四韻見示

思黯相公が雨後の林園四韻を示されしに和し奉る

新晴夏景好。復此池邊地。　新に晴れて夏景好し、復た此れ池邊の地。
煙樹綠含滋。水風清有味。　煙樹綠にして滋を含み、水風清くして味有り。
便成林下隱。都忘門前事。　便ち林下の隱と成り、都て門前の事を忘る。
騎吏引歸軒。始知身富貴。　騎吏歸軒を引き、始めて知る身の富貴なるを。

【字解】〔一〕歸軒　本邸に歸る車。

【題義】牛僧孺（字は思黯）から雨後の林園と題する四韻八句の詩を示されたのに和したのである。

【詩意】この池邊の夏の景色は極めてよい。煙つたやうな樹には若葉が茂り合ひ、水上から吹いて來る風が快い。相公は全く林下の隱士になりすまして、門前に車馬の輻湊してゐることなどは忘れてしまつた。ただ歸りに騎吏が相公の車の前驅をするのを見て、始めて己の富貴の身なるに氣が附くのだ。

晚夏閒居絶無賓客欲尋夢得先寄此詩

晚夏閒居して絶えて賓客なし。夢得を尋ねんと欲して先づ此詩を寄す

魚笋朝餐飽。蕉紗暑服輕。
欲爲窓下寢。先傍水邊行。
晴引鶴雙舞。秋生蟬一聲。
無人解相訪。有酒共誰傾。
老更諳時事。閒多見物情。
只應劉與白。二叟自相迎。

魚笋朝餐飽き、蕉紗暑服輕し。
窓下に寢ぬるを爲さんと欲し、先づ水邊に傍ひて行く。
晴れて鶴の雙舞を引き、秋蟬の一聲を生ず。
人の解く相訪ふ無し、酒有れども誰と共にか傾けん。
老いて更に時事を諳んじ、閒にして多く物情を見る。
只應に劉と白と、二叟自ら相迎ふべし。

【字解】〔一〕蕉紗　蕉布及び紗。

【題義】夏の末に閒居すれば、誰も來り訪ふ者がないので退屈でたまらず、劉禹錫（字は夢得）を尋ねようと思つて先づ此詩を寄せたのである。

【詩意】魚と筍とで朝飯をすまし、芭蕉布や紗の輕い夏著を著、窓下に一睡しようとして先づ池の邊を散歩すれば、二羽の鶴が晴天に舞ひ、新蟬が秋の初音を告げてゐる。誰も訪ひ來る者がないので酒はあつても相手がない。老いては一層時事が氣に懸り、閒暇でゐると人情の紛亂がよくわかる。只君と僕とは二翁相迎へて交遊し、世間の渦中に卷き込まれないやうにしよう。

寄李蘄州

李蘄州に寄す

下車書奏龔黃課。
動筆詩傳鮑謝風。
江郡謳謠誇杜母。
洛城歡會憶車公。
笛愁春盡梅花裏。
簟冷秋生薤葉中。
蘄州出好笛并薤葉簟。
不道蘄州歌酒少。
使君難稱與誰同。

車より下りて書は奏す龔黃の課、
筆を動かして詩は傳ふ鮑謝の風。
江郡の謳謠杜母を誇り、
洛城の歡會車公を憶ふ。
笛愁へて春は盡く梅花の裏、
簟冷かにして秋は生ず薤葉の中。
道はざりき蘄州歌酒少しと、
使君稱し難し誰と與にか同じうせん。

【字解】〔一〕龔黃　漢の循吏龔遂・黃霸なり。〔二〕鮑謝　宋の詩人鮑照・謝靈運。〔三〕江郡　蘄州を指して言ふ。蘄州は湖北省黃州府。杜母は後漢の杜詩をいふ。杜詩は光武の時南陽太守となり、政治清平にして境内殷足す。時人召信臣にくらべ、語して曰く、前有召父、後有杜母と。〔四〕洛城　洛陽。車公は漢の丞相田千秋なり。年老いたるを以て車に乘りて宮中に出入するを得。時に之を車丞相といふ。〔五〕薤葉　植物の名。〔六〕使君　刺史の稱。

【題義】蘄州刺史李氏に寄せた詩である。

【詩意】李蘄州は車から下りれば龔遂や黃霸のやうに治民の書を闕下に奏し、筆を動かせば鮑照や謝靈運のやうな好詩を作る。されば蘄州に於ては人民から其德を稱する謳を作られ、洛陽の歡會に於ては田丞相のやうに慕はれた。今や蘄州刺史として、落梅花の曲を奏する笛聲を聽いて春の盡くるを

知り、蕭葉簾の冷かなるを覺えて秋の來るを感じてゐるであらう。案外にも蘄州には歌酒が少いと見えて、一向我に詩を寄せないのはけしからぬ。相手がないからだとは謂はせないぞよ。

酬思黯相公晩夏雨後感秋見示

思黯相公が晩夏雨後に秋を感じて示されしに酬ゆ

暮去朝來無歇期。　暮去り朝來りて歇む期無し、
炎涼暗向雨中移。　炎涼暗に雨中に向つて移る。
夜長祇合愁人覺。　夜の長きは祇合に愁人覺るべし、
秋冷先應瘦客知。　秋の冷かなるは先づ應に瘦客知るべし。
兩幅彩箋揮逸翰。　兩幅の彩箋逸翰を揮ひ、
一聲寒玉振清辭。　一聲の寒玉清辭を振ふ。
無憂無病身榮貴。　憂無く病無く身は榮貴なり、
何故沈吟亦感時。　何の故に沈吟して亦時を感ずる。

【題義】牛僧孺（字は思黯）が「夏の末の雨後に早くも秋を感じた」といふ詩を作つて樂天に示したのに酬いたのである。

【詩意】一日一日と月日が立つて歇む時なく、熱い夏が雨を經て早くも涼しい秋に移る。秋の夜の長いことは愁人が能く知り、秋の冷氣は病人が眞先に感ずる筈である。然るに今相公は二枚の詩箋に、勢よく秋を感ずる詩を書きなぐり、其詩は寒玉を振ふが如き清き韻を發してゐる。憂もなければ病氣もなく且富貴の身であるのに、何故に秋を感ずることがかくは深いのであらう。

【字解】〔一〕瘦客　瘦せた人。病人。〔二〕兩幅彩箋　二枚の詩を書く紙。逸翰は勢のよい筆。〔三〕沈吟　思案する。

久雨閒悶。對酒偶吟

久雨閒悶、酒に對して偶吟す

凄凄苦雨闇銅駝。　凄凄たる苦雨銅駝に闇く、
嫋嫋涼風起漕河。　嫋嫋たる涼風漕河より起る。
自夏及秋晴日少。　夏より秋に及ぶまで晴日少く、
從朝至暮悶時多。　朝より暮に至るまで悶時多し。
鷺臨池立窺魚笱。　鷺は池に臨みて立ち魚笱を窺ひ、
隼傍林飛拂雀羅。　隼は林に傍ひて飛び雀羅を拂ふ。
賴有杯中神聖物。　賴に杯中神聖の物有り、

【字解】〔一〕凄凄　寒冷の貌。銅駝は洛陽の街の名。〔二〕嫋嫋　風の吹く貌。漕河は河の名。〔三〕魚笱　魚を捕ふる具。〔四〕雀羅　雀を捕ふる網。〔五〕杯中神聖物　酒なり。〔六〕十分　杯に滿つること。

百憂無奈十分何。　百憂も十分を奈何ともする無し。

【題義】霖雨の降る時愁悶のあまり酒に對して偶吟した詩である。

【詩意】霖雨が降りそそいで銅駝坊のあたりが薄暗く、寒い風が漕河の邊から吹いて來る。夏から秋にかけて晴れた日は少いので、朝から晩まで氣が塞いでくさくさする。見れば鷺は池の畔に立つて魚筍の魚をねらひ、隼は林の邊に飛んで網に罹つた雀を捕へようとしてゐる。誠に淋しい景色であるが幸に酒があるので愁悶を霽らすことが出來る。さすがの百憂といへども、此酒一杯にはかなはないから。

雨後秋涼

夜來秋雨後。秋氣颯然新。
團扇先ず手を辭し、生衣身に著けず。
團扇先辭手。生衣不著身。
更に砧を添へて思を引き、簟と相親み難し。
更添砧引思。難與簟相親。
此境誰か偏に覺ゆる、貧閑老瘦の人。
此境誰偏覺。貧閑老瘦人。

【字解】〔一〕颯然　秋風の聲。〔二〕生衣　かたびらの類。〔三〕貧閑老瘦人　樂天自ら謂ふ。

【題義】雨後の秋涼の狀を述べた詩である。

【詩意】昨夜から雨が降つて、めつきり秋らしくなつた。團扇も既に手を離れ、生衣も脱ぎ棄て、また砧の人の愁を引くのみで、簟の上に横はる氣にもなれない。この境趣を最も早く感ずる者は、貧閑老瘦の人たる我であらう。

酬夢得早秋夜對月見寄　夢得が早秋の夜月に對して寄せられしに酬ゆ

吾衰寡情趣。君病懶經過。
吾衰へて情趣寡く、君病みて經過に懶し。
其奈西樓上。新秋明月何。
西樓の上、新秋の明月を其奈何せん。
庭蕪凄白露。池色澹金波。
庭蕪白露凄く、池色金波澹し。
況是初長夜。東城砧杵多。
況んや是れ初めて長夜、東城砧杵多きをや。

【字解】〔一〕經過　訪問する。〔二〕庭蕪　庭の荒草。〔三〕東城　洛陽の東の方。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が早秋の夜に月に對して詩を賦し、それを樂天に寄せたので、樂天は此詩を以て酬いたのである。

【詩意】吾は老衰して感興に乏しく、君は病氣で來訪するのも大儀らしい。庭上の荒草には白露が置き、池には金波が漂ふのを見、城東の砧の音の繁きを聞き、初めて夜の長きを感ずる時、西樓の上か

ら明月を望み、心中如何なる感が湧いたか。

題謝公東山障子

謝公の東山の障子に題す

賢愚共在浮生内。　賢愚共に在り浮生の内、
貴賤同趨羣動間。　貴賤同じく趨る羣動の間。
多見忙時已衰病。　多く見る忙なる時已に衰病するを、
少聞健日肯休閑。　少しく聞く健なる日肯て休閑するを。
鷹饑受縶(三)從難退。　鷹饑ゑて縶を受くれば從つて退き難し、
鶴老乗軒(六)亦不還。　鶴老いて軒に乗れば亦還らず。
唯有風流謝安石。　唯風流の謝安石有り、
拂衣攜妓入東山。　衣を拂ひ妓を攜へて東山に入る。

【題義】謝安の東山の遊を畫いた障子に題した詩である。

【詩意】この俗世間に於ては賢者も愚者も貴きも賤きも皆衣食の爲に奔走してゐる。老衰してへとへとになるまで世事に忙殺されてゐる者は多く見るが、まだ身の逸者なうちに引退するやうな者はまだ聞かない。鷹は饑ゑて食を求めるから縶に縛られて退き難くなり、鶴は老いて軒に乗るともう引退が出來なくなるやうなものだ。ただ晉の謝安石は誠に風流な人で、衣を拂ひ妓を攜へて東山に隱れた。

【字解】(一) 謝公　晉の陽夏の人、字は安石。少くして重名あり、徵辟皆就かず。東山に隱居し、妓を以て相從ふ。(二) 浮生　俗世間。(三) 羣動　世俗のいとなみ。衣食の爲に奔走すること。(四) 休閑　引退する。(五) 縶　ひも。身を縛る索。(六) 軒　大夫の車。左傳に衛懿公好鶴、鶴有乗軒者とある。

謝楊東川寄衣服

楊東川の衣服を寄せしを謝す

年年衰老交遊少。　年年衰老して交遊少し、
處處蕭條書信稀。　處處蕭條書信稀なり。
唯有巢兄不相忘。　唯巢兄有りて相忘れず、
春茶未斷寄秋衣。　春茶未だ斷えざるに秋衣を寄す。

【題義】東川節度使楊汝士（字は慕巢）の衣服を寄贈せるを謝した詩である。

【詩意】年年老衰して友達が少くなり、どこからも手紙さへ來ない。ただ慕巢兄はよくも我を忘れず、先頃くれた春茶がまだなくならないのに、また秋衣を送つてくれた。誠にありがたい。

【字解】(一) 交遊　友人。(二) 蕭條　淋しき風。(三) 巢兄　慕巢は楊東川の字。

詠懷寄皇甫朗之

懷を詠じて皇甫朗之に寄す

老大多情足往還。　老大多情往還足る、
招僧待客夜開關。　僧を招き客を待ちて夜關を開く。

【字解】(一) 老大　老衰といふが如し。(二) 開關　門を開く。(三) 閙處　うるさい處。(四) 未

學調氣後衰中健。　氣を調するを學びて後衰中に健あり、
不用心來閑處閒。　心を用ひざる來閑處も閒なり。
養病未能辭薄俸。　病を養ひて未だ薄俸を辭する能はず、
忘名何必入深山。　名を忘れて何ぞ必ずしも深山に入らん。
與君別有相知分。　君と別に分を相知る有り、
同置身於木雁間。　同じく身を木雁の間に置く。

【題義】感懷を詠じて皇甫朗之に寄せた詩である。

【詩意】老いては人が懷かしくなつて好んで相往來し、夜も門を開いて僧や客を招待する。氣血を調和する法を學んでからは衰中にも健あるを覺え、萬事に無關心になつてからは騷がしい處にゐても閒を得られる。病を養つて未だ官を辭して退く能はず、名利を忘るるには必ずしも山中に入るには及ばない。君と僕とはよく己の分を知つてゐるから、俱に材と不材との間に身を置いて禍を招くやうなことはない。

東城晚歸

一條筇杖懸龜榼。　一條の筇杖龜榼を懸く、
雙角吳童控駄銜。　雙角の吳童駄銜を控く。
晚入東城誰識我。　晚に東城に入るも誰か我を識らん、
短靴低帽白蕉衫。　短靴低帽白蕉衫。

【題義】洛陽の東に夕方歸る時の詩である。

【詩意】一本の竹の杖に酒樽を懸けてかつぎ、總角の僮が馬を牽いて先だち、短靴をはき低帽をかぶり白蕉衫を著て、我は夕に東城に入るも誰も我を識る者がない。

與夢得沽酒閒飲且約後期

少時猶不憂生計。　少時猶ほ生計を憂へず、
老後誰能惜酒錢。　老後誰か能く酒錢を惜まん。
共把十千沽一斗。　共に十千を把りて一斗を沽ひ、
相看七十欠三年。　相看るに七十に三年を欠く。
閒徵雅令窮經史。　閒に雅令に徵して經史を窮め、
醉聽清吟勝管絃。　醉ひて清吟を聽きて管絃に勝る。

夢得と酒を沽ひて閒飲し、且後期を約す

【字解】〔一〕十千　一萬錢なり。曹植の詩に、美酒斗十千とある。〔二〕雅令　風雅な命令。〔三〕家醞　自家釀造の酒。

雁　莊子山木篇に、弟子問於莊子曰、山中之木、以不材得終其天年、主人之雁以不材死、先生將何處、莊子笑曰、周將處乎夫材與不材之間云云とある。

筇竹の杖。龜榼は酒樽。〔二〕雙角　總角なり。駄銜は馬のくつわ。〔三〕蕉衫　芭蕉布の服。

【字解】〔一〕筇杖　筇は竹の名。

更待菊黄家醞熟。　更に菊黄に家醞の熟するを待ちて、
共君一醉一陶然。　君と共に一醉して一に陶然たらん。

【題意】劉禹錫（字は夢得）と酒を買うて飲み、且後會を約した詩である。

【詩意】少い時は生計の憂もしなかつたが、老後にも敢て酒を飲む錢を惜まない。共に一萬錢を投じて一斗の酒を買つて飲んだが、お互も既に六十七の老翁になつたのを嘆せざるを得ない。閑に雅命に應じて俱に經史を窮め、醉うて清吟を聽けば管絃に勝ることを知る。また秋になつて菊の花が咲き家醞の熟する頃を待つて、共に陶然として一醉しよう。

與牛家妓樂雨夜合宴　牛家の妓樂と雨夜合宴す

玉管清絃聲旖旎。　玉管清絃聲旖旎、
翠釵紅袖坐參差。　翠釵紅袖坐參差。
兩家合奏洞房夜。　兩家合せ奏す洞房の夜、
八月連陰秋雨時。　八月連に陰る秋雨の時。
歌臉有情凝睇久。　歌臉情有りて睇を凝らすこと久し、
舞腰無力轉裙遲。　舞腰力無く裙を轉ずること遲し。
人間歡樂無過此。　人間の歡樂此に過ぐる無し、
上界西方卽不知。　上界西方は卽ち知らず。

【題意】牛僧孺の家の妓と吾が家の妓と雨の夜に宴した詩である。

【詩意】管絃の聲が盛に起り、妓が亂雜に坐つてゐる。これぞ秋八月の雨の夜に、奥座敷で兩家の妓が演奏するのである。妓の顏は情を含んで睇を凝らし、舞の腰が穩かで裙のさばきも緩かである。仙人界や極樂淨土はいざ知らず、人間界には此にまさる樂はない。

【字解】〔一〕旖旎　盛なる貌。〔二〕參差　坐席の亂れてゐる貌。〔三〕兩家　牛家と白家。洞房は奥座敷。〔四〕歌臉　歌妓の顏。〔五〕上界　仙人界。西方は極樂淨土。

和楊六尚書喜兩弟漢公轉吳興魯士賜章服。命賓開宴用慶恩榮賦長句見示

楊六尚書が兩弟漢公吳興に轉じ、魯士章服を賜ふを喜び、賓に命じ宴を開き用て恩榮を慶し、長句を賦して示されしに和す

華筵賀客日紛紛。　華筵の賀客日に紛紛、
劍外歡娛洛下聞。　劍外の歡娛洛下に聞ゆ。

【字解】〔一〕楊六尚書　楊汝士なり。〔二〕漢公　楊汝士の弟、吳興は浙江省吳興縣。後の得楊湖州

朱紱(五)寵光新照地。　朱紱寵光新に地を照し、
彤襜(六)喜氣遠凌雲。　彤襜の喜氣遠く雲を凌ぐ。
榮聯(七)花蕚詩難和。　榮は花蕚を聯ねて詩和し難く、
樂助(八)塤篪酒易醺。　樂は塤篪を助けて酒醺じ易し。
感羨料應知我意。　感羨料るに應に我が意を知るべし、
今生此事不如君。　今生此事君に如かず。

書云云と題する詩を見よ。【三】魯士　楊汝士の弟。【四】劍外　蜀の劍閣山の南。時に楊汝士は劍南東川節度使であつた。洛下は洛陽。【五】朱紱　朱綬なり。易經に朱紱方來とある。【六】彤襜　赤き蔽膝。【七】花蕚　兄弟をいふ。詩經に、常棣之華、鄂不韡韡、凡今之人、莫如兄弟とあるに因る。【八】塤篪　如に樂器の名。詩經に伯氏吹塤、仲氏吹篪とある。因つて兄弟和睦するをいふ。

【題義】禮部尚書楊汝士が弟の漢公は吳興に轉任になり、他の弟の魯士は官服を賜はつたのを喜び、幕賓に命じて宴を開き、寵榮をよろこんで詩を賦して樂天に示したので、樂天がそれに和したのである。

【詩意】賀客が續續と宴席に集つたといふ、劍南の歡娛の噂が洛陽まで傳はつた。天子から賜はつた朱紱彤襜は地を照し、喜悅の意氣が天を衝くであらう。兄弟俱に光榮に浴したことを祝する詩は仲仲に和し難く、音樂は兄弟の和睦を助けて酒がまはり易いであらう。僕が遙に羨んでゐることは君にもよくわかるであらう。僕は君のやうに兄弟といふものを持たないから。

自詠

鬢白面微紅。醺醺(一)半醉中。　鬢白くして面微しく紅なり、醺醺たり半醉の中。
百年(二)隨手過。萬事轉頭空。　百年手に隨ひて過ぎ、萬事頭を轉じて空し。
臥疾瘦居士。行歌狂老翁。　疾に臥す瘦居士、行くゆく歌ふ狂老翁。
仍聞好事者。將我畫屏風。　仍ほ聞く事を好む者、我を將て屏風に畫くと。

【字解】【一】醺醺　酔ふ貌。【二】百年　人の一生。

【題義】己の情狀を寫した詩である。

【詩意】半酒に酔つてゐるので鬢は白いが顏は微しく赤い。忽ちのうちに一生もやがて過ぎさうになり、世間の萬事は顏をそむけて頓著しない。疾に臥しては病居士となり、行歌しては狂老翁となる。世間には物好な者もあつて、この俺を屏風に畫いて賞翫してゐる者があるさうだ。

夢得相過。援琴命酒。因彈秋思。偶詠所懷。兼寄繼之待價二相府

夢得の相過りしとき、琴を援き酒を命じ、因つて秋思を彈じ、偶〻所懷を詠じ、兼ねて繼之・待價二相府に寄す

閑居靜侶偶相招。
小飲初酣琴欲調。
我正風前弄秋思。
君應天上聽雲韶。

雲韶雅曲。上多與宰相一同聽之。

時和始見陶鈞力。
物遂方知盛聖朝。
雙鳳棲梧魚在藻。
飛沈隨分各逍遙。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の來訪せしとき琴を援き酒を酌み、因つて秋思を彈じ感懷を詠じ、兼ねて楊嗣復（字は繼之）李珏（字は待價）二宰相に寄せた詩である。

【詩意】我等閑居の仲間が相招き、小飲して琴を援き、正に風前に於て秋思を彈ずる。君等は應に宮闕に侍して雲韶を聽くであらう。今や世治まり物遂げて聖君賢相陶鈞の力たることがわかる。君等は鳳凰のやうに梧に棲み僕等は魚と同じく藻の中に居る。一は天上に飛び一は水中に沈んでゐるが、

閑居の靜侶偶相招く、
小飲初めて酣にして琴調せんと欲す。
我は正に風前に秋思を弄し、
君は應に天上に雲韶を聽くべし。

時和して始めて見る陶鈞の力、
物遂げて方に知る盛聖の朝。
雙鳳は梧に棲みて魚は藻に在り、
飛沈分に隨ひて各〻逍遙。

【字解】〔一〕雲韶　樂曲の名。
〔二〕陶鈞　天下を能く治める。
〔三〕雙鳳　繼之・待賢二宰相に喩ふ。魚は白樂天・劉夢得に喩ふ。

分に隨つて逍遙してゐることは同じである。

九月八日皇甫十見贈

君方對酒綴詩章。
我正持齋坐道場。
處處追遊雖不去。
時時吟詠亦無妨。
霜蓬舊鬢三分白。
露菊新花一半黃。
惆悵東籬不同醉。
陶家明日是重陽。

九月八日皇甫十の贈られしに酬ゆ

君は方に酒に對して詩章を綴り、
我は正に齋を持して道場に坐す。
處處追遊して去らずと雖も、
時時吟詠するも亦妨げ無し。
霜蓬の舊鬢三分白く、
露菊の新花一半黃なり。
惆悵す東籬に同じく醉はざるを、
陶家明日是れ重陽。

【題義】九月八日に皇甫十から詩を贈られたのに酬いたのである。

【詩意】君は方に酒に對して詩を作つてゐるであらうが、僕は佛道修業の爲に齋戒してゐる。處處に追遊して離れないけれども、時時相會して吟詠するのもわるくはない。蓬の如く亂れた鬢は三分ほど

【字解】〔一〕持齋　齋戒する。道場は佛道を修する場所。
〔二〕陶家　樂天自ら陶淵明に比していふ。重陽は九月九日の節句。

白毛になり、露に浥つた菊の花は半黄色である。明日は重陽の節句だといふのに、俱に東籬の菊に對して一醉することの出來ないのは殘念の至である。

慕巢尚書書云。室人欲爲置一歌者。非所安也。以詩相報。因而和之

慕巢尚書の書に云く、室人爲に一歌者を置かんと欲す。安んずる所に非ざるなりと。詩を以て相報ず。因つて之に和す

東川已過二三春。
南國須求一兩人。
富貴大都多老大。
歡娛太半爲親賓。
如愁翠黛應堪重。
買笑黄金莫訴貧。
他日相逢一杯酒。

東川已に過ぐ二三春、
南國須らく求むべし一兩人。
富貴は大都老大多し、
歡娛は太半親賓の爲にす。
愁ふるが如き翠黛應に重んずるに堪ふべし、
笑を買ふ黄金貧を訴ふる莫れ。
他日相逢ふ一杯の酒、

【字解】〔一〕室人　家人なり。〔二〕東川　時に慕巢尚書は東川節度使であつた。〔三〕南國　東川を指して言ふ。〔四〕老大　老年なり。〔五〕翠黛　美妓をいふ。〔六〕落　梁塵　善く歌ふ者をほめていふ。文選の注に、魯人虞公善雅歌、發聲震動梁上塵とある。

樽前還要落梁塵。

樽前還た要す梁塵を落すを。

【題義】禮部尚書楊汝士（字は慕巢）の書に「家人が一歌妓を雇ひたいといふが敢て安んずる所でない。」とあつて、詩を以て報じて來た。因つて其詩に和したのである。

【詩意】君は東川節度使になつてから二三年になるのだから、一人二人の歌妓を置くのは何でもあるまい。富貴になるのは大抵老年で、歡娛は太半は親賓の爲にするものである。一唱人をして愁へしむるが如き歌妓は重んずるに堪ふるものであるから、笑を買ふ爲の金を惜むべきではない。後日君と相逢うて一杯の酒を酌むときに、樽前で歌つて聽かせて貰ひたいものだ。

杪秋獨夜

杪秋獨夜

無限少年非我伴。
可憐清夜與誰同。
歡娛牢落中心少。
親故凋零四面空。
紅葉樹飄風起後。

限り無き少年は我が伴に非ず、
憐む可き清夜誰と與にか同じうせん。
歡娛牢落中心少く、
親故凋零四面空し。
紅葉樹は飄る風起る後、

【字解】〔一〕杪秋　晩秋。秋の末。〔二〕牢落　衰へる。〔三〕凋零　死亡する。〔四〕前頭　眼前。

白鬚人立月明中。　白鬚人は立つ月明の中。
前頭更有蕭條物。　前頭更に蕭條たる物有り、
老菊衰蘭三兩叢。　老菊衰蘭三兩叢。

【題義】秋の末、夜獨り立てる情景を述べた詩である。

【詩意】少年は數多あれども吾が仲間とするには不適當である。折角の良夜も俱に樂むべき相手がない。若い時の歡樂は全く絶えて中心淋しさを感じ、親友も死亡して何處を見ても人影が少い。風が吹き起つて紅葉の飄る處に、白鬚を垂れて月明の中に獨り立てば、眼前には更に物淋しいもの、即ち二三叢のすがれた菊、衰へた蘭がある。

憑李睦州訪徐凝山人

郡守輕詩客。鄉人薄釣翁。　郡守は詩客を輕んじ、鄉人は釣翁を薄んず。
解憐徐處士。唯有李郎中。　解く徐處士を憐む、唯李郎中有り。

【字解】〔一〕郡守　州の長官。刺史。〔二〕李郎中　即ち李睦州なり。

【題義】睦州刺史李氏の徐凝山人を訪ひしをほめた詩である。

【詩意】刺史は詩人を侮り、鄉人は釣翁を馬鹿にするのが世のならひであるのに、李郎中は感心なことに徐凝を愛憐して之を訪うた。

蘇州故吏

江南故吏別來久。　江南の故吏別來久し、
今日池邊識我無。　今日池邊我を識るや無や。
不獨使君頭似雪。　獨り使君の頭の雪に似たるのみならず、
華亭鶴死白蓮枯。　華亭の鶴は死して白蓮は枯る。

蘇州の故吏　樂天蘇州刺史たりし時の吏員に遇うて作つた詩である。

【題義】樂天が蘇州刺史たりし時の吏員に遇うて作つた詩である。

【詩意】蘇州の故吏に別れてから久しいものだから、今日池の邊で偶然逢つたが、恐らく彼も見覺えがあるまい。ただ僕の頭が雪のやうに白くなつたばかりでなく、蘇州から持ち還つた華亭の鶴も死し白蓮も既に枯れてしまつた。

得楊湖州書頗誇撫民接賓縱酒題詩因以絶句戲之

楊湖州の書を得たるに、頗る民を撫し賓に接し酒を縱にし詩を題するを誇る。因

律詩　憑李睦州訪徐凝山人　蘇州故吏　得楊湖州書頗誇撫民接賓縱酒題詩因以絶句戲之

【字解】〔一〕江南　蘇州なり。故吏は、もとの吏員。別來は、別れてから以來。〔二〕使君　刺史。樂天自ら謂ふ。〔三〕華亭鶴　華亭は鶴の名所。樂天の洛陽に還る時華亭の鶴を擔へ來りしこと前に見ゆ。白蓮も蘇州より持ち還りしものなり。

つて絶句を以て之に戯る

豈獨愛民兼愛客。　豈獨り民を愛するのみならんや兼ねて客を愛し、
不唯能飲又能文。　唯能く飲むのみならず又文を能くす。
白蘋洲上春傳語。　白蘋洲上春語を傳ふ、
柳使君輸楊使君。　柳使君は楊使君に輸れりと。

【題義】湖州刺史楊漢公の書狀を得たるに、頻に民を撫し客に接し、酒を飲み詩を賦することを誇る。因つて戯れに此絶句を寄せたのである。

【詩意】楊使君は民を愛し又よく客を愛する。能く酒を飲み又能く文に巧である。されば白蘋洲上に人が相傳へて言つてゐる。「昔の柳使君は今の楊使君よりも劣つてゐる」と。

【字解】〔一〕楊湖州　湖州刺史楊漢公、字は用又。前の和白樂天詩「兩弟漢公轉二吳興一、魯士瑀・章服云云」を見よ。〔二〕白蘋洲　樂天の白蘋州五亭記に、湖州城東南二百步、抵二霅溪一、連二汀州一、一名二白蘋一、梁吳興守柳惲於レ此賦レ詩云、汀州採二白蘋一、因以爲レ名也とある。〔三〕柳使君　梁の湖州刺史柳惲。白蘋州五亭記に、蓋是遺也、實柳守遺二觴之一、顧公（眞卿）推二輪之一、楊君繼二業之一とある。楊使君は今の湖州刺史楊漢公。

天宮閣秋晴晚望

洛城秋霽後。梵閣暮登時。　洛城秋霽れて後、梵閣暮に登る時。
此日風烟好。今秋節候遲。　此日風烟好し、今秋節候遲し。

霞光紅泛艷。樹影碧參差。　霞光紅にして泛艷、樹影碧にして參差。
莫慮言歸晚。牛家有宿期。　慮る莫れ言に歸ること晩しと、牛家宿期有り。

【字解】〔一〕洛城　洛陽。〔二〕梵閣　佛閣。即ち天宮閣。〔三〕節候　氣節時候。〔四〕參差　高低一樣ならざる貌。〔五〕牛家　牛僧孺の家。

【題義】天宮閣（前に屢〻見ゆ）に登つて秋晴の夕に四方を望んで作つた詩である。

【詩意】洛陽の秋晴れの日、夕に天宮閣に登つて見ると、風烟が爽に霽れ、秋色がまだ淺かつた。夕焼の光が紅に柳曳き、綠樹の影が高低してゐる。この景にみとれて歸りが遲くなつても、今夜は牛家に宿る約束があるから心配はない。

酬夢得暮秋晴夜對月相憶

霽月光如練。盈庭復滿池。　霽月光練の如く、庭に盈ち復た池に滿つ。
秋深無熱後。夜淺未寒時。　秋は深し熱無き後、夜は淺し未だ寒からざる時。
露葉團荒菊。風枝落病梨。　露葉荒菊に團に、風枝病梨落つ。
相思懶相訪。應是各年衰。　相思へども相訪ふに懶し、應に是各一年衰へたるなるべし。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の晩秋の夜に月に對して樂天を憶うたといふ詩に酬いたのである。

【詩意】月が冴えて其光が練の如く、庭にも池にも滿ち亙つてゐる。今や秋深け夜淺く、熱からず寒からず、誠に爽な好季節である。荒れた菊には圓く卷いた葉が露を帶びて居り、風に吹かるる枝から蟲ばんだ梨が落ちる。お互に相思うてはゐるが往き訪ふのが大儀である。これは全く年老いた證據である。

同夢得和思黯見贈。來詩中先敍三人同讌之歡。次有歎鬢髮漸衰嫌孫子催老之意。因酬妍唱。兼吟鄙懷

夢得と同じく思黯の贈られしに和す。來詩中先づ三人同讌の歡を敍し、次に鬢髮の漸く衰ふるを歎じ、孫子の老を催すを嫌ふの意あり。因つて妍唱に酬い、兼ねて鄙懷を吟ず

醉伴騰騰白與劉。
何朝何夕不同遊。
留連燈下明猶飲。
斷送樽前倒卽休。
催老莫嫌孫稚長。
加年須喜鬢毛秋。
教他伯道爭存活。
無子無孫亦白頭。

【字解】〔一〕妍唱　うるはしき詩。思黯の贈詩をほめていふ。〔二〕醉伴　酒飲仲間。騰騰は遊惰に耽る貌。〔三〕斷送　その事だけに時を送ること。〔四〕伯道　晉の鄧攸、字は伯道。石勒の兵起りし時家を擧へて走る。其弟早く亡せるを以て特に其姪を全うせんとし、子なき木に繫ぎて去る。死して竟に嗣なし。時人之を哀んで曰く、天道無知、使鄧伯道無兒と。樂天は子なき故自ら

【題義】劉禹錫（字は夢得）と同じく牛僧孺（字は思黯）から贈られた詩に和したもので、僧孺から贈られた詩の中に劉・白・牛三人讌樂を俱にしたことを歡び、鬢髮の漸く衰へ來ることを歎き、子孫の追追老境に入ることを嫌ふ意が述べてあるので、鄙懷を述べて酬いたといふのである。

【詩意】白と劉とは常にあなたの飲仲間となり、朝となく晩となく相俱に歡醉してゐる。夜は燈下に留連して明くれば又飲み、樽前にすわり込んで倒れるまでは止めない。子孫の老境に入ることなどは嫌ふには當らぬ。それよりも年を取つて鬢髮の衰へるまで生きてゐるのを喜ぶべきである。かく申す僕などは子もなく孫もなく白毛頭にさへなつたが、それでも安閑として生きながらへてゐるではないか。

聽歌　歌を聽く

管妙絃清歌入雲。
老人合眼醉醺醺。

【字解】〔一〕醺醺　醉ふ貌。

管妙に絃清くして歌雲に入る、老人眼を合せて醉ひて醺醺たり。

誠知不及當年聽。　猶覺聞時勝不聞。

【題義】歌を聴いて作つた詩である。

【詩意】美妙なる管絃の音が天空にまで響き亙る。老人たる我は醉眼を閉ぢ感に入つて聴き惚れてゐる。若い頃のやうに感興は湧かないが、それでも聞かないよりはましである。

【二】當年　若かつた頃をいふ。

三年冬隨事鋪設小堂寢處稍以穩煖因念衰病偶吟所懷

三年冬事に隨つて小堂に寢處を鋪設す。稍穩煖なるを以て因つて衰病を念ひ、偶〻所懷を吟ず

小宅非全陋。中堂不甚卑。
聊堪會親族。足以貯妻兒。
煖帳迎冬設。溫爐向夜施。
裘新青兎褐。褥軟白猿皮。
似鹿眠深草。如雞宿穩枝。
逐身安枕席。隨事有屏帷。
病致衰殘早。貧營活計遲。
由來蠶老後。方是繭成時。

【字解】【一】屏帳　屏風、とばり。【二】衰殘　衰老といふが如し。

【題義】開成三年の冬、事の序に小堂に寢處を設け、稍穩煖なるを得たので、特に衰病の身を念ひ、所懷を述べたといふのである。

【詩意】吾が小宅の中堂はさほど卑陋と謂ふほどでもなく、親族を會し妻子を容るるに足りる。冬を迎へて煖帳を設け、夜に入れば溫爐を施すことにし、青兎の裘を纏うて白猿の皮を敷いた褥に臥せば、鹿の深い草の上に眠るが如く、雞の穩かな枝に棲むが如くである。因つて倦めば枕席に安んじて休息する。病の爲に早く衰老し、貧乏な爲に生計が不如意であつたが、蠶が老いて始めて繭の出來るやうに、老病に入つて始めて穩煖な寢處が出來た。

初冬卽事呈夢得

初冬卽事、夢得に呈す

青氈帳煖喜微雪。　青氈帳煖かにして微雪を喜ぶ、

〜【字解】【一】青氈帳　青色の毛

紅地爐深宜早寒。　紅地爐深くして早寒に宜し。
走筆小詩能和否。　筆を走らす小詩能く和するや否や、
潑醅新酒試嘗看。　醅を潑する新酒試みに嘗めて看る。
僧來乞食因留宿。　僧來り食を乞へば因つて留宿せしめ、
客到開樽便共歡。　客到れば樽を開きて便ち共に歡す。
臨老交親零落盡。　老に臨みて交親零落し盡く、
希君恕我取人寬。　希はくは君我が人を取ること寬なるを恕せよ。

【題義】初冬の卽事を敍して劉禹錫（字は夢得）に呈した詩である。
【詩意】青氈帳の中は極めて煖かなので、却つて雪の降るのが嬉しく、地爐の火が盛で初冬の寒を凌ぐに宜しい。筆を走らせ小詩を認めて君の和韻を待ち、新に漉した酒を試みに獨りで飲んで看た。托鉢の僧が來れば留宿せしめ、客が來れば俱に飲みなどして日を送つてゐる。身既に老いて友達は殆ど死んだ。されば我が人を擇ばず濫交するのも無理ではあるまい。

自罷河南已換七尹。毎一入府悵然舊遊。因宿內廳偶題西壁。

毎日河南府。依然似到家。
杯嘗七尹酒。
樹看十年花。
且健須歡喜。雖衰莫歎嗟。
迎門無故吏。侍坐有新娃。
煖閣謀宵宴。寒庭放晚衙。
主人留宿定。一任夕陽斜。

兼呈韋尹常侍

河南を罷めてより已に七尹を換ふ。一たび府に入る毎に舊遊に悵然たり。因つて內廳に宿し偶〻西壁に題し、兼ねて韋尹常侍に呈す

毎日河南の府、依然として家に到るに似たり。
杯は七尹の酒を嘗め、
樹は十年の花を看る。
且健にして須らく歡喜すべし、衰へたりと雖も歎嗟する莫れ。
門に迎ふるに故吏無く、坐に侍るに新娃有り。
煖閣に宵宴を謀り、寒庭に晚衙を放つ。
主人留宿すること定まり、一任夕陽の斜なるを。

【字解】〔一〕七尹　般休復・王質・鄭滸・李紳・李珏・樊濤・韋長なり。白香山年譜舊本に見ゆ。〔二〕故吏　もとの吏員。〔三〕新娃　新しい美人。〔四〕晚衙　夕方吏員が長官の前に列して挨拶すること。〔五〕主人　現河南尹韋長なり。
【題義】河南尹（官名）を罷めてから（樂天は太和七年に河南尹を罷めた）六年間に河南尹が七代換つた。其役所に入る毎に舊遊を慨うて悵然たるものがあつた。因つて內廳に宿して西壁に題し、兼ねて現河南尹韋長に呈したといふのである。

〔一〕紅地爐　火の盛な地面を掘つて作つた爐。〔二〕潑醅　酒を漉すこと。〔三〕交親　親友。零落は死亡する。

【詩意】河南尹の役所に來て見れば、毎日住み慣れた吾が家に來たやうな心地がするが、杯は既に七尹の酒を嘗め、樹は十年の花を看たわけで、幾變遷を歴てゐる。併し身の健なるを喜ぶべく、衰老を嘆くべきではない。もとの吏員は居ないが、其代りに新しい美人がゐる。夕方の挨拶も擧つて、煖閣に夜宴を設ける用意をしてゐる。主人が我を留宿せしめることにきまつた以上は、日が暮れようとも問題ではない。

天寒晚起引酌詠懷寄許州王尚書汝州李常侍

天寒くして晚く起き、酌を引き懷を詠じて許州の王尚書・汝州の李常侍に寄す

葉覆氷池雪滿山。　葉は氷池を覆ひ雪は山に滿つ、
日高慵起未開關。　日高く起くるに慵くして未だ關を開かず。
寒來更亦無過醉。　寒來るも更に亦醉に過す無くんば、
老後何由可得閒。　老いて後何に由りてか閒を得可けんや。
四海故交唯許汝。　四海の故交唯許汝、
十年貧健是樊蠻。　十年貧健是れ樊蠻。
相思莫忘櫻桃會。　相思ひて忘るる莫れ櫻桃の會、
一放狂歌一破顏。　一は狂歌を放にし一は破顏す。

【題義】櫻桃花時。數與二君一。歌會甚樂。許汝

【詩意】寒さが嚴しいので晚く起牀し、酒を飲み懷を詠じて許州刺史王尚書と汝州刺史李常侍とに寄せた詩である。

【詩意】枯葉は池の氷を覆ひ雪は山に滿ちて寒氣が嚴しいので、日は高く升つたが起きるのが大儀でまだ門も開かない。寒くなつても酒でも飲んで日を送らなければ、老いても閒を得ることは出來ない。今や廣い天下に舊友と謂つては君等二人しかなく、十年間貧健に伴ふ者は唯樊蠻の二妓のみである。往年櫻桃の花見の會に一人は狂歌し一人は微笑して相樂んだことを、今でも覺えてゐるであらう。

【字解】〔一〕故交　舊友といふが如し。許汝は王尚書と李常侍とを指す。〔二〕樊蠻　樊素・小蠻。妓に樂天の妓の名。〔三〕破顏　笑ふこと。五燈會元に、惟邕禪師者破顏微笑とある。

四年春

柳梢黃嫩草芽新。　柳梢黃嫩にして草芽新なり、
又入開成第四春。　又入る開成第四の春。
近日放慵多不出。　近日慵を放にして多く出でず、
少年嫌老可相親。　少年は老を嫌うて相親む可けんや。

【字解】〔一〕分司　分司東都。吉傳の吉は姓、傳は太子の太傅か少傅かであらう。〔二〕致仕　老いて官を退くこと。

(一)分司吉傅頻過舍。
(二)致仕崔卿擬卜鄰。
時輩推遷年事到。
往還多是白頭人。

分司の吉傅頻に舍を過ぎ、
致仕の崔卿鄰を卜せんと擬す。
時輩推遷して年事到る、
往還多くは是れ白頭の人。

【題義】開成四年春の作。

【詩意】柳の梢には若葉が萌え草の芽が生えて、又開成第四年の春となつた。近頃は大儀なのに任せてあまり外出もせず、若い者は兎角老人を嫌ふので遊相手もない。ただ分司東都の吉傅が度度訪れ、隱居した崔卿が鄰家に卜居しようとしてゐる。同時代の人も皆年を取つてしまつて、相往來する者は多くは白髮の老人である。

白髮

白髮生來三十年。
(一)而今鬚鬢盡皤然。
歌吟終日如狂叟。
衰疾多時似瘦仙。
(二)八戒夜持香火印。
(三)三元朝念藥珠篇。
其餘便被春收拾。
不作閒遊卽醉眠。

白髮生じ來る三十年、
而今鬚鬢盡く皤然。
歌吟終日狂叟の如く、
衰疾多時瘦仙に似たり。
八戒夜持す香火の印、
三元朝に念ず藥珠の篇。
其餘は便ち春に收拾せられ、
閒遊を作さずんば卽ち醉眠す。

【題義】老來爲す所を敍した詩である。

【詩意】白髮になり始めてから既に三十年になるが、今では鬚も鬢も眞白になつてしまつた。終日吟詠すること狂人の如く、瘦せ衰へて仙人のやうである。夜は香を焚いて八戒を持し、三元の日には藥珠經を誦して道を修めてゐる。その外は春に誘惑せられて、閒遊するか然らずば醉眠して日を送つてゐる。

【字解】(一)而今　只今。皤然　は白き皃。(二)八戒　不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飲酒・不坐高廣大牀・不著華鬘瓔珞・不習歌舞妓樂。(三)三元　唐人正月七月十月の十五日を三元日となす。一に、三光に作る。藥珠篇は道家の書。

追歡偶作

追歡逐樂少閒時。
(一)補貼平生得事遲。

追歡偶作

歡を追ひ樂を逐ひて閒時少なり、
補貼す平生事を得ること遲きを。

【字解】(一)補貼　補充する。(二)蔗笮　胡人の樂器。(三)金谷　洛陽の西に在り。晉の石崇の金

何處花開曾後看。　何の處か花開きて曾て後に看し、
誰家酒熟不先知。　誰が家か酒熟して先づ知らざらん。
石樓月下吹蘆管。　石樓の月下蘆管を吹き、
金谷風前舞柳枝。　金谷の風前柳枝を舞ふ。
十聽春啼變鶯舌。　十たび春啼の鶯舌を變ずるを聽き、
三嫌老醜換蛾眉。　三たび老醜の蛾眉に換はるを嫌ふ。
樂天一過難知分。　樂天一たび過ぎて分を知り難く、
猶自咨嗟兩鬢絲。　猶ほ自ら咨嗟す兩鬢の絲。

【題義】歡樂を追求する意を述べた詩である。

【詩意】歡樂を追ひ求めて暫くも息まず、それに由つて平生の失敗を補充しようと思つてゐる。されば花が開けば人より先に往つて觀、誰の家で酒が出來たかもチャンと知つてゐる。石樓の月下で蘆管を吹き、金谷の風前で柳枝を舞うたこともあつたが、既に十年の春を過ぎ、美妓も老醜と化してしまつた。樂天も一時は得意の春を送つたのであるから、もうよき程を知つて諦めたらよささうなものだが、なかなか諦めがつかないで、猶ほ兩鬢の白毛になつたことを嗟いてゐる。

盧管柳枝已下。皆十年來洛中之事。

谷間の在りし處。柳枝は樂曲の名。張祜の詩に莫折宮中楊柳枝、當時曾向笛中吹とある。【四】蛾眉。美人の眉。

公垂尚書以白馬見寄。光潔穩善。以詩謝之

公垂尚書白馬を以て寄せらる。光潔穩善なり。詩を以て之を謝す

翩翩白馬稱金羈。　翩翩たる白馬金羈に稱ふ、
領綴銀花尾曳絲。　領は銀花を綴り尾は絲を曳く。
毛色鮮明人盡愛。　毛色鮮明人盡く愛し、
性靈馴善主偏知。　性靈馴善主偏に知る。
免將妾換慙來處。　妾を將て換ふるを免れ來るを慙づる處、
試使奴牽欲上時。　試みに奴をして牽かしめ上らんと欲する時。
不蹶不驚行步穩。　蹶かず驚かず行步穩かなり、
最宜山簡醉中騎。　最も山簡の醉中に騎るに宜し。

【題義】尚書右僕射（官名）李紳（字は公垂）が白馬をくれた。その馬が光潔穩善である。因つて詩

【字解】【一】翩翩　輕疾の貌。金羈は黃金の馬絡頭。【二】將妾換　李白の襄陽歌に千金駿馬換小妾とあり。樂府解題に愛妾換馬は舊說に淮南王の作る所の古辭、今傳はらずとある。【三】山簡　晉の人、征南將軍となり襄陽を鎮ぜし時、田遊して高陽池に至る毎に、大醉して歸る。歌に曰く、山公時一醉、遊至高陽池、日暮倒載歸、酩酊無所知、時時騎白馬、倒著白接䍦、舉鞭問葛彊、何如比并州兒。樂天自ら比す。

を以て謝意を表したといふのである。

【詩意】 翩翩たる白馬は能く金羈に稱ひ、頸は銀花を綴つたやうで尾は白絲を垂れたやうである。毛色が純白で誰が見ても美しく、性質の人に馴れてゐることは、騎手の皆知る所である。小妾に換へられることを免れて僕の處へ來た時に、試みに奴をして牽かしめて乘つて見ると、蹶かず驚かず歩みが穩かで、醉つた時に騎るのに宜しい。

西樓獨立

身著白衣頭似雪。　　西樓獨立
時時醉立小樓中。　　身には白衣を著て頭は雪に似たり、
路人廻顧應相怪。　　時時醉ひて立つ小樓の中。
十一年來見此翁。　　路人廻顧して應に相怪むべし、
　　十一年來此翁を見るを。

【題義】 西樓に獨り立つて作つた詩である。

【詩意】 身には白衣を著て頭は雪のやうに白く、時時醉うて西樓の上に立つてゐる。路行く人は十一年來此老人を見來つたことを怪むであらう。

【字解】 【一】 此翁　樂天自ら謂ふ。

書事詠懷

官俸將生計。雖貧豈敢嫌。　　事を書し懷を詠ず
金多輸陸賈。酒足勝陶潛。陶潛詩云。常苦酒不足。　　官俸と生計と、貧しと雖も豈敢て嫌はんや。
牀煖僧敷坐。樓晴妓卷簾。　　金の多きは陸賈に輸り、酒の足るは陶潛に勝れり。
日遭齋破用。毎月常持十齋。　　牀煖かにして僧坐を敷き、樓晴れて妓簾を卷く。
春賴閏加添。是年閏正月也。　　日は齋に遭ひて破用し、
老向歡彌切。狂於飲不廉。　　春は閏に賴りて加添す。
十年閒未足。亦恐涉無厭。　　老は歡に向ひて彌切なり、狂は飲に於て廉ならず。
　　十年閒未だ足らず、亦恐らくは厭く無きに涉らんことを。

【題義】 事を書し懷を詠じた詩である。

【詩意】 官俸と生計との貧しいことは敢て厭はず、金のあることは漢の陸賈より劣つてゐるが、酒のあることは晉の陶淵明より勝つてゐる。煖かな牀に坐して僧と坐禪し、晴れた時に妓を伴つて樓に登り、月月持齋の爲に日を費すが、今年は閏に賴つて春を一個月贏けた。老いては歡を求むるに熱心で、酒に對して意地穢くなつた。十年の閒閑職にゐたのであるが、それでも滿足が出來ず、尙ほも閒暇を求めて厭く所を知らない。

酬夢得比萱草見贈　來篇云。唯君比萱草。相見可忘憂。

夢得が萱草に比して贈られしに酬ゆ　來篇に云く、唯君萱草に比す、相見れば憂ひを忘る可しと。

杜康能散悶。萱草解忘憂。
借問萱逢杜。何如白見劉。
老衰勝少夭。閑樂笑忙愁。
試問同年内。何人得白頭。

【字解】〔一〕萱草　わすれ草。詩傳に萱草令人忘憂とある。〔二〕杜康　酒をいふ。〔三〕同年　同年に進士の試驗に及第した仲間をいふ。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が樂天を萱草に比して「君に遇へば憂を忘れることが出來る」といふ詩を贈つたのに酬いたのである。

【詩意】酒は能く悶を解き、萱草は憂を忘れしめる。併し萱草の酒に逢ふは白樂天の劉夢得に遇ふには及ぶまい。老いて衰へるのは少くて死ぬよりもましである。閑職にゐて樂む者は劇職に在りて愁ふる者を冷笑してゐる。試みに問はん吾が同年の及第者の内に、白頭まで生きた者が幾人あるか。

問皇甫十

苦樂心由我。窮通命任他。
坐傾張翰酒。行唱接輿歌。
榮盛傍看好。優閑自適多。
知君能斷事。勝負兩如何。

【字解】〔一〕張翰　晉の吳の人。秋風の起るに因つて吳中の菰菜蓴羹鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。〔二〕接輿　楚の人。論語に、楚狂接輿歌而過孔子之門曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、孔子下欲與之言、趨而辟之、不得與之言とある。

【題義】皇甫十に問へる詩。

【詩意】苦樂は我が心に由り、窮通は運命の然らしむる所である。されば坐しては張翰の酒を傾け、行きては接輿の歌を歌ひ、苦樂窮通を度外に置いて深く心に留めない。榮華は傍から看れば景氣がよいが、優閑は心に適ふ所が多い。君は判斷が上手だから尋ねるが、榮盛と優閑とはどちらが勝つてゐるであらうか。

早春獨登天宮閣

天宮日煖閣門開。　天宮日煖かにして閣門開く、
獨上迎春飲一杯。　獨り上り春を迎へて一杯を飲む。
無限遊人遙怪我。　限り無き遊人遙に我を怪む、
緣何最老最先來。　何に緣りてか最も老いて最も先に來れると。

【題義】春の初に天宮閣に登つて作つた詩である。

【詩意】春の暖かな日に天宮閣の門が開いてゐるので、獨り登り春を迎へて一杯の酒を飲んだ。數多の春色を遊賞する人だちが「何故に最も老いてゐるにも拘らず、最も先に春を賞しに來たのであらう」と、我が此閣に上つたことを怪んでゐる。

送蘇州李使君赴郡二絶句

憶拋印綬辭吳郡。　印綬を拋ちて吳郡を辭するを憶ふに、
衰病當時已有餘。　衰病當時已に餘り有り。

【字解】〔一〕使君　刺史の稱。郡とは蘇州を指して言ふ。〔二〕吳郡　蘇州なり。〔三〕銅魚　唐書百官志に、凡有召者、降銅魚木契、然後入とある。刺史の佩ぶる所のしるし。

今日賀君兼自喜。　今日君を賀して兼ねて自ら喜ぶ、
八廻看換舊銅魚。　八廻舊銅魚を換ふるを看るを。

予自離蘇州及茲換八刺史矣。

【題義】蘇州刺史李氏（後集卷一及び卷九に見える李諒かとも思はれるが、時代が合はないから別人であらう）の赴任するのを送る詩である。

【詩意】僕が蘇州刺史を辭した時のことを憶ふに、その當時已に衰病がかなりひどかつた。されば今日君の赴任を賀すると共に、八回刺史の換るまで無事に生存してゐることを、自ら喜ぶ次第である。

〔一〕

館娃宮深春日長。　館娃宮深くして春日長し、
館娃宮。今靈巖寺也。
烏鵲橋高秋夜涼。　烏鵲橋高くして秋夜涼し。
烏鵲橋。在蘇州南門。
風月不知人世變。　風月は知らず人世の變ずるを、
奉君直似奉吳王。　君に奉するは直に吳王に奉するに似たり。

〔二〕

【字解】〔一〕館娃宮　蘇州に在り。昔吳王夫差の西施を館ぜし處。

【詩意】館娃宮は奥深い處に在つて、長閑な春を賞するに宜しく、烏鵲橋は高く架つてゐて秋の夜の

納涼に宜しい。風や月は人世の變遷を知らないから、君に奉仕することは昔の吳王に奉仕すると同じである。

長洲曲新詞

茂苑綺羅佳麗地。
女湖桃李艶陽時。
心奴已死胡容老。
後輩風流是阿誰。

【字解】【一】茂苑　即ち長洲苑。綺羅は美人に喩ふ。【二】女湖　女墳湖なり。吳地記に、女墳湖在吳縣西北六里」とある。艶陽は陽春の時をいふ。杜甫の詩に艶於明媚色、像似艶陽天とある。【三】心奴・胡容　妓の名であらう。

【題義】長洲は苑の名。江蘇省吳縣の西南に在り。吳郡志に「姑蘇の南、太湖の北に在り。閶闔の遊獵せし處なり」とある。この詩は長洲苑を憶うて作つたものである。

【詩意】長洲苑や女墳湖の邊に桃や李の咲き誇つた陽春の時節には、美妓を攜へて遊賞したものであつたが、今や心奴は已に死し胡容は老いた。その後輩として誰が風流の中心人物となつてゐるであらう。

白樂天詩後集　卷十六

律詩　凡一百首

病中詩　并序　病中の詩并に序

開成己未歲。余蒲柳之年六十有八。冬十月甲寅旦。始得風痺之疾。體瘠目眩。左足不支。蓋老病相乘時而至耳。余早棲心釋梵。浪跡老莊。因疾觀身。果有所得。何則外形骸而內忘憂悲。先禪觀而後順醫治。旬月以還。厥疾少閒。杜門高枕。澹然安閒。吟諷興來。亦不能遏。因成十五首。題爲病中詩。且貽所知。兼用自廣。昔劉公幹病漳浦。謝康樂臥臨川。咸有篇章。抒詠其志。今引而序之者。慮不知我者或加誚焉。

【訓讀】開成己未の歲、余蒲柳の年六十有八、冬十月甲寅の旦、始めて風痺の疾を得、體瘠み目眩し、左足支へず。蓋し老病時に相乘じて至るのみ。余早く心を釋梵に棲ましめ、跡を老莊に浪にす。疾に因りて身を觀るに、果して得る所有り。何となれば則ち形骸を外にして內憂悲を忘れ、禪觀を先にし

て後に醫治に順へばなり。旬月以還、厥疾少しく閒ゆ。門を杜ぢ枕を高くし、澹然として安閒なり。吟諷興來りて亦遏むこと能はず。因つて十五首を成す。題して病中の詩と爲す。且知る所に貽り、兼ねて用て自ら廣めんとす。昔劉公幹漳浦に病み、謝康樂臨川に臥す。咸篇章有りて其志を抒詠す。今引きて之を序する者は、我を知らざる者の或は誚を加へんことを虛りてなり。

【字解】〔一〕己未　開成四年。〔二〕浦柳　體質の虛弱なるに喩ふ。〔三〕風痺　中風なり。唐書に因二風痺一體不仁とある。〔四〕靜覺　佛教。〔五〕所レ知　知友。〔六〕劉公幹　劉楨、字は公幹。三國魏の人。〔七〕謝康樂　謝靈運。南北朝の宋の人。康樂公に封ぜらる。

初病レ風

六十八衰翁乘レ衰百疾攻。
朽株難レ免レ蠹。空穴易レ來レ風。
肘痺宜レ生レ柳。頭旋劇轉蓬。
恬然不動處。虛白在二胸中一。

初めて風を病む

六十八の衰翁、衰に乘じて百疾攻む。
朽株は蠹を免れ難く、空穴は風を來し易し。
肘痺れて柳を生ずるに宜し、頭旋りて轉蓬より劇し。
恬然たる不動の處、虛白胸中に在り。

【字解】〔一〕蠹　木を蝕する蟲。〔二〕生レ柳　莊子至樂篇に、支離叔與二滑介叔一觀二於冥伯之丘一、見二髑髏之處一、實帝之所レ休、飢而生二其左肘一とある。〔三〕轉蓬　風に飄る蓬。〔四〕恬然　やすんずる貌。〔五〕虛白　莊子人間世篇に虛室生レ白、吉祥止レ止、鬼神將二來舍一、而況人乎とある。

【題義】初めて中風に罹つた時の作である。

【詩意】自分も六十八歳の老翁となつたので、老衰に乘じて樣樣の疾が襲つて來る。朽木は蟲ばむことを免れず、空穴は風を招く道理で、今更如何ともすることは出來ない。肘は痺れて柳を生ずるに宜しく、頭はふるへて風に飄へる蓬のやうだ。ただ恬然として動かない處が一つある。それは胸中の精神である。

枕上作

風疾侵凌臨老頭。
血凝筋滯不調柔。
甘從レ此後支離臥。
賴是從レ前爛熳遊。
廻思往事紛如レ夢。
轉覺餘生杳若レ浮。
浩氣自能充二靜室一。

枕上の作

風疾侵凌す老に臨む頭、
血凝り筋滯りて調柔ならず。
甘んじて此より後支離して臥し、
賴に是れ前に從つて爛熳として遊ぶ。
廻思すれば往事紛として夢の如く、
轉た覺ゆ餘生杳として浮べるが若きを。
浩氣は自ら能く靜室に充つ、

【字解】〔一〕風疾　中風。〔二〕支離　殘缺なり。莊子に支二離其形一者、猶足二以全一其天年一、況支二離其德一者乎とある。〔三〕爛熳　淋漓酣足の狀。〔四〕浩氣　浩然の氣。靜室は心の虛靜なるに喩ふ。

驚飈何必蕩虚舟。　驚飈何ぞ必ずしも虚舟を蕩せん。
腹空先進松花酒。　腹空しくして先づ進む松花の酒、
膝冷重裝桂布裘。　膝冷えて重ねて裝ふ桂布の裘。
若問樂天憂病否。　若し樂天に病を憂ふるや否やと問はば、
樂天知命了無憂。　天を樂み命を知りて了に憂ふる無し。

【題義】臥牀中作つた詩である。

【詩意】老境に入つて中風に罹り、血が凝り筋が滯つてしなやかに行かない。今後は片輪者となつて安心して臥すことが出來、從來の通り思ふ存分に遊ばれる。往事を回想すれば夢の如く、餘生を思へば浮ぶが如くであるが、浩然の氣は吾が心中に充ちてゐるから、如何なる驚風と雖も搖蕩することは出來まい。腹の空いた時には松花の酒を飲み、膝が冷える時は桂布を纏つて溫める。樂天に病を憂ふるや否やと問ふ者あらば、天を樂み運命に任せてゐるから、憂ふることはないと答へよう。

答閒上人來問因何風疾

閒上人來り何に因つてか風疾すると問へるに答ふ

一牀方丈向陽開。　一牀の方丈陽に向つて開く、
文殊勞動問疾來。　文殊を勞動して疾を問ひ來らしむ。
欲界凡夫何足道。　欲界の凡夫は何ぞ道ふに足らん、
四禪天始免風災。　四禪天は始めて風災を免る。
色界四天。初禪具三災。二禪無火災。三禪無水災。四禪無風災也。

【題義】閒上人（佛僧の名）が病氣見舞に來て、何故に中風などに罹つたかと問へるに答へた詩である。

【詩意】日當りのよい方丈の室に牀を設けて寢てゐる所へ、上人が病氣見舞に來てくれた。何故に中風になつたかとのお尋ねであるが、欲界の凡夫だからこそ、こんな病氣に罹つたので、四禪天であつて、始めて風災を免れるのである。

病中五絶句

世間生老病相隨。　世間には生老病相隨ふ、
此事心中久自知。　此事心中久しく自ら知る。
今日行年將七十。　今日行年將に七十ならんとす、
猶須慙愧病來遲。　猶ほ須らく慙愧すべし病來るの遲きを。

【字解】〔一〕驚飈　驚風。〔二〕蕩虚舟　蕩は搖蕩すること。虚舟は心の虚なるに喩ふ。〔三〕松花酒　酒の名であらう。酒史に、蘇軾守定州時、於曲陽得松脂釀酒、作松醪賦とある類なり。

【字解】〔一〕風疾　中風。〔二〕方丈　一丈四方の庵室。〔三〕文殊　菩薩の名。閒上人に喩ふ。維摩詰疾める時文殊來り疾を問ふこと維摩經に見ゆ。〔四〕慙愧　感謝といふが如し。

【題義】病中に作つた五首の絶句。

【詩意】人生には生老病の三者が常に相隨つてゐるものだといふ事は遠の昔から知つてゐる。今日は既に七十に垂んとしてゐるのだから、實は病の來るのの遲いのを感謝してよいのだ。

〔一〕

方寸成灰鬢作絲。
假如强健亦何爲。
家無憂累身無事。
正是安閒好病時。

【詩意】心は死灰の如く冷かになり鬢は絲のやうに白くなつた。たとひ達者であつた所が今更どうしやうもない。家には何の煩累もなく身は無事であるから、病氣になるには誠に好機會である。

【字解】〔一〕方寸　心をいふ。

〔二〕

李君墓上松應拱。
元相池頭竹盡枯。
多幸樂天今始病。

【詩意】吾が友李建は死して既に久しく、墓に植ゑた松は兩手で圍むほどになつた。元相も死して八年になるので、其邸内の池の頭の竹は盡く枯れ果てた。それに比すれば幸にも樂天は今始めて病に罹つたのだから、寧ろ念を入れて療治などはしない方が穩當であるかも知れない。

【字解】〔一〕李君　李建、字は約直。拱は兩手で圍むほどの太さになること。死して久しきをいふ。〔二〕元相　元稹、字は微之。宰相に

不知合要苦治無。

李元皆予執友也。約直少予八歲。即世已九年。微之少予七年。棄已八年矣。今予始病。得非幸乎。

知らず合に苦に治するを要すべきや無や。なつたから元相といふ。

【詩意】吾が友李建は死して既に久しく、墓に植ゑた松は兩手で圍むほどになつた。元相も死して八年になるので、其邸内の池の頭の竹は盡く枯れ果てた。それに比すれば幸にも樂天は今始めて病に罹つたのだから、寧ろ念を入れて療治などはしない方が穩當であるかも知れない。

〔四〕

目昏思寢卽安眠。
足軟妨行便坐禪。
身作醫王心是藥。
不勞和扁到門前。

【詩意】目が昏く寢たくなつて寢るから忽ち安眠が出來、足がだるくて歩くのが不自由だから坐禪をする。卽ち身の動作が醫者の働をなし、心は藥の働をなし、醫者の來診を乞ふ必要などは少しもない。

【字解】〔一〕身作醫王　身の動作は醫治の效能あるをいふ。心是藥　心は藥の效あるをいふ。〔二〕和扁　醫和と扁鵲。古の名醫。

〔五〕

交親不レ要苦相憂。　交親要せず苦だ相憂ふるを、
亦擬時時強出遊。　亦擬す時時強ひて出遊せんと。
但有心情何用脚。　但心情有らば何ぞ脚を用ひん、
陸乘肩輿水乘舟。　陸には肩輿に乘り水には舟に乘る。

【字解】〔一〕交親　友人。

【詩意】友人諸君よ僕の病氣を心配してくれるな。病氣とはいへ時時出遊しようと思ふくらゐの元氣はある。ただ心さへあれば脚などはいらない。陸には駕籠に乘り水には舟に乘つて往けるから。

送嵩客

登レ山臨レ水分無レ期。　山に登り水に臨みしも分れて期無し、
泉石煙霞今屬レ誰。　泉石煙霞今誰にか屬する。
君到嵩陽吟此句。　君嵩陽に到らば此句を吟じ、
與教三十六峰知。　與に三十六峰をして知らしめよ。

【題義】嵩山に行く客を送る詩である。

【詩意】自分も嘗て嵩山に遊び山に登り水に臨んだものであつたが、一たび分れては再遊の期がない。

【字解】〔一〕嵩陽　嵩山の南。〔二〕三十六峰　嵩山に三十六峰あり。

今は誰が嵩山の泉石煙霞を賞してゐるであらう。君は嵩山に往つたならば此詩を吟じて、我が爲に三十六峰に知らせてくれよ。

罷灸

病身佛說將何喻。　病身佛說將何にか喩ふる、
變滅須臾豈不聞。　變滅須臾豈聞かざらんや。
莫遣淨名知我笑。　淨名をして我を知りて笑はしむる莫けん、
休將火艾灸浮雲。　火艾を將て浮雲に灸するを休む。

維摩經云。是身如浮雲。須臾變滅也。

【題義】灸を燒くことを罷めた詩である。

【詩意】佛說では病身を何に喩へてゐるかといふに、浮雲の如く須臾の中に變滅するものだと謂つてゐる。されば維摩詰に笑はれまいと思つて、艾を以て浮雲の如き身に灸を燒くことを罷めた。

賣駱馬

五年花下醉騎行。　五年花下醉ひて騎り行く、

【字解】〔一〕駱馬　白馬にして

臨賣廻頭嘶一聲。　賣るに臨み頭を廻らして嘶くこと一聲。
項籍顧雖猶解歎。　項籍雖を顧みて猶ほ解く歎ず、
樂天別駱豈無情。　樂天駱に別れて豈情無からんや。

【題義】白馬を賣拂つた詩である。

【詩意】此馬は五年間花見の時に醉つて乘りまはした馬である。賣拂ふ時に別れが悲しいと見えて頭を回らして一聲嘶いた。項羽のやうな勇將でも雖を顧みて歎息したのだから、この樂天が惜別の情に堪へないのは當然である。

黑鬃なるもの。詩經に我馬維駒とある。〔二〕項籍　楚の項羽。雖は項羽の馬の名。

別柳枝

兩枝楊柳小樓中。　柳枝に別る
嬝娜多年伴醉翁。　兩枝の楊柳小樓の中、
明日放歸歸去後。　嬝娜として多年醉翁に伴ふ。
世間應不要春風。　明日放ち歸す歸り去りて後、
世間應に春風を要せざるべし。

【題義】後の對酒有懷寄李十九郎中一と題する詩に、去歲樓中別柳枝とあり、その自注に樂天也とある。されば樂天の妾樊素・小蠻の二妓を號して柳枝といふのである。この詩は二妓を放ち遣る時の作である。

【詩意】この楊柳にも比すべきたをやかな二妓は、永い年月の間この醉翁の相手になつて暮して來た。明日は暇を遣るが、歸り去つて世間に出ても、春風（あだし男に喩ふ）などを求めぬがよいぞよ。

【字解】〔一〕兩枝楊柳　樊素・小蠻の二妓に喩ふ。〔二〕嬝娜　たをやかな貌。醉翁は樂天自ら謂ふ。

就暖偶酌。戲諸詩酒舊侶

暖に就いて偶酌し、諸の詩酒の舊侶に戲る

低屏軟褥臥藤牀。　低屏軟褥藤牀に臥す、
舁向前軒就日陽。　舁きて前軒に向ひて日陽に就く。
一足任他爲外物。　一足任他外物と爲る、
三杯自要沃中腸。　三杯自ら要す中腸に沃ぐを。
頭風若見詩應愈。　頭風若し詩の應に愈すべきを見ば、
齒折仍誇笑不妨。　齒折れて仍ほ誇らん笑ふに妨げざるを。
細酌徐吟猶得在。　細く酌み徐に吟じて猶ほ在るを得たり、
舊遊未必便相忘。　舊遊未だ必ずしも便ち相忘れず。

【題義】日當りのよい暖かな處に出て酒を飲み、詩酒の舊友に戲れた詩である。

【字解】〔一〕低屏　低い屏風。藤牀は藤蔓で編んだ寢臺。〔二〕前軒　のきさき。日陽は日なた。〔三〕一足云云　時に樂天は中風に罹り、一足痺れて自分の足のやうに思はれず、因つて外物となるといふ。〔四〕頭風　頭痛。

【詩意】低い屏風を繞らし軟かい褥を敷いて藤牀に臥し、軒先の日當りのよい處にかつぎ出させた。片足は痺れて自分の物のやうな氣がしないが、足などはどうでもよい。まア立て續けに三杯も飲んで腹の蟲をなだめよう。若し詩で頭痛がなほるものならば、齒が折れたのも笑ふ妨げにはならないから、寧ろ誇るに足ると謂つてよい。ちびりちびり飲んで徐に吟じ、まだ息の根が絶えないでゐるから、詩酒の樂を俱にした舊友のことも決して忘れはしない。

歲暮呈思黯相公皇甫朗之及夢得尚書

歲暮、思黯相公・皇甫朗之及び夢得尚書に呈す

歲暮皤然一老夫。　歲は暮る皤然たる一老夫、
十分流輩九分無。　十分の流輩九分は無し。
莫嫌身病人扶侍。　嫌ふ莫れ身病みて人の扶侍するを、
猶勝無身可遣扶。　猶ほ身の扶けしむ可き無きに勝れり。

【題義】歲の終に牛僧孺（字は思黯、嘗て宰相となりし故相公といふ）皇甫朗之及び劉禹錫（字は夢得、禮部尚書たり）に呈した詩である。

【詩意】今年も愈〻終に近づき、自分も白髮の老人になり、舊友も十人の中の九人までは死んでしまつた。身は病んで人に扶けられてゐるが、敢てそれを嫌ふべきではない。死して扶けてもらふ身のないよりはましだから。

【字解】〔一〕皤然　白髮の貌。
〔二〕流輩　友達。

自解

房傳往世爲禪客。　房は傳ふ往世禪客たり、
世傳房太尉前生爲禪僧。與王維師德友善。暮年其爲人。故今生有王維之遺風也。
王道前生應畫師。　王は道ふ前生應に畫師なるべしと。
王右丞詩云。宿世是詞客。前生應是畫師。
我亦定中觀宿命。　我も亦定中に宿命を觀る、
多生債負是歌詩。　多生債負す是れ歌詩。
不然何故狂吟詠。　然らずんば何の故にか狂して吟詠せん、
病後多於未病時。　病みて後は未だ病まざる時よりも多し。
已上病中十五首。

【題義】己の詩を好む理由を解釋した詩である。

【詩意】房太尉の前生は禪僧だと謂はれ、王維の前生は畫家だと謂はれてゐる。吾も禪定の中に己の

【字解】〔一〕定中　禪定の中。
〔二〕多生　幾度も生れかはること。債負は負債といふが如し。

宿命を悟つたが、幾度生れかはつても詩といふ借財を持つてゐるらしい。若しさうでなければ、なぜかくは狂吟するのであらう。しかも病後は病前よりも甚だしい。

歳暮病懐贈夢得

時與夢得同患足疾

十年四海故交親。　十年四海の故交親、
零落唯殘兩病身。　零落して唯殘る兩病身。
共遣數奇從是命。　共に數奇にして是命に從はしめ、
同教歩蹇有何因。　同じく歩蹇せしむる何の因か有る。
眼隨老減嫌長夜。　眼は老に隨ひて減じて長夜を嫌ひ、
體待陽舒望早春。　體は陽を待ちて舒びて早春を望む。
新樂堂前舊池上。　新樂堂前舊池の上、
相過亦不要他人。　相過ぎるも亦他人を要せず。

【題義】 歳の暮に病中の懐を賦して劉禹錫（字は夢得）に贈つた詩である。

【詩意】 近頃十年ばかりの間に舊友は殆ど死んでしまつて、殘存してゐるのは君と僕とだけだ。共に運がわるくて今日のやうな境遇になり、何の因縁か足まで不自由になつた。視力は老いに隨つて衰へて夜の長きを厭ひ、體は暖かになるとのびのびするので春の來るのを待つてゐる。新樂堂の前、舊池の上に相會して樂むにも、君より外に待つ人はない。

【字解】 【一】故交親　舊友。　【二】零落　死亡する。　兩病身　自と劉と。　【三】數奇　不運なり。　【四】歩蹇　歩行になやむ。

雪後過集賢裴令公舊宅有感

雪後に集賢の裴令公が舊宅に過ぎりて感あり

梁王捐館後。枚叟過門時。　梁王館を捐てて後、枚叟門を過ぐる時。
有淚人還泣。無情雪不知。　淚有りて人還た泣き、情無くして雪知らず。
臺亭留盡在。賓客散何之。　臺亭留まりて盡く在り、賓客散じて何にか之く。
唯有蕭條鴈。時來下故池。　唯蕭條たる鴈のみ有り、時に來りて故池に下る。

【題義】 雪の降つた後で集賢里の裴度の舊宅に過ぎり感する所ありて此詩を作つたのである。

【詩意】 生前色色恩惠に預つた余は、裴令公の薨去の後、其門前を通つた。雪は何も知らずに降つてゐるが、人は涙なきを得ない。亭臺はもとの儘に殘つてゐるが、賓客は皆分散して一人もゐない。た

【字解】 【一】集賢　洛陽の里の名。裴令公は中書令裴度。後集卷三に裴侍中晉公以ニ集賢林亭即事詩二十六韻一見ル贈云云と題する詩あり。【二】梁王　漢の梁の孝王。當時の文士の保護者であつた。ここでは裴令公に譬ふ。捐ル館　死亡すること。【三】枚叟　梁王の庇護を受けた漢の詩人枚乘。樂天自ら比す　【四】蕭條　淋しき貌。

だ鴈が淋しく古池に下りて來るのみだ。」

酬夢得貧居詠懷見贈　夢得が貧居に懷を詠じて贈られしに酬ゆ

歲陰生計兩蹉跎。
相顧悠悠醉且歌。
厨冷難留烏止屋。
門閒可與雀張羅。
病添莊舄吟聲苦。
貧欠韓康藥債多。
日望揮金賀新命。
俸錢依舊又如何。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が貧居して懷を詠じた詩を樂天に贈つたので、樂天がそれに酬いたのである。

【字解】〔一〕歲陰　庾信の歲晚の詩に、年華改二歲陰一、遊客喜二登臨一とある。蹉跎は躓く鵶。〔二〕悠悠　憂ふる鵶。〔三〕莊舄　人名。史記陳軫傳に、越人莊舄仕レ楚而病、王曰舄故越人也、亦思レ越否、中謝對曰、凡人之思レ故、在二其病一也、彼思レ越則越聲、不レ思レ越則楚聲、使二人往聽一、猶尚越聲也とある。〔四〕韓康　後漢の人。藥を長安の市に賣ること三十餘年。藥債は藥價の滯納。〔五〕揮金　金を惜しげもなくふりまくこと。新命は新しい任命。

【詩意】歲晩の生計は君も僕も不景氣で、相顧みて醉歌するのみである。家が貧しいから烏さへ屋根にとまらず、門前はひつそりして訪ふ人もなく、雀ばかりおりて、羅でも張らねばならないほどである。病氣に罹つて莊舄のやうに吟聲が苦しく、貧の爲に韓康から藥價の借が多く出來た。毎日君の新任の命を受けたことを賀し、酒代でも投げ出してくれることを望んでゐるが、俸錢は以前に比して少しは增したか。

酬夢得見喜疾癒　夢得の疾の癒えしを喜ばるるに酬ゆ

暖臥摩綿褥。晨傾藥酒螺。
昏昏布裘底。病醉睡相和。
末疾徒云爾。
餘年有幾何。
須知差與否。相去校無多。

【字解】〔一〕螺　貝で作つた杯。〔二〕昏昏　睡る鵶。〔三〕末疾　手足の疾。樂天は時に中風に罹り、足が不自由であつた。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の樂天の疾の癒えたことを喜ぶ詩に酬いたのである。

【詩意】 綿を打つて柔かにした褥の上に臥し、藥と酒とをちやんぽんに飲み、布裘を纏うて、病と醉と相和して昏睡してゐる。高が手足の疾だとは云ふものの、吾が餘命は最早幾何もないのだから、此疾がなほつてもなほらなくても、大變な相違はない。

夜聞箏中彈瀟湘送神曲感舊

夜箏中瀟湘送神曲を彈ずるを聞き舊を感ず

縹緲巫山女。歸來七八年。
縹緲たる巫山の女、歸來七八年。

殷勤湘水曲。留在十三絃。
殷勤なり湘水の曲、留めて十三絃に在り。

苦調吟還出。深情咽不傳。
苦調吟じて還た出すも、深情咽んで傳はらず。

萬重雲水思。今夜月明前。
萬重雲水の思ひ、今夜月明の前。

【字解】 〔一〕 縹緲　遠く微に見ゆる貌。一に縹眇に作る。木華の賦に、蓬仙縹眇とある。巫山女は巫山の神女。宋玉の高唐賦に、昔者先王嘗遊高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰、妾巫山之女也、爲高唐之客、聞君遊高唐、願薦枕席、王因幸之云云とある。ここでは箏を彈ずる女に比するなり。〔二〕 歸來　歸り去つて以來。〔三〕 殷勤　ねんごろなる貌。〔四〕 十三絃　箏ないふ。

【題義】 夜箏で瀟湘送神曲（樂曲の名）を彈ずるを聞き、舊を感じて作つた詩。

【詩意】 巫山の神女が縹緲として歸り去つてから既に七八年になる。（前後の詩から判斷するに、樂天が蘇州にゐた時に妓を放遣したことをいふが如し）今や瀟湘の間に神女を送る曲が、殷勤に箏中に於て彈ぜられるのを聞く。いかに苦調を吟出するも到底深情を傳へることは出來ず、月下に雲水萬重の思を抱くのみである。

感蘇州舊舫

蘇州の舊舫を感ず

畫梁朽折紅窗破。
畫梁朽折して紅窗破る、

獨立池邊盡日看。
獨り池邊に立ちて盡日看る。

守得蘇州船舫爛。
蘇州船舫の爛するを守り得て、

此身爭合不衰殘。
此身爭でか合に衰殘せざるべき。

【題義】 蘇州から洛陽に持つて還つた船の朽廢したのを見て感慨を述べた詩である。

【詩意】 蘇州から持つて來た船を見ると、梁も朽ち窓も破れてしまつた。自分は獨り感慨深く終日之を看てゐた。こんなに腐朽するまで此舟を持ち續けて來たのだから、俺の老衰するのも尤である。

【字解】 〔一〕 畫梁　舟の美しく彩色したうつばり。〔二〕 盡日　終日。〔三〕 爛　腐朽すること。〔四〕 衰殘　衰廢なり。

感舊石上字

舊石上の字を感ず

閒撥船行尋舊池。
閒に船を撥して行き舊池を尋ぬ、

幽情往事復誰知。
幽情往事復た誰か知らん。

【字解】 〔一〕 撥船　船をこぐ。

太湖石上鐫三字。　太湖石上に三字を鐫る、
十五年前陳結之。　十五年前の陳結之。

【題義】樂天が蘇州から洛陽に還る時に太湖石（前に見ゆ）を持つて來た。この詩は其石の上の題字を見て舊を感じて作つたのである。容齋五筆に「初め樂天の感二石上舊字一詩を讀みしに陳結之あり。竟に經見する所なし。全く曉るべからず。後其の對レ酒有レ懷寄二李郎中一詩（後に見ゆ）を觀るに、往年江外拋二桃葉一、去歳樓中別二柳枝一とあり。注に桃葉は結之なり、柳枝は樊素なりと云ふ。然る後結之の義始めて明かなり」とある。

【詩意】閒に乘じ船を漕ぎ行きて舊池を尋ねた。今から十五年前に太湖石の上に陳結之が題した三字を見る爲であるが、吾が舊を懷ふ情をば誰も知る者はあるまい。

【字解】〔一〕陳結之　樂天の妓桃葉なり。

見敏中初到邠寧秋日登城樓詩詩中頗多鄉思因以寄和　從二殿中侍御史一出副二邠寧一。

敏中の初めて邠寧に到りて秋日城樓に登る詩を見る。詩中頗る鄉思多し。因つて以て寄和す　殿中侍御史より出でて邠寧に副たり。

想爾到邊頭。蕭條正値秋。　想ふ爾が邊頭に到り、蕭條として正に秋に値ふを。
二年貧御史。八月古邠州。　二年貧御史、八月古邠州。
絲管聞雖樂。風沙見亦愁。　絲管聞きて樂むと雖も、風沙見て亦愁ふ。
望鄉心若苦。不用數登樓。　鄉を望みて心若し苦まば、數〻樓に登るを用ひざれ。

【字解】〔一〕邊頭　邊鄙の地。邠寧を指して言ふ。〔二〕蕭條　淋しき貌。〔三〕絲管　絲竹管絃なり。〔四〕風沙　風に吹き捲くられる沙漠の沙。

【題義】白敏中（樂天の從弟）が節度副使となつて初めて邠寧に到り、秋城樓に登つた詩を見た。その詩の中に懷鄉の情が深く現れてゐたので、此詩を寄せて和したものである。

【詩意】想ふに汝は邊鄙な土地に往き、然も物淋しき秋に値つて、心を傷ましめてゐるらしい。二年間殿中侍御史として貧に泣き、今や古邠州の副使となつて亦八月の秋に遇ふ。管絃の聲を聞いて心を慰むるとも、胡沙吹く風を見ては亦愁嘆するであらう。故鄉を望見して心が苦むやうならば、あまり屢〻樓に登らぬがよい。

齋戒　　齋戒

毎日齋戒斷葷腥。　毎日齋戒して葷腥を斷つ、
漸覺塵勞染愛輕。　漸く覺ゆ塵勞染愛の輕きを。

律詩　見敏中初到邠寧秋日登城樓詩詩中頗多鄉思因以寄和　齋戒

【字解】〔一〕葷腥　臭菜や肉。〔二〕六賊　佛語。色聲香味觸法なり。楞嚴經に、眼耳鼻舌及與身心、

六賊定知無氣色。　六賊定めて知る氣色無きを、
三尸應恨少恩情。　三尸應に恨むべし恩情少きを。
酒魔降伏終須盡。　酒魔降伏して終に須らく盡くべし。
詩債塡還亦欲平。　詩債塡還して亦平かならんと欲す。
從此始堪爲弟子。　此より始めて弟子と爲るに堪へたり、
竺乾師是古先生。　竺乾の師は是れ古先生。

六賊＝賊媒、故有道之士、眼不視色、耳不聽聲、鼻不受香、口不味味、身離細滑、意不妄念、所以避六賊也とある。【三】三尸　彭宗元の文に、道士言、人皆有三尸蟲三、處腹中、伺人隱微失誤、日庚申、出讒於帝とある。【四】酒魔　酒を嗜むことを甚言せるなり。【五】詩債　韻に酬い和を索むるの作ない

【題義】精進潔齋して佛を修することを敍べた詩である。

【詩意】毎日葷腥を避けて食はず、專ら精進してゐるので、日增に苦勞や煩惱が輕くなるやうに思はれる。この分ならば定めて六賊も無氣力になり、三尸蟲も恩情なきを恨むであらう。濫に酒を飲みたがることもなくなり、詩債もすつかり辨濟し盡した。是に於て始めて佛弟子となることを得るやうになつた。

戲禮經老僧

經を禮する老僧に戲る

香火一爐燈一盞。　香火一爐燈一盞、
白頭夜禮佛名經。　白頭夜禮す佛名經。
何年飲著聲聞酒。　何の年にか聲聞の酒を飲著し、
直到如今醉未醒。　直に如今に到るまで醉ひて未だ醒めざる。

【一】一盞　燈明の皿。【二】佛名經　千佛名經なり。傳燈錄に、有秀才看千佛名經、問招賢禪師曰、百千諸佛、但見其名、未審居何國土、還化物也無とある。【三】聲聞　佛家にて經を誦し法を尊きて道を悟る者を稱していふ。【四】如今　當今。今。

【題義】老僧の徒に經を誦して未だ悟る所なきを嘲笑した詩である。

【詩意】一爐の香を焚き一盞の燈に對して白頭の老僧が夜千佛名經を讀んでゐる。いつから聲聞の酒を飲み始めて、今日に到るまでまだ醉が醒めないのであらう。

近見慕巢尙書詩中屢有歎老思退之意又於洛下新置郊居然寵寄方深歸心大速因以長句戲而諭之

近ごろ慕巢尙書の詩を見るに、中に屢〻老を歎じ退を思ふの意あり。又洛下に於て新に郊居を置く。然して寵寄方に深く歸心大に速なり。因つて長句を以て戲れて之に諭す

近見詩中歎白髮。　近ごろ詩中白髮を歎ずるを見、

【字解】【一】關外　將軍ない

遙知閭外憶東都。
煙霞偸眼窺來久。
富貴粘身擺得無。
新置林園猶濩落。
未終婚嫁且踟躕。
應須待到懸車歲。
然後東歸伴老夫。

遙に知る閭外東都を憶ふを。
煙霞眼を偸みて窺ひ來ること久し、
富貴身に粘して擺し得るや無や。
新に林園を置きて猶ほ濩落たり、
未だ婚嫁を終へず且踟躕す。
應に須らく懸車の歲に到るを待ちて、
然る後東に歸りて老夫に伴ふべし。

【題義】近ごろ楊汝士（字は慕巢、開成元年十二月檢校禮部尚書・梓州刺史・劍南東川節度使となる）の詩を見るに、中に衰老を歎じ引退を思ふ意味が多い。又洛陽に新に別莊を置き、屢〻我に詩を寄せ、歸心の頗る切なるものがある。因つて此詩を作つて戲に諭したといふのである。

【詩意】近ごろ君の詩に白髮を嘆ずる意味の多いのを見て、君が洛陽に歸臥せんことを望んでゐることを知つた。煙霞に目をつけて久しい前から引退の計を立ててはゐるが、富貴が身にこびりついてゐるから仲仲脫却することは出來まい。新に洛陽に別莊を建てたが、まだ子女の婚嫁も濟まないから、今すぐに歸臥する譯には行かないだらう。まあ七十致仕の歲になつたら、東の洛陽に歸つて僕と俱に遊ぶがよい。

對鏡偶吟。贈張道士抱元

鏡に對して偶吟し、張道士抱元に贈る

閒來對鏡自思量。
年貌衰殘分所當。
白髮萬莖何所怪。
丹砂一粒不曾嘗。
眼昏久被書料理。
肺渴多因酒損傷。
今日逢師雖已晚。
枕中治老有何方。

閒來鏡に對して自ら思量す、
年貌の衰殘するは分の當る所なり。
白髮萬莖何の怪む所ぞ、
丹砂一粒曾て嘗めず。
眼昏きは久しく書に料理せらるればなり、
肺渴するは多く酒の損傷するに因る。
今日師に逢ふ已に晚しと雖も、
枕中老を治すること何の方か有る。

【字解】〔一〕思量　かんがへる。〔二〕年貌　容貌。衰殘　衰老するなり。〔三〕丹砂　仙藥なり。〔四〕料理　裁制なり。〔五〕枕中　漢書に、淮南有二枕中鴻寶苑祕書一、書言二神僊使二鬼物一爲二金之術一とあり、注に師古曰、鴻寶苑祕書、並道術篇名、藏在二枕中一、言二常存二錄之一、不二漏泄一也とある。

【題義】鏡に對して偶吟し道士張抱元に贈つた詩である。

【詩意】閒に乘じ鏡に照して見て、大分老衰したが是は當然の結果だと自ら考へた。一粒の仙藥をも服用しないのだから、無數に白髮が生えるのも不思議はない。目のよく見えないのは書物を讀み過ぎ

た爲で、肺の渇するのは酒の損傷に因るのだ。今日始めて張道士に逢つたのは已に晩くはあるが、何とか衰老を治する祕法はあるまいか。

病入新正

枕上驚新歲。花前念舊歡。
是身老所逼。非意病相干。
風月情猶在。杯觴興漸闌。
便休心未伏。更試一春看。

病んで新正に入る

枕上新歲に驚く、花前舊歡を念ふ。
是身老に逼られ、非意病相干す。
風月情猶ほ在り、杯觴興漸く闌なり。
便ち休せんとするも心未だ伏せず、更に一春を試みて看ん。

【字解】〔一〕非意　中根香亭の香亭藏草附錄詩窓閒話に、晉書ニ翫玠ノ事ヲ書シテ、玠實以、人有レ不レ及、可ニ以レ情恕一、非意相干、可ニ以レ理遣一、故終身不レ見ニ喜愠色一トアリ。是ハ仙人智識ニ乏シクシテ我ニ失禮ナルコトアラバ、ソノ遲鈍ヲ想ヒヤリテ之ヲ宥恕スベシ。若シ又理非ヲ顧ミズシテ失禮スルコトアラバ、偏ニ道理ヲ推シテ自ラ覺ラシムベシトノ義ナリ。此ノ非意トイフハ惡意トイフ程ニハナク、俗ニムヤミトイフ如キコトナリとある。

【題義】病軀を抱いて新年を迎へたことを述べた詩である。

【詩意】枕上に新年を迎へて歲月の速なるに驚き、春花を見て舊日の歡を追念した。この身は老に逼られ、むやみに病に干されてゐるが、風月の情はまだ消磨せず酒興も旺盛である。されば風月を賞し酒を飲むことを休めようとは思ふが、心が伸伸承服しないから、兎も角ももう一春試みて看ようと思ふ。

臥疾來早晚

臥疾來早晚。懸懸將十旬。
婢能尋本草。犬不吠醫人。
酒甕全生醭。歌筵半委塵。
風光還欲好。爭向枕前春。

疾に臥してより來早晚、懸懸として將に十旬ならんとす。
婢は能く本草を尋ね、犬は醫人を吠えず。
酒甕全く醭を生じ、歌筵半は塵に委す。
風光還た好からんと欲するも、爭でか枕前の春に向はん。

【字解】〔一〕早晚　幾日になるかといふ意。〔二〕懸懸　常に心に懸ること。王建の詩に妾思常懸懸、君行復緜緜とある。十旬は百日。〔三〕本草　藥草の書物。〔四〕醭　かび。

【題義】詩中の第一句を取つて題にしたのである。

【詩意】疾に臥してからもう百日近くになるので、婢も能く本草の書を調べるやうになり、犬も慣れて醫者を見ても吠えないやうになつた。酒甕は開かないのでかびが生え、歌筵は塵の積るに任せてある。春になつて大分風光もよくなつて來たが、起き上つて賞することも出來ない。

强起迎春。戲寄思黯

杖策人扶廢病身。　策を杖き人に扶けらるる廢病の身、　一【字解】〔一〕杖策　杖をつく。

强ひて起きて春を迎へ、戲れに思黯に寄す

晴和強起一迎春。
他時蹇跛縱行得。
笑殺平原樓上人。

晴和強ひて起きて一たび春を迎ふ。
他時蹇跛して縱ひ行き得るも、
平原樓上の人に笑殺せられん。

傳に、平原君家樓臨民家、民家有美者、衆飲行酒、平原君美人居樓上、臨見大笑之とある。

【題義】病を強めて起きて春を迎へ、戯れに牛僧孺（字は思黯）に寄せた詩である。

【詩意】晴和に乗じ強ひて廢病の身を起し、杖にすがり人に扶けられて春を賞した。近いうちに跛をひきつつも君の處へ遊びに行けるやうになるであらうが、君の家の美人たちに笑はれるであらう。

【一】晴和　春暖なり。【二】他時　後日。近日。蹇跛　びつこをひくこと。病後で自由に歩けない爲に。
【三】平原　趙の平原君なり。ここでは借りて牛僧孺に比す。史記平原君

夢得前所酬篇有錬盡美少年之句因思往事兼詠今懷重以長句答之

夢得の前に酬いし所の篇に錬盡せる美少年の句あり。因つて往事を思ひ、兼ねて今の懷を詠じ、重ねて長句を以て之に答ふ

錬盡少年成白首。
憶初相識到今朝。

錬盡せる少年白首と成れり、
憶ふ初めて相識りてより今朝に到れることを。

【字解】【一】白首　しらが頭。

昔饒春桂長先折。
今伴寒松取後凋。

昔は春桂長く先づ折るを饒し、
今は寒松に伴ひて凋むに後るるを取る。

昔登科第。夢得多居先。今同慕年。洛下爲老伴。

生事縱貧猶可過。
風情雖老未全銷。
聲華寵命人皆得。
若箇如君歷七朝。

生事縱ひ貧なるも猶ほ過ごす可し、
風情老いたりと雖も未だ全く銷せず。
聲華寵命人皆得たるも、
若箇ぞ君が七朝を歴たるに如かんや。

夢得貞元中。及今凡仕七朝也。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の嘗て樂天に酬いた詩の中に「錬盡せる美少年」といふ句があつた。因つて往事を思ひ今の感懷を詠じて此詩を作り、禹錫に答へたといふ意。

【詩意】錬り鍛へた美少年も今は白髪の老翁になつた。君の詩を見て君と相識つてから今朝に至るまでを今更追想した。昔は我に先だつて毎に及第したが、今は我に伴つて晩節を全うしてゐる。生計は貧しくともどうやら日を送ることが出來、感興は老いたとはいふものの未だ全く消磨しはしない。世には聲華寵命を荷つてゐる人もいくらもあるが、君のやうに七朝に仕へた老臣は稀であらう。

【一】春桂　科第に登ることを月中の桂を折るに喩ふ。
【二】寒松　樂天自ら謂ふ。後凋は晩節を全了すること。論語に、子曰、歲寒然後知松柏之後凋とある。
【三】聲華　聲譽光耀をいふ。寵命は天子の恩命に浴すること。

病後寒食

(一)故紗絳帳舊青氈。
藥酒醺醺引醉眠。
(三)抖擻弊袍春晩後。
(四)摩挲病脚日陽前。
行無筋力尋山水。
坐少精神聽管絃。
拋擲風光負寒食。
曾來未省似今年。

病後の寒食

故紗絳帳舊青氈、
藥酒醺醺醉眠を引く。
弊袍を抖擻す春晩れて後、
病脚を摩挲す日陽の前。
行いては筋力の山水を尋ぬる無く、
坐しては精神の管絃を聽くこと少し。
風光を拋擲して寒食に負く、
曾來未だ省せず今年に似たるを。

【題義】病後寒食（冬至から百五日目をいふ）に値うて作つた詩である。

【詩意】古い紗の赤い帳を垂れ、古い青毛氈の上に横はり、藥と酒とを飲んで昏昏と醉眠する。最早春も暮れたので古綿入を脱ぎ棄て、病に痛む脚を日當りのよい處で撫でて看る。もう山水を尋ねる筋力もなくなり、管絃を聽かうといふ氣力もなくなつた。今年のやうに春にも寒食にも負いて病に臥したことは、考へて見るのに未だ嘗てないことである。

【字解】〔一〕故紗絳帳　古い紗で作つた紅色の帳。舊青氈は古い青色の毛氈。〔二〕醺醺　醉ふ貌。〔三〕抖擻　脱ぎすてる。弊袍は、やぶれた綿入。〔四〕摩挲　もむ。こする。

老病相仍。以詩自解

榮枯憂喜與(一)彭殤。
都似人間戲(二)一場。
(三)蟲臂鼠肝猶不怪。
(四)雞膚鶴髮復何傷。
昨因(五)風發甘長往。
今遇陽和又小(六)康。
春暖來風痺稍退也。
還似遠行裝束了。
(七)遲廻且住亦何妨。

老病相仍る。詩を以て自ら解く

榮枯憂喜と彭殤と、
都て似たり人間の戲一場。
蟲臂鼠肝猶ほ怪まず、
雞膚鶴髮復た何ぞ傷まん。
昨は風發に因りて長往に甘んじ、
今は陽和に遇ひて又小しく康し。
還た遠行の裝束し了るに似たり、
遲廻し且住するも亦何ぞ妨げん。

【題義】老と病と相仍つて逼る。因つて詩を以て自ら慰めたといふ意。

【詩意】人の身の榮枯も憂喜も壽夭も、すべて一場の戲劇のやうなもので、深く意に介するには足らない。自分は蟲の臂に化するとも鼠の肝に化するとも、一切造物者の爲すが儘に任せて怪まないのだ

【字解】〔一〕彭殤　壽夭といふが如し。彭は彭祖、古の長壽者の名。殤は未だ人と成らずして死する者をいふ。王羲之の蘭亭記に、固知一死生爲虛誕、齊彭殤爲妄作とある。〔二〕戲一場　一幕の芝居。〔三〕蟲臂鼠肝　蟲の臂、鼠の肝。莊子太宗師篇に、偉哉造化、又將奚以汝適、以汝爲鼠肝乎、以汝爲蟲臂乎とある。〔四〕雞膚　老人の皮膚。鶴髮は白髮。唐明皇傀儡吟に、剩木雕絲作老翁、雞皮鶴髮與眞同とある。〔五〕風發　風痺。〔六〕小康　疾の少しく癒ゆること。〔七〕遲廻　徘徊躊躇すること。

から、老衰することなどは少しも悲みはしない。嚮には風痺の疾が起つて死ぬ覺悟をきめたが、今は氣候が暖かになつたので病氣も少し快方に向つて來た。譬へば遠行の旅支度が整つたのが、都合によつて旅行を見合せると同じく、此分ならば暫く此世に生きてゐてもよい。

皇甫郎中親家翁赴任絳州宴送出城贈別

皇甫郎中親家翁、絳州に赴任するとき宴送して城を出で贈別す

慕賢入室交先定。　賢を慕ひ室に入りて交先づ定む、
結援通家好復成。　援を結び家を通じて好復た成る。
新婦不嫌貧活計。　新婦は嫌はず貧活計、
嬌孫同慰老心情。　嬌孫は同じく慰む老心情。
洛橋歌酒今朝散。　洛橋の歌酒今朝散じ、
絳路風煙幾日行。　絳路の風煙幾日にか行く。
欲識離羣相戀意。　羣を離れて相戀ふ意を識らんと欲し、
爲君扶病出都城。　君の爲に病を扶けて都城を出づ。

【題義】皇甫郎中の親家翁が絳州に赴任するとき、洛陽の城下を出て郊外に宴送し、此詩を贈つて別れたのである。

【詩意】賢を慕ひ援を結んで君と姻戚關係になつた。新婦は我が貧生活を嫌はず、愛孫等は我が老心を慰めてくれる。君が赴任を送る爲の洛橋の別宴も散じた。さてこれから何日君は絳州に著くであらう。君が友に離れて相戀ふ意を識らんと欲し、病を扶けて此郊外まで出掛けて來た。

【字解】〔一〕親家翁　後集卷十五、閒吟贈皇甫郎中親家翁を見よ。〔二〕入室　晉書王濬傳に、時文帝輔政、濬益貴幸、與劉毅一號爲入室之賓とある。〔三〕通家　婚姻を通ずること。〔四〕洛橋　洛陽の橋の名。〔五〕絳路　絳州。〔六〕都城　洛陽を指して言ふ。

春暖

風痺宜和暖。春來脚校輕。　風痺は和暖に宜しく、春來脚校輕し。
鶯留花下立。鶴引水邊行。　鶯に留められて花下に立ち、鶴に引かれて水邊に行く。
髮少嫌巾重。顏衰訝鏡明。　髮少くして巾の重きを嫌ひ、顏衰へて鏡の明かなるを訝る。
不論親與故。自亦味平生。　親と故とを論せず、自ら亦年生より味し。

【字解】〔一〕風痺　中風の病。〔二〕親與故　親戚故舊。

【題義】春暖の時の情狀を述べた詩である。

【詩意】中風には暖かなのがよいので、春になつてからは脚も稍輕くなつた。鶯に引留められて花の下に立つたり、鶴に引かれて水邊に行つたりした。髮の毛が少くなつて頭巾の重きを嫌ひ、顏が衰へ

たので鏡の明かなのに愧づる。親戚故舊を論せず、視力が衰へた爲に、從來ほどにはつきりと見別けがつかない。

殘春晚起。伴客笑談　殘春に晩く起き、客に伴つて笑談す

掩戶下簾朝睡足。　戶を掩ひ簾を下して朝睡足る、
一聲黃鳥報殘春。　一聲の黃鳥殘春を報ず。
披衣岸幘日高起。　衣を披幘を岸けて日高けて起き、
兩角青衣扶老身。　兩角の青衣老身を扶く。
策杖强行過里巷。　杖を策き强ひて行きて里巷を過ぎ、
引盃閒酌伴親賓。　盃を引き閒に酌みて親賓に伴ふ。
莫言病後妨談笑。　言ふ莫れ病後談笑を妨ぐと、
猶恐多於不病人。　猶ほ恐らくは病まざる人よりも多し。

【題義】殘春の時節に朝晩く起き客に伴つて談笑した時の作である。

【詩意】戶を掩ひ簾を卸して朝寢してゐたが一聲の鶯に夢を破られた。因つて日が高く昇つてから、著物をひつかけ帽子もかぶらずに起き出で、總角の侍女に扶けられ、杖にすがつて町中を通り、親賓に伴つて閒酌した。病後は談笑を妨げるといふが、寧ろその反對で無病の人よりも多く談笑した。

【字解】〔一〕岸幘　巾で額を覆ふのみで額を露すこと。後漢書に、上自臨廟下、岸幘迎とある。〔二〕兩角　髮を兩方に分けて結ぶなり。總角といふが如し。青衣は侍女。

送唐州崔使君侍親赴任　唐州の崔使君が親に侍し任に赴くを送る

連持使節歷專城。　連に使節を持して專城を歷、
獨賀崔侯最慶榮。　獨り賀す崔侯最も慶榮。
烏府一拋霜簡去。　烏府一たび霜簡を拋ちて去り、
朱輪四從板輿行。　朱輪四たび板輿に從つて行く。
發時止許沙鷗送。　發する時は止沙鷗に許して送らしめ、
到日方乘竹馬迎。　到る日は方に竹馬に乘じて迎へしむ。
唯慮郡齋賓友少。　唯慮る郡齋賓友の少なるを、
數盃春酒共誰傾。　數盃の春酒誰と共にか傾けん。

童兒數百、各騎竹馬、道次迎拜とある。【六】郡齋　刺史の役所。

【題義】唐州刺史崔氏の親に侍して任に赴くのを送る詩である。

【字解】〔一〕使君　刺史の稱。〔二〕專城　地方長官の稱。古樂府に、三十侍中郎。四十專城居とある。〔三〕烏府　御史府ないふ。烏臺ともいふ。漢書に御史府中列柏樹、常有野烏數千、棲宿其上とある。霜簡は刑罰を加ふる命令書。〔四〕朱輪　貴人の乘る車。板輿は潘岳の賦に、太夫人乃御板輿とあり、岑參の詩に榮祿上及親、之官隨板輿とある。〔五〕竹馬　後漢書郭伋傳に、伋前在并州、因結恩德、及後入界、老幼逢迎、行部到西河、有童

【詩意】 連に使節を奉じて地方長官たることは、崔君を以て最も慶榮とする。君は嘗て殿中侍御史であつたが、去つて地方官となり、四たび親に侍して赴任した。發する時は唯沙鷗に送られるのみだが、任に到れば君の德を慕つて童兒が竹馬に乘つて出迎へる。郡齋には定めて賓友が少いだらうが、共に酒を飲む相手がなくて困るだらう。それのみが心懸りである。

春晩詠懷贈皇甫朗之

春晩懷を詠じ、皇甫朗之に贈る

艶陽時節又蹉跎。
遲暮光陰復若何。
一歲中分春日少。
百年通計老時多。
多中更被愁牽引。
少裏兼遭病折磨。
賴有銷憂治悶藥。
君家釀酎我狂歌。

艶陽の時節又蹉跎たり、
遲暮の光陰復た若何。
一歲中分するに春日少く、
百年通計すれば老時多し。
多中更に愁に牽引せられ、
少裏兼ねて病に折磨せらる。
賴に憂を銷し悶を治むる藥有り、
君が家の釀酎我が狂歌。

【字解】〔一〕艶陽　陽春なり。蹉跎は時を失ふなり。〔二〕遲暮　年よること。〔三〕百年　人の一生をいふ。〔四〕君家　君に同じ。釀酎は醇酒。

【題義】 春の末に懷を詠じて皇甫朗之に贈つた詩である。

【詩意】 春の時節も終に近づき、吾が年も漸く老境に入つた。一年を平分すれば陽春の好季節は少く、一生を通計すれば老衰の時が多い。その多い老衰の中を更に愁に牽かれ、少い春の中にも亦病の爲に減損せられる。ただ幸に憂を銷し悶を治する藥がある。その藥といふのは君の醇酒と我が狂歌とである。

春盡日宴罷感事獨吟

開成五年三月三十日作。

春の盡くる日宴罷み事に感じて獨り吟ず　開成五年三月三十日の作。

五年三月今朝盡。
客散筵空獨掩扉。
病共樂天相伴住。
春隨樊素一時歸。
閒聽鶯語移時立。
思逐楊花觸處飛。

五年三月今朝盡く、
客散じ筵空しく獨り扉を掩ふ。
病は樂天と共に相伴ひて住し、
春は樊素に隨ひて一時に歸る。
閒に鶯語を聽きて時を移して立ち、
思は楊花を逐うて處に觸れて飛ぶ。

【字解】〔一〕樊素　樂天の妓の名。

金帶縋腰衫委地。　金帶は腰を縋ひて衫は地に委し、
年年衰瘦不勝衣。　年年衰瘦して衣に勝へず。

【題義】開成五年三月三十日春の盡くる日に、宴罷み事に感じて作つた詩である。

【詩意】開成五年三月も今朝で終を告げた。宴席の客も散じて獨り門を閉ぢて閒居してゐる。病氣はいつも樂天の身につきまとひ、春は樊素と共に去つてしまつた。（前の別二柳枝一の詩を見よ）靜に鶯の聲を聽いて久しく立てば、わが情思は楊花と同じく處定めず飛動する。金帶は吾が腰をまとひ衫は地に垂れ、年年衰瘦して衣にも勝へられぬやうになつた。

病中辱二崔宣城長句見一寄。兼有二觥綺之贈一。因以四韻一總而酬之

病中崔宣城に長句を寄せらるるを辱うし、兼ねて觥綺の贈あり、因つて四韻を以て總て之に酬ゆ

劉(一)植病發經春臥。　劉植病發り春を經て臥す、
謝(二)朓詩來盡日吟。　謝朓詩來りて盡日吟ず。
三(三)道舊誇收片玉。　三道舊誇る片玉を收むるを、
信題霞(四)綺緘情重。　信は霞綺に題して緘情重し、
酒試銀觥(五)表分深。　酒は銀觥に試みて表分深し。
科(六)第門生滿霄漢。　科第の門生霄漢に滿つ、
歲(七)寒少得似君心。　歲寒君が心に似たるを得るもの少し。

【題義】樂天の病中、宣州刺史崔氏から長詩を寄せられ、又酒器と綺緘とを贈られたので、この四韻八句の詩を寄せて酬いたのである。

【詩意】吾は病に罹つて春を寢て過した。折しも崔宣城から詩を寄せられたので、終日吟じて罷まない。君は嘗て三科に及第した英才であるが、その人から雙南金にも比すべき新詩を寄せられたのは誠に辱い。更に霞綺と銀觥とを贈られた厚情は謝するに餘ある。吾が考官たりし時及第した者は、今は榮達して天上に滿ちてゐるが、歲寒の松柏のやうに、舊時の節操を失はないこと君のやうな人は少い。

【字解】【一】劉植　三國魏の詩人。樂天自ら比す。【二】謝朓　齊の詩人。嘗て宣城太守となる。世に謝宣城と稱す。借りて崔宣城に比す。盡日は終日。【三】三道　試驗の三科目。【四】雙金　雙南金なり。【五】霞綺　うすぎぬ。【六】銀觥　銀杯。【七】科第門生　樂天が考官たりし時及第した人人。霄漢は天上。高官に喩ふ。【八】歲寒　論語に歲寒然後知二松柏之後一凋とある句を用ふ。

一章新喜獲二雙金一。　一章新に喜ぶ雙金を獲るを。

酒試銀觥表分深。

酒は銀觥に試みて表分深し。

科第門生滿霄漢。

科第の門生霄漢に滿つ、

歲寒少得似君心。

歲寒君が心に似たるを得るもの少し。

前有別柳枝絕句。夢得繼和云。春盡絮飛留不得。隨風好去落誰家。又復戲答

律詩　病中辱崔宣城長句見寄兼有觥綺之贈因以四韻總而酬之　前有別柳枝絕句

前に柳枝に別るる絶句あり。夢得繼ぎ和して云く、春盡き絮飛んで留め得ず、風に隨つて好し去つて誰が家にか落つると。又復た戯れに答ふ

柳老春深日又斜。　柳老い春深けて日又斜なり、
任他飛向別人家。　任他飛んで別人の家に向ふ。
誰能更學孩童戯。　誰か能く更に孩童の戯を學び、
尋逐春風捉柳花。　春風を尋ね逐ひて柳花を捉へん。

【字解】〔一〕孩童　幼童。

【題義】前に柳枝に別るる絶句を作つた（後集巻十六に見ゆ）處が、劉禹錫（字は夢得）がそれに和して、「春盡き絮飛んで留め得ず、風に隨つて好し去つて誰が家にか落つる」といふ詩を作つたので、戯れに此詩を作つて答へたといふのである。

【詩意】柳は老い春は深けて日も西に傾いたから、柳花が飛んで別人の家に向ふとも、意に任せて敢て問はず。幼童の戯れをまね、春風を逐うて柳花を捉へるやうな事はしない。

池上早夏

水積春塘晩。陰交夏木繁。　水積みて春塘晩る、陰交りて夏木繁し。
舟船如野渡。籬落似江村。　舟船野渡の如く、籬落江村に似たり。
靜拂藤牀席。香開酒庫門。　靜に藤牀の席を拂ひ、香しく酒庫の門を開く。
慵閒無一事。時弄小嬌孫。　慵閒一事無し、時に弄す小嬌孫。

【字解】〔一〕野渡　野邊の渡場。〔二〕籬落　まがき。〔三〕藤牀　藤蔓で作つた寢臺。

【題義】池邊初夏の卽事を敍した詩である。

【詩意】春の末になつて池の水が增し、綠陰深く夏木立が繁つてゐる。舟の漂へるさまは野邊の渡場の如く、籬の有樣は江村に似てゐる。靜に藤牀の塵を拂つて臥し、酒庫を開いて杯を傾け、閒靜で一事の身心を勞するなく、時時嬌孫を弄しなどして日を送つてゐる。

談氏外孫生三日。喜是男。偶吟詩篇。兼戯呈夢得

談氏の外孫生れて三日。是れ男なるを喜び偶〻詩篇を吟じ兼ねて戯れに夢得に呈す

玉芽珠顆小男兒。　玉芽珠顆小男兒、
羅薦蘭湯浴罷時。　羅薦蘭湯浴し罷む時。
茅莒春來盈女手。　茅莒春來りて女手に盈つ、
梧桐老去長孫枝。　梧桐老い去りて孫枝を長ず。
慶傳媒氏燕先賀。　慶傳はりて媒氏燕先づ賀し、

【字解】〔一〕羅薦　薄絹の敷物。〔二〕茅莒　草の名。其實藥產を治すといふ。詩經周南茅莒篇に、采采茅莒、薄言采之とある。〔三〕梧桐　樂天自ら喻ふ。孫枝は嫩枝なり。〔四〕媒氏　なかうど。結婚の媒介者。燕先賀は淮南子に大厦成而燕雀來賀とあるを用ふ。〔五〕賀翁

喜報談家烏預知。　喜報せられて談家烏預め知る。
明日貧翁具雞黍。　明日貧翁雞黍を具へ、
應須酬賽引鵶詩。　應に須らく鵶を引く詩を酬賽すべし。

前年談氏外孫女初生。夢得有賀詩。云。從此引鵶雛。今幸是男。前言似有驗。故云。

【題義】　監察御史談弘謩に嫁した樂天の女の生んだ子が男なのを喜んで、此詩を吟じ兼ねて戯れに劉禹錫（字は夢得）に呈したのである。

【詩意】　玉のやうな男の子が生れた。早速産湯をつかはせて薄絹の蒲團にねせた。茅萱をば春になつてから女共に採らせて藥用に供した甲斐があつて、これでこそ吾は老いても立派な後繼が出來たわけだ。この吉報が傳はつて媒氏の家では燕が先づ賀し、談氏の家では烏が先づ知つた。明日は貧翁たる我も雞と黍飯とを用意して、前年君から貰つた雛を引くといふ賀詩に酬いようと思ふ。

樂天自ら謂ふ。雛黍は論語に、留子路一宿、殺雞爲黍而食之とある。

【六】酬賽　むくいる。

開成大行皇帝挽歌詞四首。奉勅撰進

開成大行皇帝挽歌詞四首。　勅を奉じて撰進す

御宇恢皇化。傳家叶至公。　御宇皇化を恢にす、傳家至公に叶ふ。
華夷臣妾內。堯舜弟兄中。　華夷は臣妾の內、堯舜は弟兄の中。

制度移民俗。文章變國風。　制度民俗を移し、文章國風を變ず。
開成與貞觀。實錄事多同。　開成と貞觀と、實錄事多く同じ。

【字解】【一】開成　唐の文宗皇帝の年號。大行皇帝とは初めて崩じて未だ謚せざる天皇。卽ち文宗を指す。挽歌詞は柩を挽く者をして歌はしむる喪歌。【二】貞觀　唐の太宗皇帝の年號。

【題義】　文宗皇帝の靈柩を挽く者に歌はしめる哀歌で、勅を奉じて作つたのである。

【詩意】　文宗の御宇には皇化が益〻弘まり、位を傳ふることも至つて公平である。華夷盡く臣服し、堯舜と其德を齊しうしてゐる。制度は民俗を移し、文章は國風を變革した。されば文宗の政事を太宗のそれに比するに、實錄の相似たものが頗る多い。

〔一〕

晏駕雙闕。靈儀出九衢。　晏駕雙闕を辭し、靈儀九衢を出づ。
上雲歸碧落。下席葬蒼梧。　雲に上りて碧落に歸し、席を下りて蒼梧に葬る。
蓂晚餘堯曆。龜新啓夏圖。　蓂晚くして堯曆を餘し、龜新にして夏圖を啓く。
三朝棣夢。從古帝王無。　三朝棣夢を聯ぬ、古より帝王無し。

【字解】【一】晏駕　天子の崩御をいふ。雙闕は宮城。【二】靈儀　葬列なり。九衢は街衢。【三】碧落　青天。【四】蒼梧　舜の崩ぜし處。【五】蓂　瑞草なり。帝王世紀に、堯時有草夾階而生、每月朔生一莢、月半則生十五莢、自十六日二莢落、至三月晦一

雨畝、月小則餘二一莢一、厭而不レ落、名爲二蓂莢一とある。【六】 夏圖　洛書なり。夏禹の水を治むる時、龜あり文を負ふ。禹因つて之を第して九疇を成す。【七】 三朝　敎宗・文宗・武宗。棣萼は兄弟をいふ。敎宗・文宗・武宗は皆穆宗の子にして兄弟なり。

【詩意】 文宗皇帝が崩御になり、大葬の儀仗が長安の都を出た。文宗の靈が青天に歸したので、今上皇帝が玉座を下つて文宗を葬るのである。文宗は堯と其德を同じうし、今上は夏禹と其功を同じうする。三朝の天子が兄弟相禪つたといふことは古來未だ嘗てない所である。

〔三〕

嚴恭七月禮。哀慟萬人心。　嚴恭なり七月の禮、哀慟す萬人の心。
地感勝秋氣。天愁結夕陰。　地感じて秋氣に勝り、天愁へて夕陰を結ぶ。
鼎湖龍漸遠。濛汜日初沈。　鼎湖龍漸く遠く、濛汜日初めて沈む。
唯有雲韶樂。長留治世音。　唯雲韶の樂のみ有り、長く治世の音を留む。

【字解】 〔一〕 七月禮　左傳に天子七月而葬、同軌畢至とある。〔二〕 鼎湖　黃帝の天に升りし處。龍は天子に喩ふ。〔三〕 濛汜　太陽の浴する處。〔四〕 雲韶　舜の樂。文宗の音樂に喩ふ。

【詩意】 七月に恭しく大葬の禮が行はれて、萬人の心を哀慟せしめ、天地も爲に愁へて夕陰を結ぶこと秋氣に勝る程であつた。今や文宗崩じて此世に在さず、ただ治世の音たる雲韶の樂を留むるのみである。

〔四〕

化成同軌表清平。　化成同軌清平を表し、
恩結連枝感聖明。　恩連枝に結んで聖明を感せしむ。
帝與九齡雖吉夢。　帝九齡を與ふるは吉夢なりと雖も、
山呼萬歲是虛聲。　山萬歲を呼ぶは是れ虛聲。
月低儀仗辭蘭路。　月は儀仗に低れて蘭路を辭す、
風引笳簫入栢城。　風は笳簫を引きて栢城に入る。
老病龍髯攀不及。　老病龍髯攀づれども及ばず、
東周退傅最傷情。　東周の退傅最も情を傷ましむ。

【字解】 〔一〕 化成　易經に聖人久二於其道一、而天下化成とある。同軌は車轍の廣狹相同じきなり、四夷の國に別つなり。天下といふが如し。〔二〕 連枝　兄弟を謂ふ。蘇武の詩に、況我連枝樹、與レ子同一身とある。〔三〕 帝　天帝。九齡は九歲。禮記に武王曰、夢帝與二我九齡一とある。〔四〕 山呼二萬歲一　漢書武帝紀に、元封元年親登二崇高一、御史官屬在二廟旁一、咸聞レ呼二萬歲一者三とある。〔五〕 笳簫　喪式の樂器。栢城は墓なり。〔六〕 龍髯　黃帝龍に騎つて天に上る。小臣上るを得ず、悉く龍髯を持す。〔七〕 東周　洛陽をいふ。退傅は引退した太子少傅時に樂天は太子少傅であつた。

【詩意】 文宗は能く天下を化成して太平を致し、恩は兄弟に及んで聖明を感せしめた。昔天帝が武王に九歲の壽を與へたといふのは唯夢に過ぎず、漢の武帝の時に、どこからともなく萬歲を唱へる聲が聞えたといふが、それは虛言であらう。今や月が大葬の儀仗を照して蘭路を去り、風が笳簫の聲を引いて陵墓に入つた。我は老病の身であるから、文宗の後を慕つて呼返さうと思ふが、それも出來ず、

ただ獨り心を傷ましむるのみである。

時熱少見客。因詠所懷

時熱く客を見ること少し、因つて所懷を詠ず

冠櫛心多懶。逢迎興漸微。
冠櫛心多く懶く、逢迎興漸く微なり。

況當時熱甚。幸遇客來稀。
況んや時の熱甚だしきに當り、幸に客の來る稀なるに遇ふ。

濕灑池邊地。涼開竹下扉。
濕は池邊の地に灑ぎ、涼は竹下の扉を開く。

露牀青篋簟。風架白蕉衣。
露牀青篋の簟、風架白蕉の衣。

院靜留僧宿。樓空放妓歸。
院靜にして僧を留めて宿せしめ、樓空しくして妓を放ちて歸らしむ。

衰殘强歡宴。此事久知非。
衰殘强ひて歡宴せんとするも、此事久しく非なるを知る。

【字解】〔一〕露牀　露天にある寢臺。青篋簟は青竹のかたむしろ。〔二〕風架　風のよく當るやぐら。白蕉衣は白い芭蕉布の著物。〔三〕衰殘　衰廢なり。

【題義】炎熱の時節に來客が少いので、感懷を述べた詩である。

【詩意】髮を櫛り冠を戴くに懶く、人を招待する興味も薄くなつた。況んや今や盛夏の時節なので、幸に來り訪ふ客も少い。因つて池邊の地に水を灑ぎ、竹林の下の扉を開き、露天の寢臺に青竹の簟を敷いて其上に臥し、風のよく透る架の上に白蕉の著物を著て坐しなどした。書院が靜なので僧を留めて宿せしめ、妓を解放して歸したのでは樓がからあきになつた。老衰して强ひて歡宴しようとしても、最早當年の感興は湧かない。

宣州崔大夫閣老忽以近詩數十首見示。吟諷之下。竊有所喜。因以長句寄題郡齋

宣州の崔大夫閣老忽ち近詩數十首を以て示さる。吟諷の下竊に喜ぶ所あり。因つて長句を以て郡齋に寄題す

謝玄暉歿吟聲寢。
謝玄暉歿して吟聲寢み、

郡閣寥寥筆硯閒。
郡閣寥寥たり筆硯閒なり。

無復新詩題壁上。
復た新詩の壁上に題する無く、

虛教遠岫列窻間。
虛しく遠岫をして窻間に列せしむ。

謝宣城郡內詩云。窻中列遠岫。

忽驚歌雪今朝至。
忽ち驚く歌雪今朝至るを、

必恐文星昨夜還。
必ず恐る文星の昨夜還るを。

再喜宣城章句動。
再び宣城章句の動くを喜び、

【字解】〔一〕閣老　唐書に、故事、舍人年久者爲閣老とある。〔二〕郡齋　刺史の役所。寄題は遠方から郵寄して題すること。〔三〕謝玄暉　謝朓、字は玄暉、南齊の詩人。嘗て宣城太守となる。世に謝宣城と稱す。〔四〕郡閣　郡齋に同じ。〔五〕歌雪　陽春白雪なり。よき歌をいふ。〔六〕文星　文章を司る星。崔大夫に喩ふ。〔七〕敎亭山　山の名。安徽省宣城縣の北に在る。

飛觴遙賀敬亭山。

謝又有題敬亭山詩、如見文選。

觴を飛ばして遙に賀す敬亭山。

【題義】宣州刺史崔氏（前に病中辱崔宣城長句見寄云云と題する詩あり）が突然近作の詩數十首を寄せた。之を吟詠して竊に喜ぶ所あり。因つて此詩を賦して宣州郡齋に寄せたといふのである。

【詩意】謝朓が死んでからは詩の名人も出ないで、郡齋は寂寞として聲なく、新詩を壁上に題する者もなくて、昔ながらに遠岫の窓間に列るのみであつた。突然結構な詩を寄せられたのに驚き、謝朓の如き文星が再び還つて來たことを知つた。因つて宣城の章句が再び活躍するであらうことを喜び、觴を飛ばして遙に敬亭山に祝意を表する。

足疾

足疾

足疾無加亦不瘳。
足疾加はる無きも亦た瘳えず、
綿春歷夏復經秋。
春を綿り夏を歷て復た秋を經。
開顏且酌樽中酒。
顏を開き且酌む樽中の酒、
代步多乘池上舟。
步に代へて多く乘る池上の舟。
幸有眼前衣食在。
幸に眼前に衣食の在る有り、
兼無身後子孫憂。
兼ねて身後に子孫の憂ふる無し。
應須學取陶彭澤。
應に須らく陶彭澤を學び取るべし、
但委心形任去留。
但心形を委して去留に任す。

【字解】〔一〕開顏　笑ふこと。李白の詩に、開顏酌二美酒一、樂絲怒成レ醉とある。〔二〕身後　死後。〔三〕陶彭澤　彭澤縣令陶淵明。〔四〕心形　精神と肉體。

【題義】中風に罹つて足の不自由なことを述べた詩である。

【詩意】足の疾はわるくもならないが又よくもならない。春から夏にかけて復た秋に及んだ。笑を含んで樽中の酒を酌み、步行する代りに多くは舟に乘る。幸に眼前に衣食があるから凍餒の患もなく、又死後に子孫の憂ふることもない。ただ陶淵明に倣つて身心を去留に任せ天命を樂むべきである。

晚池汎舟。遇景成詠。贈呂處士

晚池に舟を汎べ、景に遇うて詠を成し、呂處士に贈る

岸淺橋平池面寬。
岸淺く橋平かにして池面寬し、
飄然輕棹汎澄瀾。
飄然として輕棹澄瀾に汎ぶ。
風宜扇引開懷入。
風は宜し扇の引きて懷を開きて入るるに、
樹愛舟行仰臥看。
樹は愛す舟の行くとき仰臥して看るを。

【字解】〔一〕別境　俗塵を離れた處。〔二〕能詩　詩に巧なこと。〔三〕呂叟　呂處士を指す。〔四〕磻溪　太公望呂尙の釣せし處。

別境客稀知不易。
能詩人少詠應難。
唯憐呂叟時相伴。
同把磻溪舊釣竿。

別境客稀にして知ること易からず、
能詩人少にして詠ずること應に難かるべし。
唯憐む呂叟時に相伴ひ、
同じく磻溪の舊釣竿を把らんことを。

【題義】夕方池に舟を汎べ好景に遇うて此詩を作り呂處士に贈つたのである。

【詩意】岸淺く橋平かに池面が廣い。澄んだ水の上を飄然と舟を汎べて漕ぎまはれば、風が涼しくて扇の引き入るるに宜しく、岸の樹木は行舟の上に臥して看るに宜しい。俗塵を離れた佳境であるが來る人が稀だから誰も知らず、詩を善くする人が少いから此景を賦するに難い。呂叟の我に伴つて俱に釣せんことを希望する。

【字解】〔一〕漳浦老身　樂天自ら謂ふ。漳浦は漳河なり。

夢微之。

夜來攜手夢同遊。
晨起盈巾淚莫收。
漳浦老身三度病。
咸陽宿草八回秋。
君埋泉下泥銷骨。
我寄人間雪滿頭。
阿衞韓郎相次去。
夜臺茫昧得知不。

阿衞。微之小男。韓郎。微之愛壻。

微之を夢む

夜來手を攜へて同遊を夢る、
晨に起き巾に盈ちて淚收まる莫し。
漳浦の老身三度病み、
咸陽の宿草八回の秋。
君は泉下に埋もれて泥骨を銷す、
我は人間に寄せて雪頭に滿つ。
阿衞韓郎相次ぎて去る、
夜臺茫昧知るを得るや不や。

【題義】元稹（字は微之）を夢みた詩である。

【詩意】昨夜から君と手を攜へて俱に遊んだ夢を見たので、朝起きても淚が手巾に盈ちて抑へんやうもない。我は三年の間漳河のほとりに老病の身を寄せ、君は咸陽に葬られてから已に八年になる。君は黃泉の下に埋められて泥が骨を銷し、我は人間界に生存して頭髮雪の如くである。阿衞や韓郎も相次いで世を去つたが、墓穴の中は眞暗だから君は一向御存じあるまい。

【字解】〔二〕咸陽宿草　咸陽の古い草。微之の墓上の草。後集巻十一、元相公輓歌詞三首を見よ。

〔三〕夜臺　墓穴。茫昧は暗き貌。

感秋詠意

炎涼遷次速如飛。

秋に感じて意を詠ず

炎涼遷り次ぎて速なること飛ぶが如し、

【字解】〔一〕生衣　かたびらの

又脱生衣著熟衣。　又生衣を脱して熟衣を著る。
遶壁暗蛩無限思。　壁を遶る暗蛩限り無き思、
戀巣寒燕未能歸。　巣を戀うて寒燕未だ歸る能はず。
須知流輩年年失。　須らく知るべし流輩の年年失するを、
莫歎衰容日日非。　歎する莫れ衰容の日日非なるを。
舊語相傳聊自慰。　舊語相傳へて聊か自ら慰む。
世間七十老人稀。　世間七十老人稀なり。

【題義】秋に感じて作つた詩である。

【詩意】炎涼の相遷ることは飛ぶやうに速い。又夏著を脱いで冬著を著るやうになつた。四方の壁の外には處定めず蛩が鳴いて無限の愁思を催し、燕は南國に移り去らんとするが古巣を慕つて去りがてにしてゐる。同輩の友人の年年死んで行くのを見れば、吾が容貌の日増に衰へ行くのは、今更歎くには當らない。ただ人生七十古來稀といふ古人の言葉を引いて聊か自ら慰めてゐる。

老病幽獨。偶吟所懷

老病幽獨、偶〻所懷を吟ず

類、夏の著物なり。熟衣は綿入の類。寒衣なり。生熟は練ると練らぬとの別であらう。

【三】舊語　昔から傳ふる言葉。杜詩の人生七十古來稀を指す。

眼漸昏昏耳漸聾。　眼漸く昏昏として耳漸く聾す、
滿頭霜雪半身風。　滿頭の霜雪半身の風。
已將心出浮雲外。　已に心を將て浮雲の外に出で、
（雖擾擾云。是身如浮雲也。）
猶寄形於逆旅中。　猶ほ形を逆旅の中に寄す。
觴詠罷來賓閣閉。　觴詠罷み來りて賓閣閉ぢ、
笙歌散後妓房空。　笙歌散じて後妓房空し。
世緣俗念消除盡。　世緣俗念消除し盡く、
別是人間清淨翁。　別に是れ人間清淨の翁。

【題義】老病の爲に獨居幽棲し、感懷を詠じた詩である。

【詩意】目は段段見えなくなり耳は聞えなくなつて、白髮は頭に滿ち半身は不隨になつた。已に心は形骸の外に超然としてゐるが、猶ほ身を天地の間に寓してゐる。此頃は來り訪ふ客もないから觴詠することもなく、妓を解放してしまつたから笙歌もしない。世俗の因緣は全く絶えて、一個の清淨翁となり了つた。

【字解】【一】昏昏　暗き貌。【二】霜雪　白髮に喩ふ。風は中風といふ病氣。樂天の中風に罹つてゐたことは前に屢〻見ゆ。【三】浮雲　自注にある如く、身に喩ふ。【四】逆旅　宿屋。李白の春夜宴桃李園序に、夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客とあるを用ふ。【五】賓閣　賓客を入るる閣。【六】妓房　妓を置く部屋。樂天は病に罹つて妓を解放した。前の別柳枝詩を見よ。【七】人間　世間。

和楊尚書罷相後夏日遊永安水亭兼招本曹楊侍郎同行

楊尚書が相を罷めて後、夏日永安の水亭に遊び、兼ねて本曹の楊侍郎を招きて同じく行くに和す

道行無喜退無憂。
舒卷如雲得自由。
良冶動時爲哲匠。
巨川濟了作虛舟。
竹亭陰合偏宜夏。
水檻風涼不待秋。
遙愛翩翩雙紫鳳。
入同官署出同遊。

【訓義】楊尚書（戸部尚書楊嗣復は開成三年に同平章事となつた。即ち宰相の任である）が會昌元年宰相を罷めてから同曹の楊侍郎を招いて倶に夏日永安里の水亭に遊んだ詩に和したのである。

【詩意】楊尚書は進んで宰相となつても罷めて退いても喜びもしなければ憂へもせず、出處進退の自由なことは無心の雲のやうである。社會に活動しては賢宰相となり、功成れば退いて虛心無欲になつてゐる。尚書の竹亭は陰深くして夏に宜しく、水に臨める欄干は秋にならなくとも風が涼しい。楊尚書と楊侍郎とが入つては役所を同じうし出でては遊を同じうして、この水亭に遊ぶのを遙に喜んでゐる。

【字解】〔一〕道行　世に用ひられること。〔二〕舒卷　進退といふが如し。〔三〕哲匠　賢明なる大臣。王維の詩に、謀猷歸二哲匠一とある。〔四〕巨川　大川なり。書經の說命に、若濟二巨川一用汝作二舟楫一とある。君主の大臣の力を借るをいふ。虛舟は虛心無欲なるに喩ふ。易疏に以二忠信一濟レ難、若レ乘二虛舟一以涉二大川一也とある。〔五〕水檻　水亭の欄干。〔六〕翩翩　往來輕疾の貌。雙紫鳳は楊尚書と楊侍郎とに喩ふ。

在家出家

衣食支分婚嫁畢。
從今家事不相仍。
夜眠身是投林鳥。
朝飯心同乞食僧。
清唳數聲松下鶴。
寒光一點竹間燈。
中宵入定跏趺坐。
女喚妻呼都不應。

家に在りて出家す

衣食分を支へて婚嫁畢る、
今より家事相仍らず。
夜眠りては身は是れ投林の鳥、
朝に飯しては心は乞食の僧に同じ。
清唳數聲松下の鶴、
寒光一點竹間の燈。
中宵定に入りて跏趺して坐す、
女喚び妻呼べども都て應へず。

【字解】〔一〕清唳　清らかに鶴の鳴くこと。〔二〕入レ定　禪定に入る。跏趺は佛教の坐法。所謂結跏趺坐是なり。

【題義】在家の僧となつたことを述べた詩である。

【詩意】衣食は分相應に暮すに足り、子女の婚嫁も濟んだから、今後は家事の累ひは全くなくなる。夜は林に投じて棲む鳥の如く安かに眠り、朝は托鉢の僧のやうな氣輕な心持で飯を食ふ。聞く所は松下の鶴の清らかな聲、見る所は竹間の燈の寒光のみである。夜は坐禪を組んで入定し、女が喚ばうが妻が呼ばうが返事もしない。

夜涼

露白風清庭戸涼、
老人先著夾衣裳。
舞腰歌袖拋何處、
唯對無絃琴一張。

夜涼

露白く風清くして庭戸涼し、
老人先づ著る夾衣裳。
舞腰歌袖何の處にか拋つ、
唯對す無絃琴一張。

【題義】秋夜の景狀を述べた詩である。

【詩意】露白く風清くあたりが涼しく、老人には寒さを感ずるので夾衣裳を纏つた。こんな時は歌舞して樂むのによいが、已に妓を放遣してしまつたから、獨り淋しく一挺の無絃琴に對するのみである。

【字解】〔一〕露白　月光が露を照して白く見ゆるなり。〔二〕夾衣裳　左右から合せて著る衣服であらう。〔三〕舞腰歌袖　歌舞する美妓。樂天は開成四年風痺の疾を得てから妓女を放つた。前の別二樽妓一を見よ。〔四〕無絃琴　絃の切れてない琴。陶淵明は好んで無絃琴を彈いたといふ。

繼之尚書自余病來寄遺非一又蒙覽醉吟先生傳題詩以美之。今以此篇用伸酬謝

繼之尚書余の病んでより來寄遺すること一に非ず。又醉吟先生傳を覽られ、詩を題して以て之を美す。今此篇を以て用て酬謝を伸ぶ

衰殘與世日相疎、
惠好唯君分有餘。
茶藥贈多因病久、
衣裳寄早及寒初。
交情鄭重金相似、
詩韻清鏘玉不如。
醉傳狂言人盡笑、
獨知我者是尚書。

衰殘して世と日に相疎なり、
惠好唯君のみ分餘有り。
茶藥贈ること多きは病の久しきに因り、
衣裳寄すること早くして寒の初に及ぶ。
交情鄭重金相似たり、
詩韻清鏘玉も如かず。
醉傳の狂言人盡く笑ふ、
獨り我を知る者は是れ尚書のみ。

【題義】楊嗣復は樂天の病後種種の品物を贈つたことが一再でなく、又樂天自作の醉吟先生傳を讀んは太子少傅であつた。

【字解】〔一〕繼之尚書　戸部尚書楊嗣復、字は繼之。〔二〕醉吟先生傳　樂天の自序傳。〔三〕衰殘　衰廢なり。〔四〕清鏘　聲韻のよいこと。〔五〕醉傳　樂天自ら謂ふ。時に樂天は太子少傅であつた。

で詩を題して稱美した。因つて樂天は此詩を寄せて謝意を表したのである。

【詩意】僕は老衰して世間と交渉を絶つてゐるが、ただあなただけは分外の好意を表してくれる。病後久しきを歴るので藥や茶を度度贈つてくれ、衣裳も寒さに間に合ふやうに早く屆けてくれた。あなたの情義の堅いことは金の如く、詩韻の高いことは玉も及ばない。僕の狂言は世人の笑つて取合はない所であるが、あなただけは能く僕を理解してくれる。

五年秋。病後獨宿香山寺。三絶句

五年秋、病後獨り香山寺に宿す、三絶句

經年不到龍門寺。
今夜何人知我情。
還向暢師房裏宿。
新秋月色舊灘聲。

【題意】開成五年秋、病後に香山寺に宿した詩である。

【詩意】久しぶりで香山寺に來て宿した我が今夜の情は、到底他人の忖度を容れない所である。また暢師の僧房に在つて新秋の月色を望み、舊灘の聲を聽けば言ふに言はれぬ感興が湧く。

【字解】〔一〕香山寺　洛陽の龍門山の東に在る寺の名。〔二〕龍門寺　即ち香山寺なり。〔三〕暢師　香山寺の長老の名。房裏は僧房の中。

年を經て到らず龍門の寺、
今夜何人か我が情を知らん。
還た暢師の房裏に向つて宿す、
新秋の月色舊灘の聲。

〔二〕

飲徒歌伴今何在。
雨散雲飛盡不迴。
從此香山風月夜。
秪應長是一身來。

【詩意】以前の酒飲仲間や歌の相手は今何處へ往つたか、雨の如く散じ雲の如く去つて復た還らないのである。されば今後は常に我一人で香山の風月を來り賞する外はない。

飲徒歌伴今何か在る、
雨のごとく散じ雲のごとく飛びて盡く廻らず。
此より香山風月の夜、
秪應に長く是れ一身來るべし。

【字解】〔一〕飲徒　酒飲仲間。歌伴は歌の相手。

〔三〕

石盆泉畔石樓頭。
十二年來晝夜遊。
更過今年年七十。
假如無病亦宜休。

【詩意】石盆泉の畔や石樓の頭は余の殊に愛好して、十二年來晝も夜も能く來り遊んだ處である。更に今年を過ぐれば余も七十になるから、たとひ病なくとも當然官を退くべきである。

石盆泉の畔石樓の頭、
十二年來晝夜遊ぶ。
更に今年を過ぎなば年七十、
假如病無きも亦宜しく休すべし。

【字解】〔一〕石盆泉　香山寺の泉の名。

題香山新經堂招僧　香山の新經堂に題し僧を招く

烟滿秋堂月滿庭。　烟は秋堂に滿ち月は庭に滿つ、
香花漠漠磬泠泠。　香花漠漠磬泠泠。
誰能來此尋眞諦。　誰か能く此に來りて眞諦を尋ねん、
白老新開一藏經。　白老新に開く一藏經。

【語義】香山寺に新に建てた經堂に題して僧を招いた詩である。

【詩意】烟は堂に滿ち月光は庭に滿ち、香花はあちこちに散在して、磬を打つ音が盛である。白老の新に開いた此經堂に來て、佛理の眞諦を研究する者はないであらうか。

【字解】〔一〕漠漠　布列する貌。陸機の賦に、香泠泠而盈耳とある。〔二〕眞諦　佛語。眞實無妄なり。〔三〕白老　樂天自ら謂ふ。一藏經は一側の經堂。

偶題鄧公　公卽給事中庭之子也。飢　偶〻鄧公に題す

窮老病。退二居此村一。

偶因攜酒尋村客。　偶〻酒を攜へて村客を尋ぬるに因り、
聊復廻車訪薜蘿。　聊か復た車を廻らして薜蘿を訪ふ。
且値雪寒相慰問。　且雪の寒きに値ひて相慰問す、
不妨春煖更經過。　妨げず春煖かにして更に經過するを。

公は卽ち給事中庭の子なり、飢窮老病、此村に退居す。

【字解】〔一〕薜蘿　楚辭に、若有人兮山之阿、披二薜荔一兮帶二女蘿一とある。因つて隱者の服を薜蘿といひ、轉じて隱者の意に用ふ。鄧公を指して言ふ。

翁居山下年空老。　翁は山下に居りて年空しく老い、
我得人間事校多。　我は人間に事校多きを得たり。
一種共翁頭似雪。　一種翁と共に頭雪に似たり、
翁無衣食又如何。　翁は衣食無し又如何。

【語義】たまたま給事中（官名）鄧庭の子鄧公を訪うて作つた詩である。

【詩意】酒を攜へて村客を訪ふ序に又車を廻らして鄧公を訪うた。丁度雪の降るに値うて相慰問し、春暖の候更に來り訪はんことを期した。公は山下に隱居して空しく老い、我は世間にゐて俗務に逐はれてゐる。併し我は頭髮の雪の如く白いことは公と同じであるが、公の衣食にも窮してゐるのは氣の毒なことだ。

〔二〕人間　世間。

早入皇城贈王留守僕射　早に皇城に入り王留守僕射に贈る

津橋殘月曉沈沈。　津橋の殘月曉沈沈、
風露凄清禁署深。　風露凄清禁署深し。
城柳宮槐謾搖落。　城柳宮槐謾に搖落するも、

【字解】〔一〕津橋　天津橋。洛陽の橋の名。沈沈は茫茫といふが如し。〔二〕禁署　皇城なり。〔三〕搖落　霜枯れなり。

悲愁不レ到貴人心。　悲愁は到らず貴人の心。

【題義】朝早く宮城に入り、東都留守（官名）王僕射（僕射も官名）に贈つた詩である。

【詩意】天津橋畔に殘月が懸つて曉の色が茫茫としてゐる。風露が寒くて宮城が深邃である。宮庭の柳も槐も皆霜枯に遇うてゐるが、あなたのやうな貴人の心には悲愁の情は起らぬであらう。

寄題廬山舊草堂。兼呈二林寺道侶

廬山の舊草堂に寄題し、兼ねて二林寺の道侶に呈す

三十年前草堂主。　三十年前の草堂の主、
而今雖在鬢如絲。　而今在りと雖も鬢絲の如し。
登山尋水應無力。　山に登り水を尋ぬるに應に力無かるべし、
不似江州司馬時。　江州司馬の時に似ず。
漸伏酒魔休放醉。　漸く酒魔を伏して醉を放にするを休む、
猶殘口業未拋詩。　猶ほ口業を殘して未だ詩を拋たず。
君行過到鑪峰下。　君行きて鑪峰の下に過ぎ到らば、
爲報東林長老知。　爲に東林の長老に報じて知らしめよ。

【字解】〔一〕寄題　遠方から寄せて題するなり。〔二〕二林寺　廬山に東林寺と西林寺とある。道侶は修道の仲間。〔三〕而今　今。〔四〕口業　佛語。兩舌惡口妄言綺語をいふ。拋レ詩は詩を廢すといふが如し。〔五〕君　自注にある鑢知遜を指す。鑪峰は廬山の香鑪峰。

【題義】廬山の舊草堂に寄題し、併せて東林・西林二寺の僧侶に呈した詩で、自注にあるやうに鑢知遜侍御に託して題せしめたものである。

【詩意】三十年前に廬山草堂の主人であつた僕は、今も存命ではあるが鬢は白絲のやうになつた。されば山に登り水を尋ぬる氣力もなく、江州司馬たりし時のやうではない。近來は酒魔を降伏して醉を放にすることは休めたが、まだ口業が殘つてゐて詩を廢棄しない。君若し香鑪峰下に到らば、吾が爲に東林寺の長老に此事を知らせてくれ。

改レ業

先生老去飲無興。　先生老い去りて飲めども興無く、
居士病來閒有餘。　居士病み來りて閒餘有り。
猶覺醉吟多放逸。　猶ほ覺ゆ醉吟多く放逸なるを、
不如禪定更清虛。　如かず禪定の更に清虛なるに。

予先有醉吟先生傳。今故云。

【字解】〔一〕先生　醉吟先生。樂天自ら謂ふ。〔二〕居士　在家の僧。前に在レ家出家と題する詩あり。〔三〕柘枝紫袖　柘枝は舞の名。柘枝舞をなす妓をいふ。〔四〕羯鼓蒼頭　羯鼓は樂器の名。蒼頭は僕隸。

柘枝紫袖教丸藥。　柘枝の紫袖藥を丸めしめ、
羯鼓蒼頭遣種蔬。　羯鼓の蒼頭蔬を種ゑしむ。
却被山僧戲相問。　却つて山僧に戲れに相問はる、
一時改業意何如。　一時業を改む意何如と。

【題義】日日の業を改めて禪僧のやうな生活をしてゐることを敍した詩である。

【詩意】醉吟先生も近來は老い込んで飲んでも興が湧かないので、在家の僧に轉業してから大分閒暇が多くなつた。醉吟は放逸に過ぎ、禪定の清虛には劣るやうだ。因つて妓には柘枝を舞ふことをやめて丸藥を作らせ、奴僕には羯鼓を打つのをやめて野菜を作らせることにした。こんな生活ぶりをしてゐるので、「業を改めた御感想は如何で御坐る」などと、却つて山僧に冷かされる。

山下留別佛光和尙

山下にて佛光和尙に留別す

勞師送我下山行。　師を勞し我を送りて山を下りて行かしむ、
此別何人識此情。　此別何人か此情を識らん。
我已七旬師九十。　我は已に七旬師は九十、
尙知後會在他生。　尙ほ知る後會の他生に在らんことを。

【題義】山の下で佛光和尙に別れる時贈つた詩である。

【詩意】老師には御苦勞にも我を送つて山を下られた。別るるに臨んで予は他人の測り知ることの出來ないほど深い感情に驅られた。我は七十師は九十の老人だから、生前再び相會ふことは出來まいと思ふから。

【字解】〔一〕師　佛光和尙を指す。〔二〕七旬　七十歲。〔三〕後會　後日の會合。他生は來世。

山中五絕句　遊二高陽一。見二五物一各有レ所レ感。感興不レ同。隨レ興而吟。因成二五絕一。

山中の五絕句　高陽に遊び、五物を見て各〻感ずる所有り、感興同じからず、興に隨つて吟ず、因つて五絕を成す。

嶺上雲　嶺上の雲

嶺上白雲朝未散。　嶺上の白雲朝に未だ散せず、
田中青麥旱將枯。　田中の青麥旱して將に枯れんとす。
自生自滅成何事。　自ら生じ自ら滅し何事をか成す、
能逐東風作雨無。　能く東風を逐うて雨と作るや無や。

【題義】嵩山に遊び物を觀て感を起し五絕句を作つたので、第一首は嶺上の雲を見て作つたのである。

【詩意】朝見れば山巓の白雲は未だ散せずに居るが、今や畠の青麥は旱の爲に將に枯れんとしてゐる。あの雲は自ら生滅して何になるであらう。東風を逐うて雨となつてくれればよいのに。

石上苔

漠漠斑斑石上苔。
幽芳靜綠絶纖埃。
路傍凡草榮遭遇。
曾得七香車輾來。

【題義】石上の苔を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】點點と斑を成して石上に苔が生えてゐて、幽芳靜綠で少しの塵をも留めない。之に反して路傍の凡草は光榮に遇うて、七香車などに輾られてゐる。高士は貧にして俗人は榮えると同じである。

漠漠斑斑たる石上の苔、
幽芳靜綠にして纖埃を絶つ。
路傍の凡草は遭遇榮え、
曾て七香車の輾るを得來る。

【字解】〔一〕漠漠　布列する貌。斑斑は點點とまだらになる貌。〔二〕纖埃　少しの塵。〔三〕七香車　車の華貴なるもの。謝武帝の興地圖二書に、今贈二足下雲輪四望通幰七香車二乘一とある。

林下樗

香檀文桂苦雕鐫。
生理何曾得自全。

香檀文桂は雕鐫に苦む、
生理何ぞ曾て自ら全きを得ん。

【字解】〔一〕香檀　香木の名。文桂は美木の名。雕鐫は彫刻なり。〔二〕生理　自然の生命。

知我無材老樗否。
一枝不損盡天年。

我は無材の老樗なるを知るや否や、
一枝損せず天年を盡す。

【題義】林下の樗（莊子逍遙游篇に、吾有二大樹一、人謂二之樗一、其大本擁腫而不レ中二繩墨一、其小枝卷曲而不レ中二規矩一、立二之塗一匠者不レ顧とある）を觀て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】紫檀や桂は美質を持つてゐるから彫刻などされて自然の生命を害される。この俺は何の取柄もない老樗のやうなものだから、一枝も傷けられずに天壽を全うすることが出來る。

【字解】〔三〕天年　天から與へられた壽命。

澗中魚

海水桑田欲變時。
風濤翻覆沸天池。
鯨呑蛟鬪波成血。
深澗遊魚樂不知。

海水桑田變せんと欲する時、
風濤翻覆天池に沸く。
鯨呑み蛟鬪ひて波は血と成る、
深澗の遊魚樂んで知らず。

【字解】〔一〕海水桑田欲變時　海が變じて桑畠となることで時勢の變遷をいふ。神仙傳に、麻姑謂二王方平一曰、自二接侍一以來、見二東海三變爲二桑田一、向到二蓬萊一、水乃淺二於往者一略半也、豈復爲レ陵乎とある。

【題義】澗中の魚を觀て所感を述べた詩で、唐宋詩醇に暗指二甘露之事一とある。

〔二〕天池　大海なり。莊子逍遙游篇に、南冥天池也とある。

【詩意】大海が變じて桑畠となるといふやうな時には、風濤が沸き起つて天池も爲に覆へるやうである。その時には鯨や蛟は相呑み相闘つて血を流すけれども、深い淵に潜んでゐる魚は何の苦もなく呑氣に樂んでゐる。人も亦然り。顯榮の地位に居るものは世の變轉に遇うて四苦八苦するが、下寮に沈淪してゐるものは至つて呑氣である。

洞中蝙蝠

千年鼠化白蝙蝠。　千年の鼠は化す白蝙蝠、
黑洞深藏避網羅。　黑洞に深く藏れて網羅を避く。
遠害全身誠得計。　害に遠かり身を全うして誠に計を得たるも、
一生幽闇又如何。　一生幽闇又如何。

洞中の蝙蝠

【字解】〔一〕網羅　あみ。

【題義】洞窟中の蝙蝠を觀て所感を述べた詩である。

【詩意】千年を經た鼠は化して白い蝙蝠となり、洞窟の奥深く藏れて網に羅らないやうにしてゐる。なるほど害に遠かり身を全うするは結構のやうだけれども、一生暗闇の中で過すのはあまり結構でもない。

自戲三絶句

閒臥獨吟。無二人酬和一。聊假二身心一相戲。往復偶成三三章一。

自ら戲る三絶句　閒臥獨吟するも人の酬和するなし、聊か身心を假りて相戲れ、往復偶ー三章を成す。

心問身

心問身云何泰然。　心身に問ひて云ふ何ぞ泰然たる、
嚴冬暖被日高眠。　嚴冬暖被日高けて眠る。
放君快活知恩否。　君に放して快活せしむること恩を知るや否や、
不早朝來十一年。　早に朝せざるより來十一年。

【字解】〔一〕暖被　暖な夜具。
〔二〕君　身を指して言ふ。

【題義】自ら戲れ三絶句を作る。其一は心が身に問ふ詩である。

【詩意】心が身に問うた。「君は冬暖かに夜具にくるまつて、日の高く升るまで安安と眠つてゐる。君にこんな快適を得しめた吾が恩を知つてゐるかどうか。閒職に在つて朝早く參朝する必要がなくなつてから最早十一年になる」と。

身報心

心是身王身是宮。　心は是れ身の王身は是れ宮、
身心に報ず

【字解】〔一〕君　心を指して言

君今居在我宮中。　君今居して我が宮中に在り。
是君家舍君須愛。　是れ君が家舍をば君須らく愛すべし、
何事論恩自説功。　何事ぞ恩を論じて自ら功を説く。

【題義】身が心に答へた詩である。

【詩意】心は一身の王で身は宮殿のやうなものだ。現に君は今吾が宮中に居るのだ。されば我は君の住む家だから須らく愛すべきである。何も恩に著せて己の功を説き立てるには及ぶまい。

心重答身

因我疎慵休罷早。　我が疎慵なるに因つて休し罷むること早し、
遣君安樂歲時多。　君を安樂ならしむること歲時多し。
世間老苦人何限。　世間老いて苦む人何ぞ限らん、
不放君閒奈我何。　君に放して閒ならしめざるも我を奈何せん。

【題義】心が重ねて身に答へた詩である。

【詩意】我が疎懶の性から早く隱退し、君をして久しく安樂ならしめた。世間には老いて苦む人が數ふ。

【字解】〔一〕君。身を指して言ふ。

限りもなく多いのだ。君をして閒ならしめなかつた所が、俺に故障は言へまいではないか。されば俺の恩を謝すべきである。

會昌元年春五絶句

病後喜過劉家

會昌元年春五絶句

忽憶前年初病後。　忽ち憶ふ前年初めて病みし後、
此身甘分不銜杯。　此身分に甘んじて杯を銜まず。
誰能料得今春事。　誰か能く料り得ん今春の事、
又向劉家飲酒來。　又劉家に向ひて酒を飲み來らんとは。

【題義】會昌元年春に作つた五首の絶句で、第一首は病後に劉禹錫の家に過ぎりしことを喜んだ詩である。

【詩意】憶へば前年初めて病を發してからは、己の分に甘んじて一切酒を飲まなかつた。所が今年の春は劉禹錫の家を訪うて、喜びのあまりつい酒を飲んでしまつた。

贈舉之僕射　今春與僕射爲寒食之會

三　舉之僕射に贈る　今春僕射と三たび寒食の會を爲す。

雞毬餳粥屢開筵。　雞毬餳粥屢〔一〕筵を開く、
談笑謳吟閒管絃。　談笑謳吟して閒に管絃す。
一月三回寒食會。　一月三回〔二〕寒食の會、
春光應不負今年。　春光應に今年に負かざるべし。

【題義】王起に贈つた詩である。

【詩意】雞毬や餳粥を具へて屢〔一〕筵を開き、談笑したり謳吟したり管絃を弄したりした。一個月の中に三回も寒食の會を催すなどは、聖天子卽位の春に負かないと申すものだ。

【字解】〔一〕畢之僕射　王起、字は畢之。尙書左僕射に累官し、山南西道節度使に終る。〔二〕雞毬　雞肉の團子。餳粥は甘き粥。〔三〕寒食會　冬至から百五日目を寒食といふ。この日相會して酒を飲む。

盧尹賀夢得會中作

盧尹が夢得を賀する會中の作

病聞川守賀筵開。　病みて聞く川守賀筵の開くを、
起伴尙書飲一杯。　起きて尙書に伴ひて一杯を飲む。
任意少年長笑我。　任意少年の長く我を笑ふを、
老人自覔老人來。　老人は自ら老人を覔め來る。

【題義】河南尹盧貞の劉禹錫（字は夢得、會昌元年に檢校禮部尙書、太子賓客分司に任ぜられた）の任官を賀する會上で作つた詩である。

【詩意】病中、河南尹盧氏が夢得の任官を賀する筵を開くと聞き、病を强めて起き夢得に伴つて祝杯を飲んだ。少年輩は長く我を笑ふであらうが、そんなことは敢て意に介するに足らない。老人は老人を覔めるのは當然だから。

【字解】〔一〕川守　三川の守。卽ち河南尹をいふ。〔二〕尙書　劉禹錫を指す。

題朗之槐亭

朗之の槐亭に題す

春風可惜無多日。　春風惜む可し多日無きを、
家醞唯殘軟半瓶。　家醞唯殘る軟半瓶。
猶望君歸同一醉。　猶望む君歸りて同じく一醉せんことを、
籃舁早晚入槐亭。　籃舁早晚槐亭に入らん。

【題義】皇甫朗之の槐亭に題した詩である。

【詩意】春も最早殘り少くなり、家釀の酒も瓶に半分たらず殘つてゐるばかりだ。僕は君と俱に一醉せんことを望んでゐる。いつ頃君は駕籠に乘つて槐亭に歸つて來るであらうか。

【字解】〔一〕家釀　自家釀造の酒。軟半は半分たらず。小半なり。〔二〕籃舁　竹片を編んで作つた駕籠。早晚はいつか。

勸夢得酒

誰人功畫麒麟閣。
何客新投魑魅鄉。
兩處榮枯君莫問。
殘春更醉兩三場。

夢得に酒を勧む

誰人か功ありて畫かるる麒麟閣、
何の客か新に投せらるる魑魅の鄉。
兩處の榮枯君問ふこと莫れ、
殘春更に醉ふこと兩三場せん。

【題義】劉禹錫に酒を勧めた詩である。

【詩意】功があつて其像を麒麟閣に畫かれる人もあれば、罪を蒙つて僻遠の地に流される人もある。かかる榮枯盛衰は敢て問ふを要しない。それよりも春を惜む宴を二三回も開かうではないか。

【字解】〔一〕麒麟閣　漢の宣帝功臣十一人の像を麒麟閣に畫く。〔二〕魑魅鄉　僻遠の地をいふ。〔三〕兩處　麒麟閣と魑魅鄉と。〔四〕兩三場　二三回といふが如し。

過裴令公宅二絶句

裴令公在日。常同聽楊柳枝歌。每遇雪天。無非招宴。二物如故。因成感情。

裴令公の宅に過ぎる二絶句　裴令公在りし日、常に同じく楊柳枝の歌を聽き、雪天に遇ふ毎に、招宴に非ざるなし。二物故の如し、因つて感情を成す。

風吹楊柳出墻枝。
憶得同歡共醉時。
每到集賢坊北過。

風は吹く楊柳の墻を出づる枝、
憶ひ得たり同じく歡して共に醉ひし時。
集賢坊北に到りて過ぐる毎に、
不曾一度不低眉。
曾て一度として眉を低れずんばあらず。

【題義】裴度の死後其宅を訪うて作つた詩である。

【詩意】風が墻から出てゐる柳の枝を吹くのを見て、共に歡醉した昔の事を憶ひ出した。洛陽の集賢坊北を通るたびに、一度として眉を低れて愁へないことはない。

【字解】〔一〕裴令公　中書令裴度。〔二〕集賢坊　洛陽の里の名、裴度の宅の在る處。

〔一〕

梁王舊館雪濛濛。
愁殺郟枚二老翁。
假使明朝深一尺。
亦無人到兎園中。

〔二〕

梁王の舊館雪濛濛、
愁殺す郟枚二老翁。
假使明朝深さ一尺なるも、
亦人の兎園の中に到ること無からん。

【字解】〔一〕梁王　漢の梁の孝王。當時の文士の保護者であつた。濛濛は雪の盛に降る貌。〔二〕郟枚　郟陽と枚乘。梁王の保護を受けた文士。倩りて樂天と劉夢得とに比す。〔三〕兎園　梁王の苑の名。謝惠連の雪賦に梁王不悅、游於兎園、乃催枚乘曰、盍命賓友、召鄒生、延枚叟とある。

【詩意】裴令公の舊宅のあたりに雪が濛濛と降つて、嘗て恩顧を蒙つた我と夢得とを愁へしめる。若し公が生きて居られるならば、必ず我等を招いて雪見の宴を開くであらうが、今は此世の人でないから、明朝一尺も積つた所が、兎園の會を開くこともない。誠に殘念なことである。

百日假滿。少傅官停。自喜言懷

百日假滿ち、少傅官停まる。自ら喜んで懷を言ふ

長告今朝滿十旬。
從茲蕭灑便終身。
老嫌手重拋牙笏。
病喜頭輕換角巾。
疏傅不朝懸組綬。
向平無累畢婚姻。
人言世事何時了。
我是人間事了人。

【題義】百日の休暇を賜はり、其期限が滿ちても病氣がなほらなかつたので、太子少傅の官を罷めることになつた。因つて自ら喜んで感懷を述べた詩である。

【詩意】百日の休暇の期限が滿ちて官を退くことになつた。今後はさつぱりと氣輕になつて身を終ることが出來る。老いては重いのを嫌つて象牙の笏を棄て、病の爲に頭の輕いのを喜んで角巾に換へた。

【字解】【一】長告　休暇を告といふ。長期の休暇。十旬は百日。【二】蕭灑　さつぱりと氣輕になること。【三】牙笏　象牙のシャク。【四】角巾　頭巾の稜角あるもの。隱者のかぶるもの。【五】疏傅　漢の太子少傅たりし疏受。樂天自ら比す。組綬は印綬。【六】向平　後漢の向長、字は子平。建武中男女嫁娶既に畢る。遂に意を肆にして五嶽名山に遊び、終る所を知らず。【七】人間　世間。

もう明日からは疏受と同じく印綬を懸けて隱退したのだから、參朝する必要もなく、向子平と同じく子女の婚嫁も畢つたから何の累ひもない。人は世間の俗事はいつまでも果つる時がないと言ふが、俺は立派に世事を濟し了つた。

早熱

時楊李二相各貶潮州

畏景又加旱。火雲殊未收。
籬喧饑有雀。池涸渴無鷗。
岸幘頭仍痛。褰裳汗亦流。
若爲當此日。遷客向炎州。

【題義】炎熱の時に先だつて到りしことを述べた詩である。

【詩意】炎熱烈しき夏の日に旱魃さへ加はり、燒ける様な雲がいつまでも收まらない。籬のあたり

【字解】【一】畏景　夏の日をいふ。左傳に趙賓冬日之日也、趙盾夏日之日也とあり、注に冬日可愛、夏日可畏とある。【二】火雲　夏の雲をいふ。岑參の詩に三峯火雲蒸とある。【三】岸幘　かぶり物を脱ぎて額を露すこと。【四】遷客　貶流せらるる人。會昌元年三月、宰相楊嗣復は潮州刺史に、宰相李珏は袁州刺史に貶せられた。炎州は炎熱烈しき州。

が熱くて雀が飢ゑ、池の水が涸れて鵶がゐなくなつた。帽子を脱いでも頭が痛み、裳を褰げても汗が流れる。かかる極暑の折も折、楊・李二相の炎熱の地に貶謫されるのは氣の毒なことだ。

題崔少尹上林坊新居

崔少尹が上林坊の新居に題す

坊靜居新深且幽。　坊靜に居新にして深く且幽なり、
忽疑縮地到滄洲。　忽ち疑ふ縮地して滄洲に到るかと。
宅東籬缺嵩峯出。　宅東籬缺けて嵩峯出で、
堂後池開洛水流。　堂後池開けて洛水流る。
高下三層盤野徑。　高下三層野徑を盤り、
沿洄十里汎漁舟。　沿洄十里漁舟を汎ぶ。
若能爲客烹雞黍。　若し能く客の爲に雞黍を烹ば、
願伴田蘇日日遊。　願はくは田蘇に伴ひて日日遊ばん。

【題義】河南少尹崔氏の上林坊（洛陽の坊の名）の新宅に題した詩である。

【詩意】上林坊は閑靜な處で、崔少尹の新宅は最も幽深な位置を占めてゐる。一たび其新宅を訪へば縮地の術に由つて仙境に來たかと疑ふほどである。宅の東の籬の缺けた所からは嵩山が見え、堂の後には池があつて洛水が流れ込んでゐる。高低三層の地を上下して野徑を盤り、十里の流に沿うて漁舟を汎べて遊ぶことが出來る。崔少尹が若し能く客の爲に雞を烹たり、黍の飯をたいたりして御馳走してくれるならば、毎日少尹に伴つて遊びたいものだ。

【字解】〔一〕縮地　遠きを化して近くすること。神仙傳に、費長房有二神術一、能縮二地脈一、千里在二目前一宛然、放之復舒如レ舊とある。滄洲は仙人の居る處。〔二〕嵩峯　山の名。嵩山。〔三〕田蘇　晉の賢人。左傳襄公七年に見ゆ。以て崔少尹に比す。

新溯亭

煙蘿初合溯新開。　煙蘿初めて合ひて溯新に開く、
閒上西亭日幾回。　閒に西亭に上ること日に幾回ぞ。
老病歸山應未得。　老病山に歸ること應に未だ得ざるべし、
且移泉石就身來。　且く泉石を移し身に就いて來る。

【題義】新溯の西に新亭を營んだことを述べた詩である。

【詩意】新に開いた溯には煙蘿が繁つて大分風情を增した。因つて幾回となく西亭に上つて遊賞する。老病の身ではあるがまだ隱遁することは出來ないから、且く泉石を移し我が身に就けて樂んでゐるのだ。

【字解】〔一〕煙蘿　煙霧のかかつた蔓草。

對酒有懷。寄李十九郎中　酒に對して懷あり、李十九郎中に寄す

往年江外拋桃葉。[一]　往年は江外に桃葉を拋ち、
去歲樓中別柳枝。[二]　去歲は樓中に柳枝に別る。
寂寞春來一杯酒。　寂寞たり春來一杯の酒、
此情唯有李君知。　此情唯李君の知る有り。
吟君舊句情難忘。　君が舊句を吟じて情忘れ難し、
風月何時是盡時。　風月何の時か是れ盡くる時ぞ。

（結之也。）（樊素也。）

李君嘗有悼故妓詩云。直疑人世無風月。恰是心中忘却時。今故云。

【題義】酒に對して感ずる所あり。李郎中（十九は輩行）に寄せた詩である。

【詩意】先年は江南で桃葉といふ妓を解放し、去年は洛陽で樊素・小蠻の二妓を解放した。されば春になつて酒を飲んでも一向興が湧かない。此情を知る者は唯李君のみである。因つて君の舊詩を吟じ妓を思うて忘れることが出來ない。いつになつたら忘れられるであらう。

【字解】[一] 桃葉　妓の名。
[二] 柳枝　樊素・小蠻の二妓。前の別「柳枝」を見よ。

楊六尚書頻寄新詩。詩中多有思閒相就之志。因書鄙意。報而諭之

楊六尚書頻に新詩を寄す。詩中多く閒を思ひ相就かんとするの志あり。因つて鄙意を書し、報じて之を諭す

君年殊未及懸車。　君が年は殊に未だ懸車に及ばず、
未合將閒逐老夫。　未だ合に閒を將て老夫を逐ふべからず。
身健正宜金印綬。　身健にして正に金印綬に宜しく、
位高方稱白髭鬚。　位高くして方に白髭鬚に稱ふ。
若論塵事何由了。　若し塵事を論ぜば何に由りてか了らん、
但問雲心自在無。　但問ふ雲心自在なりや無や。
進退是非俱是夢。　進退是非に是れ夢、
丘中闕下亦何殊。　丘中と闕下と亦何ぞ殊ならん。

【題義】楊汝士が屢〻新作の詩を寄せた。その詩に官を退いて閒地に就きたいと述べてある。因つて鄙意を述べて諭したといふのである。

【字解】[一] 楊六尚書　楊汝士を指して言ふ。前に屢〻見ゆ。[二] 懸車　車を懸けて用ひざるを示す。致仕すること。年七十にして致仕する定めである。[三] 老夫　樂天自ら謂ふ。[四] 塵事　世間の俗事。[五] 雲心　閒雲の如き心。[六] 丘中　山中なり。

【詩意】君はまだ七十にはならないから、僕のやうに官を退いて閑地に就くことは出來ない。まだ體も達者で金印綬を佩ぶるに宜しく、位も高くて白髪に相應してゐる。若し世事を彼此言ふならば、何時になつても了ることはないのだから、要は心の閑雲の如く自在なりや否やが問題なのである。進退是非俱に一場の夢に過ぎないと悟りさへすれば、山中にゐても宮中にゐても格別の相違はないのだ。何も官を退くには及ぶまい。

偶吟自慰。兼呈夢得　予與夢得同甲子。今俱七十。

偶吟して自ら慰め、兼ねて夢得に呈す　予夢得と甲子同じ、今俱に七十。

且喜同年滿七旬。
莫嫌衰病莫嫌貧。
已爲海內有名客。
又占世間長命人。
耳裏聲聞新將相。
眼前失盡故交親。

【字解】〔一〕七旬　七十歳。〔二〕耳裏　耳の中。〔三〕故交親　舊友。

且喜ぶ同年七旬に滿つるを、
衰病を嫌ふ莫れ貧を嫌ふ莫れ。
已に海內有名の客と爲り、
又世間長命の人を占む。
耳裏聲聞ゆ新將相、
眼前失ひ盡す故交親。

尊榮富壽難兼得。
閒坐思量最要身。

【題義】偶吟して自ら慰め、兼ねて劉禹錫（字は夢得）に呈した詩である。

【詩意】君も僕も俱に七十の坂を越したのは喜ぶべきことで、衰病や貧困などは嫌ふ所ではない。已に天下の名士ともなり、又世間の長壽者ともなつたのだから。耳には壯者の新に將相に任ぜられたと由を聞き、目には舊友の死亡し盡きるの見る。尊榮と長壽とは兼ねることの出來ないものだといふことは、お互に閒坐して考へて見る必要がある。

尊榮富壽は兼ね得難し、
閒坐思量最要の身。

〔四〕思量　考へて見る。

寄潮州楊繼之

潮州の楊繼之に寄す

相府潮陽俱夢中。
夢中何者是窮通。
他時事過方應悟。
不獨榮空辱亦空。

【題義】もと宰相であつた楊嗣復（字は繼之）が潮州刺史に貶せられたのに寄せた詩である。

【字解】〔一〕相府　宰相なり。潮陽は潮州刺史。〔二〕窮通　榮辱といふが如し。〔三〕他時　後日。

【詩意】宰相となるも潮州刺史に貶せらるるも、すべて浮世一場の夢である。夢だとすれば敢て榮辱を論ずる價値はない。事が過ぎ去つてから後、ただ榮の空しきのみならず、辱も亦空しいことがわかるであらう。

雪暮偶與夢得同致仕裴賓客王尚書飲

雪暮偶一夢得、同じく致仕せる裴賓客、王尚書と飲む

黄昏慘慘雪霏霏。　黄昏慘慘雪霏霏、
白首相歡醉不歸。　白首相歡して醉へども歸らず。
四箇老人三百歳。　四箇の老人三百歳、
人間此會亦應稀。　人間此會亦應に稀なるべし。

【題義】雪の日の暮に劉禹錫（字は夢得）及び同時に官を退いた太子賓客裴洽（後集巻十四の春夜宴席上戲贈二裴潮州一及び三月三日祓二禊洛濱一を見よ）吏部尚書王起と飲んだ時の詩である。

【詩意】夕暮の空が愁を含んで雪のさらさらと降る時、白髪の老人が歡宴して醉つても退散しない。四人の年齢を合せると三百歳になる。こんな會は世間にも稀であらう。

【字解】〔一〕慘慘　かなしげなる貌。霏霏は雪の降る貌。〔二〕白首　しらがあたまの老人。〔三〕人間　世間。

雪朝乘興欲詣李司徒留守先以五韻戲之

雪の朝興に乘じて李司徒留守に詣らんと欲し、先づ五韻を以て之に戲る

夜寒生酒思、曉雪引詩情。　夜寒酒思を生じ、曉雪詩情を引く。
熱飲一兩盞、冷吟三五聲。　熱飲一兩盞、冷吟三五聲。
鋪花連地凍、銷玉畏天晴。　花を鋪きて地に連りて凍り、玉を銷して天の晴るるを畏る。
好拂烏巾出、宜披鶴氅行。　烏巾を拂つて出づるに好く、鶴氅を披て行くに宜し。
梁園應有興、何不召鄒生。　梁園應に興有るべし、何ぞ鄒生を召さざる。

【字解】〔一〕烏巾　黒頭巾。〔二〕鶴氅　鳥羽を析いて作つた合羽。晉書に王恭清操過人、美二容儀一被二鶴氅裘一涉レ雪而行、孟昶望見之、歎曰、此眞神仙中人也とある。〔三〕梁園　梁の孝王の園。李司徒を梁の孝王に比して言ふ。前の過二裴令公宅一二絶句を見よ。〔四〕鄒生　梁の孝王の保護を受けた鄒陽。樂天自ら比す。

【題義】雪の降つた朝、興に乘じて司徒東都留守李氏の宅に詣らんとして、先づ此五韻十句の詩を寄せて戲れたのである。

【詩意】夜の寒さは飲酒を催し、曉の雪は詩情を引起す。因つて熱燗の酒を一二杯傾け、三五聲微吟した。一面に凍つて花を敷きたるが如く、天が晴れて玉の消失するのを畏れる。頭巾の塵を拂ひ鶴氅を著て出掛けるに宜しい。あなたも定めて此雪に興を發したであらうが、なぜ僕をお召しにならな

いのであらう。

贈思黯

前以履道新小灘詩寄思黯。報章云。請向歸仁砌下看。思黯歸仁宅亦有小灘。

思黯に贈る　前に履道の新小灘の詩を以て思黯に寄す。報章に云く、請ふ歸仁砌下に向つて看よと。思黯歸仁の宅に亦小灘有り。

爲憐清淺愛潺湲。
一日三回到水邊。
若道歸仁灘更好。
主人何故別三年。

【題義】牛僧孺（字は思黯）に贈つた詩である。僧孺は東都留守として洛陽にゐたが、開成三年九月に徵されて左僕射となり洛陽を去つた。

【詩意】吾が履道（洛陽の里の名）の邸中に在る小灘の、清淺にして潺湲として流れてゐるのを愛し、余は一日に三回も水邊に遊ぶのである。若し君の歸仁里の灘の方がもつと好いといふならば、なぜ君は三年も別れてゐるのだ。

【字解】〔一〕潺湲　水の流るる聲。〔二〕歸仁　洛陽の里の名。牛僧孺の第在り。〔三〕主人　牛僧孺を指す。

聽歌六絕句

歌を聽く、六絕句

聽都子歌

詞云。試問常娥更要無。

都子の歌を聽く　詞に云く、試みに問ふ常娥更に要するや無やと。

都子新歌有性靈。
一聲格轉已堪聽。
更聽唱到常娥字。
猶有樊家舊典刑。

【題義】歌を聽いて作つた六首の絕句で、第一首は都子の歌を聽いた時の作である。

【詩意】都子の歌には大に精神が籠つてゐて、一聲格調を轉ずれば已に傾聽するに足るものがある。更に常娥云云といふ處に唱へ到るのを聽くに、樊素の型が殘つてゐる。

【字解】〔一〕都子　妓の名であらう。〔二〕性靈　精神のこもつてゐること。〔三〕格　格調。〔四〕常娥　嫦娥に同じ。古の仙人。搜神記に、羿請不死之藥於西王母、嫦娥竊之以奔月とある。〔五〕樊家　樂天の歌妓樊素。樂天は開成四年に諸妓を解放した。舊典刑は、もとのかた。

樂世　一名六么

管急絃繁拍漸稠。
綠腰宛轉曲終頭。
誠知樂世聲聲樂。

【字解】〔一〕拍　度曲なり。歌ふ者拍を按じて以て唱ふ。〔二〕綠腰　六么に同じ。宛轉は委曲隨和の貌。

老病人聽未免愁。　老病の人聽けば未だ愁を免れざるを。

【題義】樂世、卽ち六幺の曲を歌ふのを聽いて作つた詩である。

【詩意】笛が急に絃の手がこんで拍も稠く、六幺の曲の終りざはは宛轉として誠に宜しい。併し此曲の聲聲の樂みも老病の人が聽けば、矢張愁を免れない。

水調　第五編乃五言調。調韻最切。

五言一遍最殷勤。　五言一遍最も殷勤なり、
調少情多似有因。　調少く情多くして因有るに似たり。
不會當時翻曲意。　會せず當時翻曲の意、
此聲腸斷爲何人。　此聲腸は斷つ何人の爲ぞ。

【題義】水調の曲を聽いて作つた詩である。此曲は凡て十一疊より成り、前五疊を歌となし、後六疊を入破となし、其歌の第五疊は五言で聲調最も怨切である。五言一遍最も殷勤とは是を謂つたのである。

【詩意】水調の曲の五言詩の部分は最も情味が深い。調が少くて情が多いのは大に因る所があるのであらう。隋の煬帝が汴河を開いて自ら水調を作つたと傳へられてゐるが、當時此曲を作つた眞意がわからない。此調が人の腸を斷たしめるのは他にあらず、煬帝其人の爲である。

【字解】〔一〕一遍　一疊といふに同じ。殷勤は情の深いこと。〔二〕翻曲　前集卷十二の二四六頁を見よ。

想夫憐　王維右丞の詞に云く、秦川一半夕陽開くと。此句尤も佳なり。

玉管朱絃莫急催。　玉管朱絃急に催す莫れ、
容聽歌送十分杯。　歌を聽いて送る容し十分の杯。
長愛夫憐第二句。　長く愛す夫憐第二の句、
請君重唱夕陽開。　請ふ君重ねて唱へよ夕陽の開くを。

【題義】想夫憐の曲を聽いて作つた詩である。この曲の中で尙書右丞（官名）王維の詞の秦川一半夕陽開くといふのが尤も佳い。

【詩意】笛や絃であまりにせき立てるな。先づ歌を聽いてから、なみなみとついだ杯を君に送るであらう。想夫憐の第二の句は、いつ聽いても實によい。願はくは君もう一度秦川一半夕陽開くの處を歌つてくれ。

何滿子　開元中。滄州有二歌者何滿子一。臨レ刑進二此曲一以贖レ死。上竟不レ免。

何滿子　開元中、滄州に歌者何滿子なるもの有り、刑に臨み此の曲を進めて以て死を贖ふ、上竟に免さず。

世傳滿子是人名。
臨就刑時曲始成。
一曲四(一)調歌八疊。
從頭便是斷腸聲。

世に傳ふ滿子は是れ人名、
刑に就く時に臨みて曲始めて成ると。
一曲四調歌八疊、
頭より便ち是れ斷腸の聲。

【題義】何滿子の曲を聽いて作つた詩である。

【詩意】何滿子といふのはもと人の名で、刑に就く時に此曲が始めて成つたと世に傳へられてゐる。一曲が四詞から成り、それを八回疊ねて歌ふのであるが、首から終まで人の腸を斷たしめる。

【字解】(一) 四調　一に四詞に作る。八疊は八回かさねて歌ふこと。

離別難

綠楊陌上送行人。
馬去車廻一望塵。
不覺別時紅淚盡。
歸來無淚可霑巾。

離別難

綠楊陌上行人を送る、
馬去り車廻りて一に塵を望む。
覺えず別るる時紅淚盡き、
歸來淚の巾を霑すべき無し。

【題義】離別難の曲を聽いて作つた詩である。

【詩意】青柳の絲の垂るる陌に行人を送り、馬車の去るのを見送つて熱心に車塵を望み、覺えず別るる時に涙が盡きて、歸つてからは巾を霑すべき涙も出ない。

閒樂

坐安臥穩輿平肩。
倚杖披衫遶四邊。
空腹三盃卯(一)後酒。
曲肱一覺醉中眠。
更無忙苦吟閒樂。
恐是人間(三)自在天。

閒樂

坐すること安く臥すこと穩かにして輿は肩に平かなり、
杖に倚り衫を披て四邊を遶る。
空腹三盃卯後の酒、
曲肱一覺醉中の眠。
更に忙苦無くして閒樂を吟ず、
恐らくは是れ人間の自在天。

【題義】閒中の樂を詠じた詩である。

【詩意】坐臥共に安穩で、駕籠に乘れば駕籠も動搖せず、杖に倚り衫を著て四邊を遊びまはる。空腹に朝酒を三杯も飲んで、肱を枕に醉眠し、やがて其夢が覺め、起きても此といふ仕事もなく、唯閒吟するのみである。是こそ人世の自由境とでも謂ふのであらう。

【字解】(一) 卯後酒　朝飲む酒。卯は今の午前六時。(二) 曲肱　肱を曲げて枕とする。(三) 人間　世間。自在天は自由境といふが如し。

309
65

終